

500
46



始



500

46



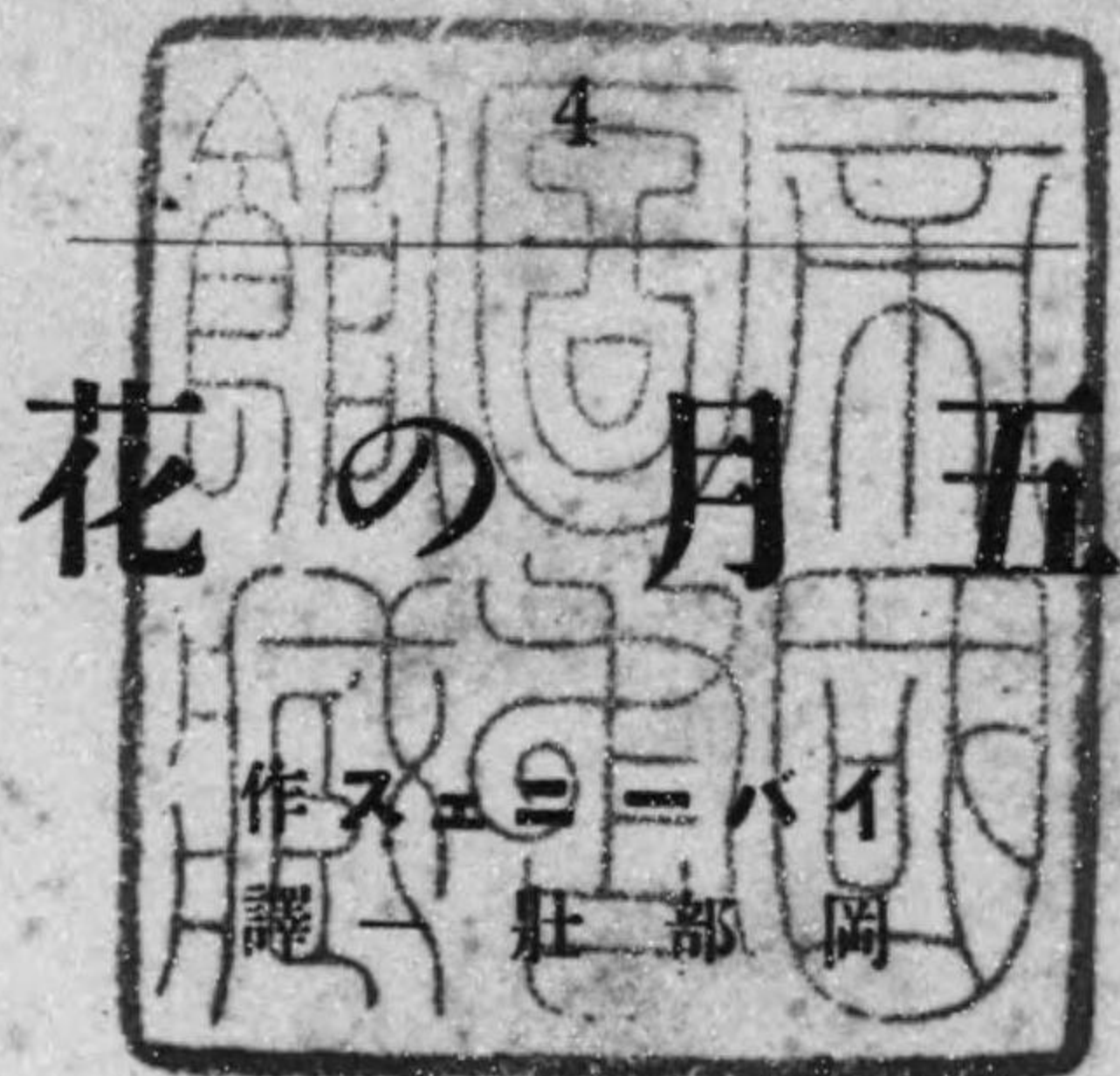
西 泰
書叢藝文新最

4

500-46

~~575-72~~

書叢藝文新最 泰西



版出社潮新

『五月の花』の巻頭に

翻譯權を得て、忠實に原文から譯された西班牙文學が始めて單行本となつて日本文壇に紹介される、それだけでも岡部君のこの譯には意義がなくなる。けれど最も重大な點は、この作がビセンテ・ブラスコ・イバニエスの或る意味に於ける處女作で、且つその傑作の一つといふところにある。

ブラスコ・イバニエスの作物は彼の生活の雰圍氣に區切をつけた五つの時代に從つて、明白に五期に分つことが出来る。

第一期は千八百九十四年から千九百二年に至る、彼が郷里バレンシアで急進主義の新聞エル・プエブロの社主兼主筆をした時代のもので、『バレンシア物語集』『罪せられた女』の二短篇集と、『素米喰らひの常馬車』『五月の花』『百姓小屋』『蜜柑の里』『都姫ソニカ』『葦と泥』の六小説とがそれだ。最後の二小説を除いた全部が——短篇も長篇も——エル・プエブロの讀物として書かれたのだが、孰れも材をバレンシアかその附近の陸上海上に取つた郷土文學といつてよく、この期を通じての特色は地方色の鮮明と情操のナイーブな點とだ。

第二期は代議士として殆んど馬德里にばかり住むやうになつてから南米アルゼンチンへ講演に招聘されるまで——千九百三年乃至千九百九年——の作品、『ラ・カテドラル』『闖入者』『酒倉』『どん底の人々』『裸かの町女』『血と砂』『死者は支配す』及び『ルーナ・ベナモール』の八篇を含んでゐる。この時期になると、彼の取材範圍は西班牙の全土に擴張せられて、宗教と傳統との恐るべき潜勢力やその罪惡、水呑百姓や都會貧民の陰慘な生活、近代藝術家の特異な心理現象、闘牛師とその周圍、猶太人の生活とその乙女の戀といったやうな、西班牙といふ奥ひの甚だ強いものを好んで取扱つた。彼の解剖の筆はこの期に於て細微を極め、風景畫家としての筆彩益々豊麗を加へてゐる。

第三期は彼が南米諸國の講演に次いでアルゼンチン奥地の開拓事業を思ひ立ち、それに四ヶ年の心血を傾注した後、再び文學に立歸つた時に書いた——千九百十三年の終りから翌十四年の六月までかゝつて——尨大二部の小説『ロス・アルゴナウタス』二つきりだが、實は、彼はアメリカ大陸の各地を背景にして多趣多様の小説を書かうと計畫し、その第一作だけを出した時にあの大戦が勃發して計畫を中止することになつたのだ。『ロス・アルゴナウタス』は歐羅巴の因襲的社會を捨て、若くはそれから逐はれて、新しい天地の新しい風物と文明とを求めに海を渡る人々を寫し出したもの、全歐羅巴から東方諸國を見て歩いた後に南米の原野に大自然と直面して作り上げた『人間』の大いさ

が漸く彼の作物に反映しかけてゐる。

第四期は彼をしてバイブルに亞ぐ世界讀書界の征服者とならしめた名高い『黙示録の四騎士』『マレ・ノストルム』及び『女の敵』の三部小説が出来た千九百十五年末から大戦の終熄までの約三ヶ年半で、この他にも短篇はいくつかある。佛蘭西民族に對する深い愛と獨逸民族に對する劇しい憎とは此の期の作品の神經をなしてゐるが、彼の成功に最も貢獻をしたものは、その描寫の微かさや色彩の美しさの外に、大戦といふものを最も近くから、と同時に、大きく世界的に見て遺憾なからしめた事だ。

第五期は則ち千九百十九年平和が成立して以來今日に至る間で、この期の作物はまだ澤山はない。千九百二十一年の『亡女への借金』と題した短篇小説集——これは此期のものと前期のものとを含む——と、同じ年に出した『落日』と、翌二十二年中『ラ・エスフェーラ』誌に連載された『萬人の地』とがあるばかりだ。この期の短篇や『落日』では、大戦終熄後の人類に對する多少の懷疑と北米國民に對する彼の新傾倒とが窺はれるけれど、『萬人の地』は、——既に書上げられながらまだ出版に至らない『鴛と蛇』がメキシコを背景にしたと同じやうに——これはアルゼンチンを舞臺にしたものだから、第三期の『ロス・アルゴナウタス』と系統を一にするわけだ。彼の作が今後どう變化するか、即ち

第五期は第三期の繼續になつて了ふか、それとも別途の發展を見るか、今から豫斷することは容易でない。

ブラスコ・イバニエスの作品のうち、彼を世界的の文豪にしたものは論ずるまでもなく、『黙示録の四騎士』だ——この作の英譯は三年間に二百版二百萬部を賣りつくした——従つてこれは彼の代表作といつてよい。然し純文藝として孰れを最も傑出した作とするかになると、そこに随分議論が起つてくるのだ。一般に西班牙以外の者は彼の三大戦争小説若くは第二期の作品中の一二を推賞する。然し西班牙本國の批評家は殆んど皆——彼の戦争小説の素晴らしい景氣に對する嫉妬がないわけでないけれど——第一期即ち郷土小説に彼の眞價を認め、口を揃へて、『五月の花』『百姓小屋』『蜜柑の里』『葦と泥』などの美しさを説く。して見ると、岡部君が選擇した『五月の花』は、比較的短い小説なのに拘らず、また今から三十年も前に出たものなのに拘らず、ブラスコ・イバニエスの眞價を論ずるに當つては、代表作の『黙示録の四騎士』とその地位を争ふものゝ一つなのだ。

『五月の花』は千八百九十三年に出た。その一年前に、『素米喰らひの常馬車』といふのが出てゐる。これが年代からみてブラスコの處女作だ——『五月の花』よりも後に出版された二短篇集『バレンシア物語集』『罪せられた女』の中の幾篇かは『素米喰らひの常馬車』よりも更に前に書かれたものだが、

それは今論じないこととする——然し作風の上から見ると、彼の本當の處女作は寧ろ『五月の花』でないかと思はせるものがある。

ブラスコ・イバニエスを一口に『西班牙のゾラ』と品評し去る者が少くない。それは、彼の最初の作『素米喰らひの常馬車』と、それから第二期の作物の二三との上に、佛蘭西自然主義の巨頭の影響が認められるからだ。然しその他のブラスコの作物はその影響から脱してゐる。殊に不思議な位に思はれるのは、『素米喰らひの常馬車』に於て、思ひ切つてエミール・ゾラを模倣した彼が、僅か一年後に書いた『五月の花』ではその痕跡を認めさせないことだ。畢竟それは彼とゾラとが本質に於て相反する點を持つてゐるために外ならない。彼はゾラのやうに晦澁であり得ない。ゾラのやうにねち／＼一つ事にこだはつてゐられない。彼の筆はゾラよりも遙かに軽く明るく、彼のテンペラメントはゾラよりもぐつと感激的だ。彼はその『素米喰らひの常馬車』で唯ゾラの『科學的』を借着して見たのだけれど、『五月の花』では早くもそれを脱ぎ捨て、南方の風景畫家たる彼固有の衣裝をつけたのだ。千九百六年にウキリアム・リッターは『五月の花』の獨創的價値に就いて論じた揚句斯う言つてゐる。

『この書は決定的に逸品だ。この小説の作者は一流の思想家又け詩人と言へないまでも、現代文學に於ける一流の寫實畫家と認めてよい』と。ブラスコが『五月の花』に初めて自己を發見したといふ意味

で、この作を彼の本當の處女作とするのは誤つてゐるだらうか。

ブラスコ・イバニエスの作品には海を書いたものが多い。この點も彼の特色だ。彼の海は世界各國の船が赤い蜜柑と紫の葡萄を積込みにくるバレンシアの海だ。その穂から女神ダキナスが生れたといふ地中海の青波だ。さうして佛蘭西のカミーユ・ピトレット教授は『五月の花』を『マール・ノストルム』——『黙示録の四騎士』の妹篇で矢張りブラスコの代表作——と共に、古來地中海を描いた文學の双璧だと言つてゐる。岡部君がブラスコ・イバニエスを紹介する最初のものとして、『五月の花』を選んだのはこんな意味からも誠に當を得てゐる。

岡部君は、今その巴里の宿で、ブラスコの代表作『黙示録の四騎士』の翻譯に鋭意してゐるといふ。『五月の花』に芽生えたブラスコの寫實が、二十六年の長日月の間に如何に圓熟し、彼の構想の規模がその生活と共に如何に擴大したか、最も好い比較を提供してくれるのを喜ばないわけにいかない。

ピセンテ・ブラスコ・イバニエスは舊曆二十三日我國へ來訪し、二十四日報知新聞社のホールで、『小説の社會的影響』と題する講演を試みた。僅か二十分ばかりの短いものだったが、セルバンテスのドン・キホーテを以て古來小説なるものゝ最傑作と斷じた點などに新意を見せて、甚だ面白かつ

た。彼は翌日は日光へ、その又翌日は關西へたつて往つた。彼は京大阪奈良の觀光を既に終へて、或ひは今日貝馬關に出で、朝鮮へ渡らうとしてゐはしまいか。私は岡部君の忠實な『五月の花』のためを書くこの一文を以て、同時に、日本を喜び、日本に心を残し去るに違ひないその原作者を送りたいと思ふ。

大正十三年一月二日

永田寛定

五月の花

フランスコ・イバーニエス作
岡部 壯一 譯

雨は夜明け方になると歇んだ。瓦斯燈は鋪石の上の血を流したやうな水溜に不安な光を
投げてゐた。どんよりとした空の下には不揃な屋並が姿を現はしかけてゐた。

五時が鳴ると夜番共は道の辻々にかゝつた街燈を下ろして廻つた。それから七時の交代
を待つてゐる二人連の巡査達に、「ではさよなら」と大儀さうに挨拶すると、疲れた足を強く
踏み鳴らしながら、歸つて行つた。

ヴァレンシヤ市を出る一番汽車の汽笛は朗らかな夜明けの沈黙を破つて遙か彼方に消え
て行つた。折しも方々の鐘堂から撞き出した鐘の音は、或は老婆の嘆れ聲の如く、或は幼
兒の無邪氣な囁きの如く、黎明の彌撒を告げてゐた。こゝかしこから間斷なく聞えて来る
鶏の唱歌は、戦鼓のやうで勇ましい旋律に震へてゐた。

未だ人通りの少ない、濕氣を帯びた道には最初の通行人達の足音が異様な音を立てゝゐ
た。

家々の閉ぢた戸の隙間からは、穩かな夢の最後の幸福を貪る、市民全體の寢息が洩れて

わた。

空は光の前に擴げる薄衣を一枚づつ剝いで行くやうに、だん／＼明るくなつて來た。

灰色の冷たい光線が十字街から一番端の辻までも擴がると、暗闇の中に街の青白い輪廓が浮び出た。驟雨に濡れた家々の壁や、鏡のやうにかゞやく屋根や、最後の雨滴を落してゐる軒や、冬枯れの枝をゆすぶる箒のやうな裸並木——その幹には管が生え、しつとりと濡れてゐた——などが、幻燈のぼんやりした風景が、焦點の定まるに従つて、徐ろに現れるやうに現れて來た。

瓦斯製造場は徹夜の勞働に疲勞して最後の苦悶の呻きを揚げてゐた。瓦斯タンクは夜通しの不消化に疲れた胃袋のやうに、ぐつたりと鐵梁の間に下つてゐた。その大きな煉瓦の煙突からは最終の眞黒な濃い煙が高く立ち昇り、白紙の上にインキを滴したやうに、うねうねと空に擴がつてゐた。

「海の橋」の邊りには、魚市場の使用人等が濕氣を防ぐ爲めに襟巻で鼻を蔽つてぶらついてゐた。事務所の硝子窓の中には今來たばかりの事務員等の眠むさうな顔も見えた。

彼等は商人の來るのを待つてゐるのであつた。この商人といふのは、えらい連中で、掛

引の上手な貧乏ぐらしの爲めに氣の荒んだ、それは／＼騒々しい女共であつた。彼女等は僅か一センチモの爲めにも惡罵の限りを盡して争うた。そして市場のめい／＼の席に着く前には、斷えず收稅吏を相手に口論した。

市場はこの魚賣の女達が來さへすれば開かれるばかりになつてゐた。その女達は意地の悪い、小汚こぎならしい、ぼろ／＼な姿すがたをして、耳も聳たかするばかりの聲を張り揚げるのであつた。その穢けがない袴ハカマの襷たもとからは、腐つた魚の臭ひや、海の潮くさい惡臭などを邊り近所に撒き散らすのであつた。

もう陽ひも昇り、冬の朝の生々しい、青味を帯びた光線が、空の薄墨色の地ちの上に萬象をくつきりと描き出してゐた。

やがてその女達を載せた馬車の鈴の音が段々に近づいて來た。それから程無くよぼ／＼の老馬に挽かれた四臺の馬車——その馭車臺には眼のあたり迄も頭巾に包まつた馬車屋が腰掛けてゐた——が順次に「海の橋」を渡つた。それ等の老馬は親方の手綱に依つて、やつと立つてゐるやうであつた。

この馬車と云ふのも實は煤けた箱に過ぎない、道の凸凹でこぼこになつた個所を通る時には、波

に胴を破られたば、船のやうに痛ましく跳ね上るのであつた。獸皮の覆ひは其處此處引き裂けて、その間から竹の骨が覗いてゐて、箱の隙間には赤い石膏が詰めてあつた。破れたがたがたの金具は糸で結ばれ、車の表面一杯にくつついてゐる汚物の中には、去年の冬の泥土が未だに残つてゐた。箱全體——上から下まで孔だらけで、丁度伏兵の一齊射撃にでも遭つた後のやうであつた。

正面には小さな、色の褪めた赤い窓掛が綺麗な裝飾としてゆらいでゐた。後の昇降口からは、四角な覆衣マントに包まり、頭を手中で縛つた魚市場の女共が、魚籠の間にぎし／＼に詰まつてゐるのが見られた。其處からは胸をむかつかせる悪臭——腐つた沼から立ち昇るやうな臭氣が洩れてゐた。

かうして四臺の馬車はぐら／＼揺れながら、中心を失つたやうに片方に傾いたまゝ、のろ／＼と列を成して進んだ。凹んだ個所に來ると、重病人が寢返りする時のやうにおも／＼しく、今度は反對の側にぐ／＼と傾いた。

馬車は事務所の前で止つた。彼女達は大きなばら靴ボートシューズを穿いて昇降口から降りはじめた。靴下は破れて、そこからきかない踵があらはれ、捲くり上げた「スカート」の下には、薄黒い

汚點シミの附いた黄いろい腰巻が覗いて見えた。

それから彼女達は、濕つばい襪ソックスを被せた竹の籠を秤の前に列べはじめた。鯛のびか／＼と光る背中や、赤頭魚アカカサの淡紅色や、苦悶の呻きに戦たたかう海老の細長い觸角などが覗いてゐた。

その籠の側には大きな魚が列んでゐた。最後の飛躍の爲めに反り返つた幅廣い尻尾の「メロ」は大きく開いた丸い口の中に、薄黒い咽喉と、玉突の球のやうな丸い白い舌を見せてゐた。平たい、べちやんこの赤鰓アカカサは、濡れてじめ／＼とした拭巾のやうに、地面に横たはつてゐた。

秤は郊外から來た麵麩屋の手代共に占領されてゐた。若い男ぶりの好い彼等は、皆睫毛に粉を一杯に付け、前掛をあてゝ、袖口を捲くつて、ほか／＼した麵麩を秤臺の上に載せてゐた。あたりの魚臭い空氣の中には「生」の香ひが漂つてゐるやうに思はれた。

魚賣の女達は自分達の番の廻つて來る間、大きな魚を面白さうに眺めてゐる市場の使用人や、悪戯小僧などと、べちや／＼喋つてゐた。

籠を頭の上に載せたり、手に持つたりした女共が、後から後からと押しかけて來て、あたりは益々込んで來た。そして籠は橋の近くまでも列べられた。市場の使用人等は毎朝のや

うに手を焼かせる、このあばずれ女共の悪罵の前に弱り果てゝゐた。彼女達は東方の船着場でなければ聞かれないやうな叫びをのべつに張りあげて、聲高に喋つた。寄るとさはると彼等の内には前日の鬱憤や、夜明け方に濱で演じて未だ治まらない悶着やが再び起るのであつた。膝を叩いて、今にも飛びかゝりさうな劍幕で、手を振り上げ、亂暴な身振りをして、互ひに悪口を浴せあつた。かと思ふと、誰かこの騒ぎの間で、一つ奇抜な文句でも吐いてみせると、圍の中の鶏が、一時に鳴き出したやうに、皆はからりと笑ひ崩れるのであつた。

麵麩屋の手代共が手間取つて容易に秤をあけて呉れないので、彼女達は苛々しはじめた。そしてこの若者共に向つて悪口を言ひかけた。併し彼等とても黙つてはゐなかつた。無作法と無邪氣な哄笑の中に、彼等は片端から攻撃し合ひ、随分酷しい罵倒を平氣で交換したりした。

この沸え返るやうな哄笑と悪罵との騒ぎの中で特に人目を惹いたのは、「牧師」の妻のドローレスであつた。彼女は、他の女達よりも綺麗な身装をし、両手を後ろにしてふつくりした胸を張りながら、事務所の丸柱にゆつたり凭れてゐた。そして男達が彼女の赤靴や赤

い靴下を着けた肉付きの良い腓を眺める毎に、満足した偶像のやうに微笑した。

彼女の顔は平たい方で、色は淺黒く、よく縮れた金髪が後光のやうに、小さな額のまはりに覗いた。海のやうに動く澄んだ緑の眼の中には、光線が反射するたびに、黄金を散らしたやうに輝いた。彼女はあのがつしりとした、少女のやうに肉付きのいい顔を傾げて、狂女のやうに笑つた。すると彼女の眞紅な厚い唇は、丈夫な、光澤のいい整つた齒並を表はし、彼女の顔全體が、青白い象牙色の光に輝いてゐるやうであつた。

彼女はあながち、腕節の強い、劍幕のえらい爲めばかりではなく、「牧師」と呼ばれてゐるバスクアールの妻だつたので、皆の者に尊敬せられてゐた。このバスクアールは、家中では何でも妻の云ひなり次第になつて、小言一つ云はないお人好しだつたけれど、一度海に出ると誰よりもすぐれた働き者であつた。世間の噂に依ると、彼の所得の少しづつを蓄めたものがつもりもつて、今では臺所の瓶の中に、銀貨がうなるほどあるといふことであつた。

斯うして彼女は魚市場の賤しい惨めな人々の間では、まるで女王のやうな態度を執つてゐた。そして人々が彼女の夫に貰つた眞珠の頸飾や、アルヘル手巾や、ジブラルタルの袴

を羨ましさうに眺める時、彼女は得意になつて澄ましてゐた。

彼女は叔母にあたるピコーレス老婆とばかりは對等に應對してゐた。この老婆は肥つた大柄の女で、口の廻りには、鯨のやうな薄髭を生やしてゐた。魚市場での古顔で、三十年間もあの鋭い眼付と、凹んだ口——顔中の皺が光線のやうに集る中心——から吐きだす言葉とのために、市場の監視共をびく／＼させて居た。「じれつたいね！ お前さん達は一體何時おしまひになるの。」とドロレスは手を腰の邊に支へながら、麵麩屋の手代共に向つて云つた。

最後の袋を秤から下ろしてゐた彼等は、女共に何か卑しい戯談を言つた。すると女共は、両手を前掛の下に合せて、腹をふくらませながら、見苦しい様子をして見せた。

程なく魚の秤量はかりがはじまつた。毎朝のやうに、籠を秤の上に載せる順番で喧嘩がはじまつた。掴み合ひにはならないまでも、随分といがみ合ふのであつた。すると、ピコーレス叔母さんが鋭い聲で仲裁に入つた。彼女の銅鑼聲は大砲の音のやうに四面に響き渡つた。然しドロレスはそんな事にはちつとも氣を止めないで、自分の順番も忘れて、ちつと彼方の橋のあたりを眺めてゐた。欄干の上には頭に載せた籠の重みにやゝ體を曲げ、両手を腰の

あたりにあてがつて、遅れ馳せに來る一人の女の半身が見えた。

ドロレスは皮肉な表情を浮べて冷笑した。それからあの遅れて來た女が、事務所の前あたりにに停つた時、「牧師」の妻は横柄な高笑ひをして、ピコーレス老婆の袖を引つ張つた。

「御覽な、叔母さん！ あの人は何時も遅れて來るのよ。きまり切つてるわよ、愚圖つたらありやしない、それにあんなに荷物を載おつけて歩いて來るんでせう。遅れるのは當然よ。」それを聞くとその女は青くなつた。そして如何にも疲れた様子で重い籠を地面に下ろした。ドロレスを見ると前からの鬱憤がむらむらとよみがへるやうに、憎しみに溢れた目で睨みつけた。二人の女は暫し憎惡に燃える眼で、お互に頭の前から足の先まで見比べた。ドロレスは、息をはずませ乍ら、嗅煙草を嗅ぐやうな手つきで鼻の下を擦こすつて呟いた。「馬車に乗つて來ればいゝのに、歩いて來たので疲れて、あんなに汗を流してゐるんだわ。」その女はこの蔭口を聞くと苛立つて云つた。

「馬車に乗つて來ればいゝのにつて？ 人を馬鹿におしでないよ。私はそんな馬車屋に拂ふ金が一文も無いんだから、かうして殊勝に歩いて來たんぢやないの？ 私はね、憚りながら贅澤するために、亭主を瞞かすやうな女とは違うんだから……」

と、傲慢な魚賣の女は、怒のために美しい緑の眼の中を黄金色に輝かして、一三步進み寄つた。

「一體それは誰に向つていふ言葉なの？ 私にかえ？……」

丁度そこに居合せた叔母が入つて、皺くちやの大きな手で彼女を抑へた。

籠の看貫は済んだ。老婆は喧嘩や悶着の中に仲間入りしたくなかつたので、すかさずドローレスに云つた。

「さあ、馬車に行かう。喧嘩がしたかつたら、後でするさ。市場では客が待つてる。もういゝ加減にしなさい。それにお前さん達は義理にも姉妹ぢやないか。」

それからドローレスの柔かい胴のあたりを押し乍ら馬車へ引つ張つて行つた。中にはもう他の魚賣が乗り込んでゐて、籠も積まれてあつた。

ドローレスは子供のやうにおとなしく老婆に引かれて行つた。併し彼女の唇はぶる／＼怒りに震へてゐた。そして込み合つた馬車が動き出すと、最後の嚇し文句を投げつけた。

「ロサリオ！ くやしかつたら、又来るがいゝ！」

「また来いつて？ 何時だつて行くとも。直ぐにだつて行くから……」

瘦せて神経質な小女のロサリオも怒りに震へて答へた。それから彼女の瘦腕は、彼女に重い思をさせた籠を、今は藁のやうに軽々と持ち上げて、力一杯に秤の上に投げ上げた。街ではもうすつかり夜が明けてゐた。早起きの人々で満員になつた電車が通つてゐた。二頭づゝになつた馬は、背中にぢかに乗つた子供に手綱を執られて走つてゐた。

道の両側には、工場へ糧を得るために行く多くの労働者が、まだ眠むさうな顔して、背中に辨當袋を下げ、口に巻煙草を啣へて、ぞろ／＼通つてゐた。

空を一面に蔽うてゐたあの青い水蒸氣は、厚い衣層のやうになつて散つた。太陽は燦々／＼と輝く聖殿のやうに昂然と地平線上に現はれた。路上の雨溜は忽ち黄金の液體に變つて、火事の明りのやうに、家々の壁に反射した。

道は人通りにざわめきはじめた。下女らしい女が手に白い手籠を提げて、軽い足どりで通つた。掃除夫は前夜の嵐にできた泥土を掻き集めてゐた。乳牛は物憂げに鳴きながら水溜の中を歩いて行つた。種々の見本を陳列した店々の戸も開かれて、中には箒を使ふ音が聞こえた。その度に濛々とした塵芥が通りに掃き出され、太陽の光線を通して黄金色に透いて見えた。

馬車が魚市場に着くと、歳とつた荷物運びの女が、籠を降ろしにどやどややつて来た。そして魚賣の女共にべこ頭を下げて、馬車から降りるのを手傳つた。惨めなあの女達に取つては魚賣が立派な夫人方のやうに見えたのであらう。覆衣フキに包まれた彼女達は、ぞろ／＼、監獄の差入口のやうに暗くつて狭い入口を這入つて行つた。

そこからは魚市場のじめ／＼した悪臭が吐き出されてゐた。

もう市場は込合つてゐた。未だ前夜の雨の滴の落ちてゐる亞鉛葺きの屋根の下では魚賣共が大理石の臺の上に籠をあけ、青々とした蘆の下敷きの上に魚を列べてゐた。大きな魚の太い切口は血の滴る肉を露はしてゐた。樽の中からは眼の色の變つた、そして鱗も多少落ちた、氷漬の前日の「商品」が出されてゐた。いかめしい赤頭魚アカカサや、お祈りをしてゐるやうに、觸角をふるはしてゐるあの薄黒い皮の海老の側には、ごたく／＼と鯛が盛られてあつた。

市場の反對の側も他の女共に占められてゐた。この女共もやつぱり「カバニヤル村」の女共と同じやうな服装をしてゐたが、それよりももつと惨めな様子で、もつと意地悪い顔付を

してゐた。

この女達は「アルプフェーラ村」の魚賣であつた。この村は頗る變つた、下等な村で、村人は沼の上に浮べた、箱のやうな平たい、どす黒い船の中や、みつしりと繁つた蘆の間に建てた小舎の中に住んで、沼の泥水の中に生活の糧を獲てゐるのであつた。彼女等は悲惨な女で、顔は日に焼けて土色をし、眼は不斷の隔日熱の爲めに異様に光り、體を動かす毎に息の根の止まりさうな悪臭を着物から發散するのであつた。それは海の潮風の臭ひではなくて、下水の泥の悪臭であつた。沼の不潔な泥の悪臭であつた。

彼女達は生き物のやうに蠢めてゐる大きな袋を臺の上にぶち明けた。するとその口からは、ぬら／＼と、黒いとぐろを巻いてゐる鰻が塊りになつて出て來た。あるものは白い腹を返し、あるものは蛇のやうに尖つた頭をもたげてゐた。この鰻の側には死んで青白くなつた淡水魚が明けられた。鮒は鼻持ちのならない悪臭を放ち、その異様な金屬的の光澤は毒を含んで、どす黒く、光るあの熱帯の果實のそのやうであつた。

この惨めな女共の中にもなほ等級があつた。その中で最も惨めな連中は列んだ臺の間のじめ／＼した空地にべたりと坐つて、腹を割けた蛙を燈心草にさして賣つてゐた。その

蛙の手は、裸體の踊り子のやうに、高く振りかざしてゐた。

一六

市場は益々込んで来た。お客はぞろ／＼這入つて来た。やがて魚賣共の間には不思議な手眞似や合ひ言葉が交はされた。それは巡査の來た事を知らせ合ふのであつた。すると目方の足りない秤の分銅を、手品師のやうに、素速く前掛や袴の下に隠した。

それからこの女達は、錆びた古い庖刀で、魚の銀色の腹を開けた。腐つた臟腑が臺の下に落ちると、野良犬共が寄つて来て、一寸嗅いで見ただけで、嘔吐を吐くやうな呻き聲を揚げ乍ら、直ぐ隣の入口の中に逃げ込んでしまつた。其處は肉屋の區域になつてゐた。

今しがたまで、馬車の中や事務所の秤の前で、一緒に親しくしてゐた魚賣等は、今では客を他人に取られる毎に、自分の臺のところから喧嘩腰な目を送つて、憎らしさうに睨み合つた。

隅々まで濕氣と惡臭とに漲つたこの薄暗い市場には、戦ひ——烈しい競争の空氣が擴がつた。

魚賣女共はお客の注意を引くために、穢い秤をがちやく／＼敲き乍ら、聲を枯らして叫んだ。——親切な口をきいたり、優しい勧め方をしたりして、客を呼んだ。かと思ふと忽ち、

彼女等の優しい口は、穢い流し口に一變して、言葉の汚物を小便した客の上に浴せ掛けた。そして客を罵る段になると、總ての魚賣が本能的に團結して、無遠慮な大笑をするのであつた。

「ピコレース叔母さん」は、年とつた鯨のやうに、でぶ／＼に太つた體をして、皺くちやのだらしない口をもぐ／＼させながら悠然と安樂椅子にかまへてゐた。そして眞夏でも缺かさずに脚の間に挟んでゐる火鉢の生温い火氣を滞り無く感ずる爲めに、體の位置をのべつに變へてゐた。これは骨の中までも濕氣の浸み込んだ水陸兩棲の體にはなくてはならぬ贅澤品であつた。彼女の青白い手は少しの間もじつ／＼としてはゐなかつた。慢性の疥癬が彼女の皺だらけの表皮を侵してゐる様子であつた。肩掛を捲くつて、大きな指で腋の下を搔くかと思ふと、今度は白髪の中をぞり／＼やるのであつた。その度毎に前掛のやうに兩膝の上に垂れてゐる大きな腹が波を打つた。それから臆面もなく、ひどくこんがらかつた袴を捲くつてぶ／＼とした腓を搔いた。

彼女には昔からの得意が少なからずあつたので新しい客を得るのにさう骨は折らなかつた。そして下女を伴れて買物に來るむづかしやの奥さん達に向つて、體を前につき出しな

がら悪口云ふ時には、何とも言へない痛快さを感じるのであつた。

この魚市場で喧嘩でも起つた時、彼女が一度その銅鑼聲を張り上げると、どんな場合でもその争は鎮まつた。そして皆の者は彼女の怖ろしい諸諺や、滔々として述べ立てる破廉恥哲學には笑はずにゐられなかつた。

彼女の向ひ側には、姪のドロレスが美しい腕を露はに、金びかの秤皿を弄び乍ら、客を呼んでゐた。彼女は、彼女の美しさに引かれて、自分で態々赤く縁取つた手籠を携げて買物に来る町の旦那衆に、美しい齒並を見せて色つぼく笑ひかけた。

「ピコレス叔母さん」から二つ目の臺は、ロサリオに占められてゐた。彼女は一番新鮮な魚を人目を惹くやうな風に列べてゐた。二人の義姉妹は向ひ合つてゐた。お互に侮蔑したやうな様子をして顔を背け合つたけれど、ともすればその視線は怒に焰えて入れ違つた。

毎日喧嘩を始めるのに、口實が無かつたけれど、ドロレスが媚を送り、秤を叩き鳴らして、折しもロサリオと掛引をしてゐた一人のお客を奪ふと、早速始まつたのであつた。

「私は黙つてこれが済ませるとお思ひかえ？　みんな御覽な、この意地悪るを！　正直な女から一番古い得意を取るなんて……泥棒！　泥棒よりもつとひどい奴！」

瘦せて、神経質で、病身らしいロサリオは、怒のため骨張つた頬を眞青にし、眼をぎらぎらと光らせて、瘦せた牡鶏のやうにいきり立つた。

相手は、小さな愛くるしい鼻から荒々しい息を吐きながら、女王のやうな態度を執つてゐたのは、正に見物であつた。

「誰が泥棒だつて？　お前さんが？　何もそんなに怒るには及ばないぢやないの？　こゝでは皆、知合なんだから。どつちがどうかだか人は知つてるわよ！」

市場は活氣立つた。魚賣共はするさうに目叩きをして手に汗を握つた。そして商賣も忘れて、この争ひを見物するために半身を臺の魚の上に押し延べた。

買手共がどや／＼と集つて來た。そしてこの觀物を面白がつて笑つた。市場に入つて來たばかりの巡查は、通人らしく、氣を利かして出て行つた。「ピコレス叔母さん」はこの果てしの無い喧嘩に弱り果てたらしく、あつけに取られて上を眺めてゐた。ロサリオは續けて云つた。

「さうだとも、泥棒だい！　これは誰だつて知つてるよ。お前さんは他人のものなら、何でも盗む癖があるんだよ。ちやんと證據もあるんだ。……市場では得意を盗んだ。それか

らカバニヤールではもう一つのものを……もう一つのものを盗んだ。これだけでわかるだらう。……お前さんは亭主の「牧師」だけでは飽き足りないのだらう、目先のちつとも見えないう土龍より盲な「莫迦」の亭主だけでは……」

併しかうした罵詈もドローレスの輕蔑的な沈着を失はさせることが出来なかつた。彼女はロサリオが自分の事と夫の事とに云ひ及ぼさうとしたので、人々が唇を嚙みしめて笑を耐へてゐるのを見ると、力めて平靜を装つた。彼女は市場の人達の笑草になりたく無かつたからであつた。

「お黙り、氣違ひ！ お黙りつてば、このやきもちやき……」

併しロサリオは喰つてかゝつた。

「へん、私がやきもちやきだつて？ ぢや誰にやきもちしたんだね？ カバニヤールで評判のお引摺にかえ？ 大きに有難う！ 私はねえ、正直な女なんだから、他の女の亭主を寝取るやうな真似は出来ないだよ……」

するとドローレスも彼女を侮るやうに云つた。

「お前さんに何が取れるものかね？ 鯛みたいな御面相をしてさ。そんな不別嬪ぢや、と

ても思ひも寄らないことだよ、ねえお前さん！……」

かうして二人の女は互に悪口を浴せ合つた。

刻々に顔色の青さめて行くロサリオは、言葉を發する度に、引き釣つた兩手を振り廻した。ドローレスは兩手を腰の上に支へて、高慢氣に冷笑してゐた。その美しい唇からは今にも悪罵が迸り出さうであつた。

好戰的な熱が市場に漲つた。入口には人の山を築いた。魚賣の女共は狂熱して、半身を臺の外に突き出し、犬をけしかけるやうに舌を鳴らした。

彼女等はドローレスの嘲弄的な買言葉を聞くと、大笑をして、秤を分銅で叩き鳴らした。その金屬的な雑音は、罵詈の雨に和したのであつた。

美しい女はロサリオを侮辱するために、最上の方法を執つた。

「さあ、これに話すがいゝ！」

かう云ふと彼女はくるりと背中を向けて、大きなお臀をびしやつと叩いて見せた。彼女の木綿布の下では、肥つた肉塊が、頑丈な體に特有なしつかりした弾力に震へた。

これは全く狂熱的な大成功であつた。魚賣共はもう息を詰まらせて、各々の席に笑ひ倒

れた。

寄りたかつて来た、直ぐ隣に席を占めてゐる贖物賣や鮪賣は、皮前掛の下から手を出して喝采した。立派な旦那連も買物の籠をうつちやらかして、その釣合よく肥つた臀部の露はな曲線に見惚れた。併し彼女の勝ち誇りは永く續かなかつた。

彼女がにこ／＼した顔を後に振り向けた途端、ロサリオがくやしきまぎれに投げた鬨の一掴みを、眼と云はず鼻と云はずに受けたのであつた。

『よくも私にこんな恥をかゝしたね？ さあ、出て来い、おたんちん奴！ お前の面を見
てやるから！』

と、ドロレスは、腕を更に捲くり上げて、自分の席から躍り出た。彼女の眼は例の黄金の斑點を散らして、異様な光に輝いた。ロサリオも頭を屈め、何か脅し文句を呟き乍ら出て来た。彼女の體は激怒のために、頭の先から足の先まで震へてゐた。そして途中で彼女を抱き止めやうとする者は、片端から相手構はず、踏み躪つた。

二人は二列に列んだ臺の間の濕つて滑りやすい通りの真中で格闘をけじめた。虚弱で神經質なロサリオは對手の美しい女に、力一杯に打突つたけれど、打ちのめすことは出来な

かつた。それは神經と筋肉との格闘であつた。怒が力を攻めたところで、後者に何等の手應へを與へることも出来なかつた。

ドロレスは足をしかと踏み構へて、躍りかゝつて来る相手に拳骨の雨を降らした。ロサリオの青い瘦せた頬は見る／＼眞赤になつた。と、ドロレスは俄かに悲鳴を揚げて、兩手で片方の耳を押へた。彼女の指の間から數條の血が流れ出た。

『あゝ！ 畜生奴！……』

ロサリオが、市場中の者に羨ましがられてゐた相手の眞珠の耳飾を引張つて、耳朶を裂いたからであつた。

一體これは喧嘩に於ける正當な手段であらうか？ こんな亂暴な女を見逃がしていいものだらうか？ もつと僅かな事でも獄にぶち込まれた者が世の中には澤山あるのに！……美しい魚賣の女は痛さに泣く少女のやうに哀しい表情で、耳を押へながら泣き續けた。

格闘はほんの僅かな間しか續かなかつた。ピコーレスが二度ばかり撲りつけると、凄じい意氣込の二人の格闘者は、譯も無く引き分かれた。老婆は今自分の仕出かしたことに驚いてゐるロサリオを叱りつけた。と一方では、他の魚賣共がドロレスを支へて慰めてや

二四
つた。しかし彼女は傷のちく／＼する痛みを感じると、再び對手に向つて躍りかゝらうとした。

不意に群集の後から人込みを押し分けて近づく巡査の正帽が見えた。と、老婆は指圖した――

『さあ、みんな席に着いた！ 静かにせい！……あの用無し共が、やれ呼び出したのだ、やれ判決だのと他人に面倒を見せて、御褒美にありつかうたつて駄目なこつた。此處には何事も無いんだから……』

老婆はドローレスの頭に絹半巾を被せて、血に染まつた耳を隠した。魚賣共は眞面目腐つてめい／＼の席に歸り、大聲を張り揚げて魚を賣り出した。巡査達は席から席へと廻つて歩いたけれど、魚賣共の憎まれ口をきくに過ぎなかつた。

『其處で何を捜してゐるんだい？ 此處にはお前さんたちの用事は無いよ。何事も無いんだから。何かと云へば呼びもしないのにやつて来る……』

で、彼等は間の悪るさうに市場から出て行くより外に仕方が無かつた。後ではあの用無し共の物好きさ加減に腹立て、我鳴るビコーレス老婆の銅鑼聲と、魚賣共が秤を叩く皮

肉な騒音とが、まるでお祭り騒ぎのやうであつた。

と、市場は又元の静けさにかへつた。魚賣共はひたすら、客を呼ぶことを考へた。ロサリオは商賣をそつち除けにして、腕組みをし、ぼんやりと眼を据ゑ、怒つた「スフィンクス」のやうに自分の席に立つてゐた。その頬には撲られた跡があり／＼、紫色になつて現はれてゐた。その間、ドローレスは後向きになつて、苦痛のために流れ出る涙を押し止めようと努めてゐた。

ビコーレス老婆は心配らしい面持を見せてゐた。そして前に列べた死んだ魚と何か問答でもするやうに、一人で高聲に喋つた。

『あのつむじ曲り共は一生あゝやつて行くつもりかしらん？ 何時も殺すの、はるのと云つて――それもみんな男の事件からだ。畜生共！ まさか世の中が男ひでりと云ふ譯ぢやあるまいし……。これはどうしても止めさせなくつちや。だがもしも厭だとも云つて見ろ、そしたら引つばたいでも仲直りさせるから……。私にはそれだけの覺悟はちやんとあるんだ。』

十一時に彼女は使ひ女の持つて來た辨當――一片の黒麵麩と二片の揚立ての肉――を開

いた。彼女はそれを二口か三口に頬張つてしまった。

それから油でぎら／＼に光る皺くちやの口を穢い前掛で拭ふと、姪の魚臺の前に行つて立つた。そして嚴めしいお説教を始めたのであつた——

「あれやどうしても止めなきやいかんよ。私は家族の者が市場中の笑草になるのは眞平だ。何と云つても止めるんだよ！ 分つたかい？ 私ほきかん氣なんだから、一旦何かしようと思ひついたら、どんな事があつても仕おほせる……例へ世界の人間の半分と撲り合ひをしなくつちやならなくても。だから一度怒つたらそれこそ大變だぜ？ 今度私を怒らせたら最後、どんな事をするか知れないよ。」

しかしドローレスは、拳を握りしめて、頭を振りながら「いやだ、いやだ！」と喚き立てた。

「何だつて厭なんだ？ たとへお前が厭だつても、こんなよくない諍ひは止めなくつちやいけないよ。それにお前達は義理にも姉妹ではないか？ そして今お前達の仕出かした事だつて、補ひのつかない事ぢやあるまい……何？ ロサリオがお前の耳を引き裂いたつて？ だつてお前も相手をうんと撲つたぢやないか？ さあ、「お互に近寄つて仲直りをしたさい。

これだけだ、私の云ふ事は。おとなしくして、叔母さんの云ふ事を聴くんだよ。」

それからピコレースはロサリオの臺の方へ行つた。そして彼女には一層嚴しく叱りつけた。

「お前さんは仕方のない畜生だな、さうだ、氣狂ひ犬だ。……私に口應へしたり、そんなにぶりぶりして私を睨みなさんな、頭に分銅を叩きつけるかもしれないから。私が分銅を投げ廻すといふ事は、お前さん達萬々承知の筈だらう。それから全體お前さんは私がお前さんのおふくろの友達だつたものだから、私を甘く見てるんだねえ、「あれは」何と云つても止めなくつちやいけないよ。私の云ふことは、それ丈けなんだ。御覽、ドローレスは彼處で、痛がつて泣いてるぢやないか。一體あれがお前さんの喧嘩の法かえ？ 他人の耳など引張つて、卑怯とも思はないのかい？ 畜生共なら知らないこと、かりにも人間様が喧嘩するからには、もつと立派にやつたらどうだ……うんと引つばたいて、だが血の出ない所をだよ。それや私だつて、昔は誰とでも掴み合ひをやつたものさ。その時分はまあ、よつぽどひどい奴になると、相手の着物の裾を捲くつて、その柔かいところを厭といふ程撲つたのさ。一週間位は満足に坐れなくなるのだが、でもその後は又もとのやうな友達になつ

て、チョコレート屋で仲直りしたものだ。昔はかう云ふ風にさつぱりしたものだつた。今のだつてあゝしなくつちやいけなないんだよ。それにお前さんは何故厭だなんて云ふんだい？ ドローレスが亭主を取つたつて？ そりや亭主が悪いんだ。ドローレスがお前さんの亭主を口説いたんぢやあるまい。女を口説くのは何時でも男だからね。それからお前さんが亭主を他の女に取られたくなきや、ぼんやりしてちやいけなないし、家の中ではちやんと小綺麗にしてゐるんだね。先づ一人の男を自分のものにして置かうと思へば、よつぽどしつかりしてゐなくつちや。殊に亭主が家を出る前には、近所の女を追驅けるなどと云ふ了簡を起させないやうにして置かなきやならないね。全く、當節の女はなつてないよ！ それに何にも知りやしない！ もしも私がお前さんだつて見ろ、厭でも男に義理は盡させて見せるから。……まあこれだけだ……早速仲直りするんだよ。お前さん達は私の云ふ事を聽いて、私を敬ふんだよ。もしもさうしないといふなら……」

それからピコーレスは脅し文句と優しい言葉とをこつちやに喋り終ると、自分の席に戻つて、商賣を續けた。

その日は早く商賣が済んだ。買人が多かつたので、正午にはもう臺の上が空になりかけてゐた。残つた魚は樽に氷詰めにされた。すると馬車屋達は大小の籠を集めて、がた馬車の後に積みはじめた。

ピコーレス老婆は市場の真中で四角な覆衣フクロを掛け直してゐた。彼女は同年輩の數人の友達——車代は各々自分持ちで彼女と同乗しようといふ忠實な仲間に取り巻かれてゐた。

彼女は姪達の仲直りをさせなければならなかつた。で、籠がすつかり馬車に積み込まれると、二人の臺の所に行つて、厭がるのを抓つかつたり、突き飛ばしたりして連れ出した。

ドローレスとロサリオとは老婆の怖しい執拗さに降参して、一緒になつた。併し接觸することを恥ぢるやうに、また悲しさうに、頭を下げたまゝ、敢て争ふこともしなかつた。「ぢや、チョコレート屋で待つて、お呉れ。」と老婆は馬車屋に命じた。

それからこの立派な魚賣の一行——四角な覆衣フクロに包まり、耐へ難い悪臭を放つ袴スカートのを着けた——は魚市場を出て行つた。彼女等の激しい靴音は焼物を敷きつめた道を震はせた。そして縦に列んで市場の前の廣場を横切つた。其處ではまだ店じまひの商賣が行はれてゐた。人波を押し分けて行く、先頭に立つたピコーレス老婆の後には、皺くちやな口と黄色つぼい眼を持つた年寄仲間が續いた。

ロサリオは徒歩で来た時のやうに、澤山な空籠を背負つて附いて来た。それからドロレスは、龍舌蘭の繊維で織つた頭巾パニユエロの下に見せた愛くるしい淺黒い彼女の顔を見て云ふ男達のお世辭を聞くと、耳の痛さも忘れて、何時ものやうに微笑んでゐた。

程なくチョコレート屋に着いた。彼女達は其處の常得意であつた。ロサリオが魚籠を大理石の小机の上に載せると、その腐つたやうな悪臭が、直ぐ側の調理場から出る安チョコレートの香とごつちやになつた。

ピコーレスはこの小綺麗な部屋に入ると満足さうにほつと溜息をついた。それは中々立派な部屋であつた。彼女はお馴染になつてゐる色々な備へつけを眺めた。

床の上には下司つぼい模様の着いた蓆が敷いてあつた。壁には白い陶製の板が塗り込んであり、光澤消しの窓硝子には赤い窓掛けがかゝつてゐた。入口には胴の膨らんだコルクの氷桶が据ゑてあつた。その上に頭巾型をした金の蓋が被せてあつた。もつと内側の帳場臺——その上にはビスケットや駄菓子を入れた瓶が載せてあつた——の後には店の主婦が眠むさうな顔付をして、坐つてゐた。彼女は縮れた紙片を竹の先に結びつけた蠅追ひを物憂げに振りながら群り寄る蠅を追つてゐた。

『あなた方は何を召しあがる……?』

『何時ものものさ、聞かなくつても分つてるぢやないの?——一オンスづゝのチョコレートと砂糖水。』

ピコーレス老婆は朝の内にこれで四杯目のチョコレートを飲むのであつた。彼女等の胃袋は、食食することに依つて肉慾的な快樂を得たといふカラカス將軍のそののやうであつた。

『こんなうまい物が世の中にあるかしらん? もう／＼壽命が延びる!』

そして老婆共の皺くちやの鼻は、白い茶碗から立ち上る紫色の湯氣を嗅ぐと、もう耐らななさうに、蠢めいた。

彼女達が菓子麵麩を千切つてはチョコレートに浸して、齒の無い口の中につゝき込んでゐると、ドロレスとロサリオとは視線が入れ違はないやうに、頭を下げつ切りで、殆んど食へることも出来なかつた。

併しピコーレス老婆は、茶碗が殆んど空になると、その銅鑼聲で弛い沈黙を破つた。

『でも……お前さん達は分らず屋だね? まだいがかみ合つてるのかい? 當節の魚賣は昔のとまるつきり、違つてる。何だい? その面つきは。何の恨があるんだえ? お前さん達

はまさか娘つ子でもあるまい。……昔はみんなさつぱりしたもんだつた。論より證據、私だつて今此處に一緒にゐるお主婦さん達と昔、掴み合つたことがあるんだよ。(すると老婆の六人の友達は點頭いた。) 嘘だと思ふなら、腰卷きを捲つて見せようか？ お臀のあたりには、多分撲られた跡がまだありありと残つてる筈だ。それでも今ぢやこんな親しい友達になつて、お互ひに親切を盡し合つたり、また不幸があればお互に助け合つてるんだよ、人間は斯うなくつちやならない。そりや、誰だつて怒ることもあるさ。でも一度肝癪が過ぎてしまへば、綺麗さつぱりと、何もかも水に流すのさ。それから一緒にチコレート屋の門を潜ると、すつかり恨みを忘れて、また元の親しい友達にならなくつちや……恨みといふものは喉を通り越してはならないものだよ。「忿よ、決して喉越すな。喉越すものは、チコレートに菓子麵麩にキンセット(氷)ばかり。」とは私のお母も云つてたし、市場では始終みんな云つてたことだよ。」氷の季節でなかつたので、彼女等のコップの中には、氷水は入つてゐなかつたけれど、一同ピコレスの哲學に同意して、香料を加へた砂糖水のコップを擧げて飲み干した。或者は満足らしくげつぶを出したりした。

二人の喧嘩相手が相變らず黙つてゐるので、ピコレス叔母は遂に怒り出した。

「何かい？ お前達は一生かうやつてるつもりかい？ 私の云つた言葉は何の役にも立たないのかい？ ねえ、ロサリオ、お前の方に罪は多いんだよ。」

ロサリオは絶えず頭を下げ、覆衣フクレの房を引つ張りながら、自分の夫の事に就いて何か呟いた。そして靜かに云つた。

「わたし……ドローレスが私の亭主に悪い顔すると誓つて呉れさへすれば……」

するとドローレスは直ぐに威猛高になつて怒鳴りつけた。

「なに悪い顔しろつて？ 私はね、人を脅かす傀儡や案山子ぢやないわよ。それにトネット——お前さんの幸福な御亭主は私の亭主の弟ぢやないの？ 義理にも弟であつて見れば、門の内に入れないの、悪い顔して應對するのつて、そんな事が出来るものかね。でも……私は素直なんだ。ごたごたは眞平だ。圓滿に話したいのよ。また世間にとやかう云はれたくも無いしね。あれはみんな仲の良い、夫婦の間に水を差さうとする世間の奴等の出鱈目や嘘さ。私がバスクアアロと結婚する前に弟の許嫁だつたつて？ それがどうしたのさ？ こんなことは世間にあり觸れたことだわよ！ 一體外にどんな理由があつて世間でわいわい云ふんだらうね？……もう一度繰り返して云はうかね……私は平和に穩かに暮らして行き

たいんだよ。人に悪い顔するなんてそれは御免蒙るよ。でも義理の弟として、いくらか親しみをもたせて呉れよば、もう決してこんな事はしないわ……世間の口がうるさいからね。」

ピコーレス老婆は大喜びであつた。

「だからお前さんは、人に好かれるんだよ。その良い分別が何よりだ。どうだい、ロサリオ！ お前さんも得心したらう！ まだ十分でないかい？ さあ、抱きあつたり！ で、これで、おしまひだ。」

二人の義姉妹は老婆共に押し付けられて、腰掛けたまゝ、不精無精に抱擁し合つた。

老婆は頬杖を突いて、勝ち誇るやうに語り出した。

「女が男一匹のために喧嘩するなんて、實に莫迦げた事さ。世の中に男はざらに居るぢやないか？ 自分共のために喧嘩させる——これは野郎共の望んでることなんだ。そして増長したり、えらさうな考を起したりしやがるんだ。……一體女と云ふものはしつかりしてゐなくつちや……さうだとも、よつぽどしつかりしてゐなくつちやいけないよ。例へば私など、死んだ亭主が一人の女を拵へた時なんか、ちやんと元の通りにかへしてやつた。それからいざとなれば、無理やりにでもお詫びをさせてやつたものさ。一體男なんて云ふ奴は、

嫉妬騒ぎをする値打はないものだよ。全體くよくよして何になるんだ？ それに女は何時も、男が家を出てから何處で時間を過ごしたか知つてるかしら？ いや、全くの所、男の道樂を怒つて見たり、くよくよして話したりするなんて馬鹿な事だよ。女がきりつとしてりや、してる程、男つて奴は女を可愛がるものだ。私なざあ、死んだ亭主にちよつとでも變な事があるとかう云つたものさ……「さあ、出て行け！ 何處へだつて好きな所に失せやがるがいい！」そして何時もしかめつ面をしてゝやつた。生優しい様子なんかしなかつた。かうさへしてゐりや、女は大事にされるものだよ。」

ドロレスは眞面目臭つて、今にも嘔き出しさうな笑を嚙み殺してゐた。ロサリオは叔母の主義に反對を唱へた。

「私は叔母さんとは考が違ふわよ。私は亭主と眞面目に話してたでせう。だから、トネットにもさうさせる権利があると思ふわ。私はごたく／＼や出鱈目は嫌です。」

老婆も黙つてはゐなかつた。

「そりやみんな立派なことだ、えらさうな人達の云ふことだ。嘔吐が出らあ。男つていゝ加減のものだから、その心算で掛からなきや。ねえ、さうだらう？ お前さん方も。」

すると仲間の老婆共は、老印度人のやうな頭を頭かせて、同感の意を表した。ピコーレス老婆は言葉を續けた。

「男つて奴は畜生同然だよ。女に虐められ、ば虐められる程、犬見たいに慕つて來やがる。だから男をちやんと自分のものにして置かうと思つたら、腰卷の紐でなりと寢臺の脚に縛り着けて置くに限るよ。」

馬車屋は待ちあぐんで、幾度も頭を突き出した。そしてぶつ／＼云ひ乍ら、自用の馬車位に思つてゐるあの老婆共に、急いでゐる様子を示した。

「お待ちと云つたら、ひよつとこ面をしやがつて！」——老婆は嗔れ聲で我鳴つた——「お金はちやんと拂ふんぢやないか？」

彼女は仲間の者が財布の中から金を取り出さうとするのを見ると、鷹揚に腕を突き出して云つた。

「誰も拂つちやいけないよ。今日は私が奢るんだから。娘共の仲直りを祝はなくつちやいけなかつたんだ。」

彼女は立ち上つて、裾を捲くり上げ、腰卷の上から胴に結び着けた財布に手を突込んだ。

その中から先づ魚の腹を開ける鱗の着いた鋏と錆びた小刀を取り出した。それから一掴みの銅貨を取り出して机の上にぶちまけた。魚の臭ひの浸み込んだねちやねちやした銅貨を幾度となく數へるのに數分間が過ぎた。それから一山の銅貨を大理石の臺の上に殘してチコレート屋を出た。外の仲間の者はもうみんながた馬車に乗り込んでゐた。

空籠を背負つたロサリオは鋪石道に立つて、ドロレスと向ひ合つた。二人は何と云つていゝか分らないやうに、顔を見合せた。

ピコーレス叔母は彼女にも馬車に乗れと勧めた。

「みんな少しづつ詰めて、彼女を家まで送つてやらうぢやないか……何、厭だつて？ ぢや勝手にするさ。」

彼女は今し方の言葉を想ひ出したのであつた——「平和に穩かに」と。

「さよなら、ロサリオ。」——ドロレスは愛嬌よく微笑んで云つた——「私達はもういゝお友達になつたのねえ。」

そして親しげに會釋すると、叔母の後について馬車に乗つた。二人の大きな臂の重みに車はめき／＼と音を立て、片方に傾斜した。

馬車は割れるやうな溜息と古金具のきいきい聲を立てながら離れて行つた。

ロサリオは夢から醒めたやうにきよとんととして、空籠を背負つて歩道に立つてゐた。併し彼女にはあの戀がたきと和睦した事實がどうしても信じられなかつた。

二

もう可成り昔のこととなつたが、あの四旬齋クワレスタの或る火曜日に起つた出来事は、或る者は話に聞き、或る者は實際見た事實なので、カバニヤール村では誰でも記憶してゐる事である。それは最も麗かな日であつた。海は平穩で鏡のやうに滑かであつた。極く軽いうねりすらも無く。太陽は死んだ水の上にうごめく黄金の三角形の影を寫してゐた。

魚は神の恵のやうに漁れた。「ヴァレンシア市」の市場に於ける需要も莫大であつた。船は少しの不安もなく、この平穩にたよつて、サン・アントニオの岬の邊り迄も網を引いてゐた。船頭は一時も早く籠を満たしてカバニヤールに歸りたがてゐた。漁夫の妻達は濱でその歸りを今か今かと待つてゐた。

天候は午後になつて一變した。ヴァレンシア灣の内を東風が烈しく吹き出した。波は段々高くなつて來た。あの滑かだつた海の面は疾風に波立ち、蒼白色を呈した。山なす暗雲が水平線の邊りを走り、太陽は忽ち隠れてしまつた。濱邊にむらがる人々の恐怖は非常であつた。

海の遭難に馴れてゐる哀れな村人は、此の風が今に大暴風に變つて、漁夫の家族に犠牲者を出させるのではないかと思つた。漁夫の妻達はもう氣が氣で無かつた。疾風に裾を吹き捲られ、無暗に海岸を走り廻つた。そして、恐しい悲鳴を揚げたり、信仰してゐるあらゆる聖徒に祈を捧げたりした。男達は、砂の中に埋まつた古い船の中に風を避け、青い顔して、眉を擧め、わけもなく巻煙草を嚙んでゐた。そして彼等は、あの漁夫の遠見の利く眼で、刻々に暗くなる水平線を睨んでゐた。程なく彼等は心配して、港の入口や、東の突堤の邊に出かけて行つた。あたりの巖石にはもはや怒濤が打ち寄せて、濛々たる水煙が飛散して居た。

パンを得んが爲めに、この暴風に出會つてゐる多くの父親の運命は、この海濱の人々を戦慄せしめた。

人々は疾風の唸りを聞く毎に、砂の上によろめきながら、あの大きな櫓や、三角帆は同時に微塵になるやうに思はれた。

午後の四時頃になると、刻一刻に暗くなる水平線上に一行の白帆が現はれた。それは漂ふ水沫の如く現はれるかと思ふと、又波に隠れた。

断えず怖ろしい疾風の叫びに追はれ、蒼白い波に翻弄られ、襲はれた獸の群の如く、ばらばらになつて船は歸つて來た。風は恐ろしい力で吹く度毎に、帆を奪ひ、櫓を折り、舵を浚つて快しとする様子であつた。遂には生白い水の山を作り、装具を奪はれた船を襲つて一呑みにした。

最後の最も怖しい戦ひは港の入口に來た時であつた。結局、彼等は無事に歸つた。船の中では、足の先から頭の先まで濡れた乗組員達は、無事に歸つたので、まるで夢から醒めたやうな眼付をして、家族共に抱擁せられてゐた。

然し尙ほ髪を亂し、悲みに氣を狂はし、聲を哽らして、天に叫ぶ妻女達があつた。彼女等は今にも浪に浚はれさうに、東の突堤の上を走つてゐた。怒濤は、あの怒り狂つた海の苦い水沫に濡れた岩を砕いてゐた。彼女等は闇の中に、後に残つた多くの船の緩かな恐しい苦悶の叫びを聞くかの如く、水平線のあたりを心配さうに眺めてゐた。

未だ歸つて來ない船が多くあつた。彼等は何處に居るのだらう？ あゝ、神様よ！ 無事に歸つた夫や息子を港で抱擁したあの女達は何といふ幸福だらう！ それだのにあの未だに歸つて來ない者共——もつと不幸な者共は、波に弄ばれ、渦巻く深淵の上を彷徨ひ、

足の下には裂ける底板の響を感じ、頭の上には今にも落ちかゝりさうな蒼白い山なす波を
氣にしたがら、あの闇夜を小船で走つてゐたのである。

雨は夜通し降りしきつた。突堤では多くの女が、夜の明けのを待つてゐた。――波に
打たれ、濡れた覆衣フクロに包まり、石炭で黒くなつた泥土の上に踞んでゐた。彼女等は天の響
ひた聖徒にも聞えるやうに聲を限りに祈るかと思つると、時々祈を中止して絶望的に髪の毛
を引つ張つた。それから祈を聴き入れて呉れない聖徒に對する憎悪と悔恨に驅られて、怖
ろしい瀆神の言葉を聲高く張りあげた。

美しい夜明け！ 太陽はあの偽善者の顔を穩かな水平線上に現はした。海面には前夜の暴
風に生じた泡が切れぎれに漂つてゐた。太陽は水の上に、廣い帯のやうな、きら／＼する黄
金の射光を投げ乍ら、すべてを美化してゐた。其處には何事も起らなかつたやうに見えた。
ナサレットの濱で、太陽が先づ第一にその黄金色の光を投げたのは、ノールウエーの大型帆船ベムカンチン
の破れた胴であつた。それは前夜の嵐に吹きつけられたのであつた。砂の中に埋まり、波
に打たれながら、すた／＼に破れて大孔の開いた舷を現はしてゐた。折れた檣には未だ帆
の片が風に翻つてゐた。

その積荷は北國の材木であつた。大きな棒や罽カシの入つた板が、緩やかな波に靜かに運ば
れて岸に着いた。すると何時の間にか海岸に現はれた黒點のやうに見える怪しからぬ人々
に拾はれ、砂に呑まれたやうに無くなつてしまつた。

これはあの蟻共に取つては中々甘い仕事であつた。暴風は彼等を恵んだのである。「ルサ
ーフ、果樹園」を貫く通りを彼等はこの北國の立派な材木を引き摺りながら、ぞろ／＼と歸
つてゐた。

彼等はこれで新しい小舎の屋根板を作らうと云ふのであつた。

この海岸の泥棒達は、正當な所有者のやうにこの贖物を勇ましく馬に引かせてゐた。彼
等は恐らく、この材木が、あの砂の上に仰向けに横たはつてゐる不幸な外國人の血に染ま
つたものであるといふ事は考へなかつたらう。

海岸では税關吏や閑人共が、波打際に横たはつてゐる數個の死骸のまはりに、怖い物見
たさの様子で群がつてゐた。彼等は皆、金髪のがつしりとした體の立派な青年であつた。
着物の裂目からは女のやうに純白な堅い肉を表はしてゐた。青くつて、どんよりした、彼
等の不動の眼は、神祕的な表情で空を睨んでゐた。

このノールウエーの大型帆船ベネカシヤンの難破があゝの暴風に於ける最も著しい出来事であつた。新聞はその惨事を記載した。するとヴァレシア市の人々は遊山でもするやうに出掛けて、柔かい砂の中に舳ふなびりまでも埋まつてゐる。あの難破船を陸から眺めた。すると村人共は未だ歸つて来ない漁船の事などすっかり忘れて、夫の歸つて来ない妻女達の泣き言を、妙な様子で聞いてゐた。

災難は初めに思つた程、大きくはなかつた。海が靜まるにつれて、難破したと思はれてゐた多くの船が港に歸つて来た。

彼等は暴風から逃れて、デニアやガンディアやクイエーラなどに避難してゐたのであつた。それ等の船が港に歸つて来ると歡聲の内に迎へられた。或者は喜びの溜息をつき、或者は海に糧を得てゐるあの男共を加護してくれた總ての聖徒に感謝の辭を捧げてゐた。

たゞ一隻だけ歸つて来なかつた。それはバスクアール親方の船であつた。

バスクアール親方といふのはこのカバニール村で知らぬ者のない最も大膽な男で、斷えず氣狂ひのやうになつて金を儲けてゐた。冬には魚を漁り、夏には密輸入をやつてゐた。立派な船乗りで、斷えずアルエルやオランの海岸を航行してゐた。そしてこの亞弗利加の

北岸を、向う通りのやうにも、親しげに「向う岸」と呼んでゐた。

彼の妻のトーナは何時も二人の子供を連れて一週間以上も港で夫の歸りを待つた。一人は未だ赤兒で彼女に抱かれ、もう一人の大きい肥つた方は彼女の裾につかまつてゐた。彼女はバスクアールを待ちあぐんでゐた。そして新しい消息に接する毎にわつと泣き出して、自分の髪の毛を引つ張り乍ら、聲限りに聖母に訴へた。

漁夫共は確かな所を云はなかつたけれど、彼女と話する時には、とかく撃め顔をした。彼等は彼の船がサン・アントニオ岬の沖を嵐に吹かれて走つてゐるのを見たのであつた。――もう帆は吹き飛ばされてゐた。到底あれでは陸に歸る事は出来なからうと思はれた。又彼の船が大きな、高い、蒼白い濤に漂つてゐるかと思はれる内に、横波を食つたのを目撃したものすらあつた。そして彼等はあの船が再び水の上に現はれたか、それとも水に吞まれてしまつたか、確かな所は知らないと思つてゐた。

この不幸な妻は二人の子供を連れ、絶望とは思ひながらもなほ、萬一の希望に力を得て、何時ものやうに港で待つてゐた。遂に十二日目になると密輸入船を追求して、沿岸を巡航してゐた一隻の監視船が、バスクアールの船を海岸に引いて来た。海の昏に蔽はれて、黒

く光る龍骨^{リウカウ}を露出し、巨大な死棺のやうに薄氣味悪く浮んでゐた。邊りには怪しげな魚が集まつてゐた。これ等の小さな怪物は、罅^ヒの入つた板を通して嗅ぎ付けた餌に、引きつけられて來たのであらう。

船は岸に引き揚げられた。櫓は根元から折られ、船艙は水で一杯になつてゐた。やがて漁夫共は桶を持つて船艙の水を汲み出しに下りた。すると、邊りに散らばつてゐる網や籠などの間で彼等の足は、何か柔かいぬらぬらしたもの^カに躓いた。彼等は本能的の恐怖から叫び聲を揚げた。

それは一個の死骸であつた。彼等は船底に溜つてゐる水の中に手を突込んで、水脹れのした、青さめた死骸を取り出した。大きくなつた腹は今にも裂けさうで、頭は目もあてられぬ程傷つき、體一面は怖ろしい小魚の齒の跡に蔽はれてゐた。

その小魚共は死體に食ひ付いたまゝ離れないで直立し、死體に身の毛を竦^こたせるやうな震ひをさせてゐた。

それは正にバスク、アロー親方であつた。恐ろしい死相をしてゐたので、彼の妻は、その醜い肉塊に觸れて見る勇氣もなく、たゞわつと泣き出した。

彼は未だ船の碎けない内に強い波に打たれて、船艙に投げ込まれた。その時頭を打ち付けて死んだのであつた。かうして、彼が三十年間、一錢、二錢と貯蓄してやつと作り得た船——彼が全生涯の幻影ともいふべき、その船を枕にして斃れたのであつた。

カバニヤール村の女達は、海と云ふものが、その上で働く勇敢なる男を、如何に慘酷に取扱ふかと云ふ事を目のあたりに見て悲しみ嘆いた。そして彼女等はさめざめと泣きながら、あの肉を千切られ、潰れ果てた死骸を納めてゐる棺を墓地に送つたのであつた。

それから一週間ばかりといふものは、村はバスク、アロー親方の話で、持ち切りだつた。然し時の經つに従つて、その話も下火になり、人々は、あの赤兒を抱き、手にもう一人の子供の手を曳いて、いつも溜息をついてゐる寡婦を見なければ、彼の事など思ひ出さないやうになつてしまつた。

哀れなトーナが、夫の死以上に溢^{こぼ}したのは、貧窮の益々加はつて行くことであつた。それは並大抵の貧窮ではなくつて、その日の糧も得られないのであつた。それは住家すらも失はうとする貧窮であつた。道行く人に手を延ばし、一オチャ、一ポの銅貨やパン屑を乞はなければならぬ程の貧窮であつた。

不幸の間際には世間の人が同情を寄せてくれた。で三四ヶ月間は貰物や、近所で集めてくれた寄附金で支へて行くことが出来た。然し人は何時しかそれも忘れてしなくなつた。トーナはもう遭難者の寡婦ではなくなつて、今では、しつこい泣言を並べて、人々を煩はせる貧乏な女に過ぎなくなつてしまつた。遂には多くの人々が、彼女を家に入れないやうになり、以前には彼女に對して愛相よくしてゐる女達も、今では冷淡に顔を背けるやうになつた。

然し彼女はこの世間の冷酷に失望するやうな女ではなかつた。泣くのはもう十分だつた。彼女は見事な腕を持つた善良なる母として、二人の子供達を養育しようと思つたのであつた。

然しその資金としては、この世の中に、あの夫の斃れた破船の外何物も無かつた。それも陸の砂の中に半ば埋まつて腐りかけてゐた。雨が降れば船艙は水で一杯になり、熱い日には太陽の強い熱の爲めに板に蟻が入つてゐた。そしてその中には、いつも怖ろしい多くの蚊が巢を食つてぶんぶん云つてゐた。

トーナには一つの計畫があつた。彼女はあの船のある所で商賣をはじめようと云ふので

あつた。父の墓を彼女とその子供達の生計に役立たせようといふのであつた。

死んだバスクアールの従兄にあたるマリアーノが、吝嗇ではあつたけれど、この寡婦に資金を出してくれた。この男はもういゝ年輩だつたけれど、未だに獨身で、相當の資産があるといふ噂であつた。そして彼は死んだ従弟の二人の子供達を可成り可愛がつてゐる様子であつた。

先づ船の横腹を地面の所まで切り開けて入口を作り、その中に小さな帳場を設けた。船の奥にはブランデーやジンや葡萄酒の小さな樽を並べた。甲板は取除けて、タールを塗つた板で屋根を葺いた。かうしてあの薄暗い部屋も大分廣くなつた。船首と船尾とは孔を開けて二つの小さな部屋を作つた。

一つは彼女の、もう一つの方は子供達の寢室にした。正面の入口の上には葎の日覆を張り、その下には、型のやうに、二つの小さな跛の卓子と、それから葦草を敷いた六つの椅子までも備へた。

あの陰氣な船がかうして海濱の居酒屋になつたのであつた。船を曳く牛のゐる小舎にも遠くなく、かつは魚を陸揚げする場所でもあるので、人通りは中々繁かつた。

カバニヤールの女共は驚いてしまった。「トーナは悪魔に違ひない！ 御覽な、あんなにかせぐ事を知つてゐたんだよ！」樽や瓶が神の恵でもあるかのやうに、どんどん空になつた。漁夫共は、カバニヤールの村の酒場に行く爲めに、あの濱を全部横切る必要も無く、そこで飲めたのであつた。彼等は出帆時間を待つて居る間、日覆の蔭で跛の卓子を囲みながら、「ツルーケ・イ・フロール」と稱するランプをしたりなどしてゐた。それから彼等はトーナが玖馬から直接取り寄せてゐるといふ自慢のラムをちび／＼飲み乍ら、それらの遊戯に興じてゐた。

この陸の上の船は順風に乗つて航海した。嘗てバスクアローが波を乗り越え乍ら、網を引いて居た時すらも、今、彼の妻がこの古い破れた船の中で商賣してゐる程の利益は擧げ得なかつた。

彼女がその後最初の設備以上に續々發展して行くのを見ても、商賣の繁昌さを窺ひ知ることが出来た。

二つの小さな寢室の入口には綾絹のカーテンが掛けられた。このカーテンを捲くると中には、新しい敷布團や、白いカバーを掛けた掛布團などが見えた。帳場臺の上には、新し

い珈琲沸しが、金塊のやうに光つてゐた。船は眞白く塗られて、あの惨事を想ひ起させる墓のやうな陰鬱な外觀を失つてしまつた。店が繁昌するに従つて、船の圍りの竹圍ひを擴げて行つた。熱い砂の上には、屈強な元氣の良い牡鶏を頭に、二十羽以上の牝鶏が優しい足つきで走り廻つてゐる。この牡鶏は海濱をさまよふ野良犬共を追ひ捲くつてゐた。板圍の中には肥つた豚が、咽喉をごろごろいさせてゐた。帳場臺の向う側の、目隠しの下には、いつも二つの竈の火が燃えてゐた。其處では米を焚く釜から甘さうな汁が吹き出てゐた。さもなければ揚油の紫色の煙の中で魚を揚げる音がしてゐた。其處には繁榮と豊饒とがあつた。たゞこれだけでは金持といふ程ではないが、併し何不足無く暮して行くには十分であつた。トーナは、今では少しも借金の無いことを思ひ乍ら、部屋の中を見廻して、満足の微笑を洩すのであつた。天井には乾かした皿詰めのソーセイヂや、光澤の良いマジヨルカの腸詰や、甘鹽をした黒い鮪の切身や、胡椒を振りかけた赤いハムなどが一杯に吊してあつた。樽には酒が漲り、リコールの瓶は色さまざまに輝きながら、段々に並べられてあつた。色々な型の鍋が壁に掛けられて、今にでも甘い物を澤山に入れてあの竈の上で煮る事が出来ると云ふ具合であつた。

寡婦生活の最初の二三ヶ月といふものは、ほんとうに彼女に饑しい思をさせた。だから今では大得意で屢々繰り返して云つてゐた。——「人はどんなに云つたつて、神様は善良な者をお見捨てなさりやしないから。」

何不足無く、心配無しに暮してゐるので彼女は若返つて來た。彼女はあの船の中で肥つて肉付の良い肉屋の主婦のやうに澤々して來た。いつも日蔭にゐて海風に晒らされないの、あの海岸で船待する女共のやうに赤く陽に焼けた色をしてゐなかつた。彼女はふつくらした胸に手巾を掛けて帳場臺の後に坐つてゐた。その手巾は丈夫な絹で織つたもので、赤や黄の入つた亞刺比亞模様にとマトと卵とを現はしてゐた。彼女は斷えずこれを取り換へてゐた

彼女は部屋に多少の裝飾を施すことも出來た、店の突きあたりの白い板の上には、樽の合間々々に、安い石版畫を貼り付けた。そのけばけばしい色彩は、彼女の見事な手巾の色を打ち消してゐた。漁夫共は日覆の下で飲み乍ら、あの帳場臺の後の板に貼つてある、「獅子狩り」や、「正義の死と不義の死」や、「人生の梯子」や、六人の聖徒の肖像畫などを眺めてゐた。その中には「サン・アントニオ」の肖像も又掛け賣りする者と現金賣りする者とを現

はした「瘦せた商人と肥つた商人」の繪も缺かさないで、その側には「明日は掛賣しますが本日はお断りします」と云ふお定まりの文句も書いてあつた。

子供達が何の不足もなく育つて行くのを見ると、彼女は満足せずには居られなかつた。店は何時も繁昌してゐた、彼女が寢室の中の寢臺の板と、厚い敷布圍の間に隠してゐた古い靴下の中にはドゥーロ(五ペセ)が、ぼつ／＼一杯になつて來た。

彼女は自分の財産を一纏めにして眺めたいと思ふ時には、いそ／＼と岸邊まで出て行つた。其處から優しい眼つきで、鶏の圍ひや、露天の臺所や、淡紅色の豚の唸つてゐる廣い豚小舎や、自分の船などを眺めた。船は板圍ひや竹圍ひの間から、眩しい白塗の兩端を現はしてゐる。それは暴風に吹き飛ばされて、納屋の前庭に落ちて來た「不思議な船」とも云へさうであつた。

然し樂な事ばかりは無かつた。彼女は十分に寝ることも出來なかつた。夜明けには起きてゐた。屢々夜半に叩き起こされて、濱に歸つて來たばかりの漁夫共に給仕してやらなければならなかつた。彼等は魚を陸揚すると、夜の明けない内に又河に出掛けることになつてゐた。

此の夜半よなかに来る連中は上得意で、彼女に一番多くの金を残して行つたが、又同時に、なか／＼氣骨の折れる連中であつた。彼女は此の連中の事をよく知つてゐた。彼等は一週間も波の上で過して歸つて來ると、僅かな休養時間の間に、陸上の總ての快樂を一時に盡さうとしてゐた。彼等は蚊のやうに酒の圍りに集つた。歳取つた者共は乾いた唇に火の消えたパイプを銜へたまゝ、卓子に倚りかゝつて居眠りしてゐた。然し若い元氣な者共は、海で荒仕事をして、女氣に接しなかつたので、トーナを見ると興奮してじろじろ眺めた。すると彼女は體を曲げて、あの縞シャツを付けた海神共の亂暴な愛撫を斥けるやうな身構へをしてゐた。

彼女は大して美人といふ方ではなかつた。然しその若々しい肉付や、光澤のいゝ淺黒い顔を引き立たせる黒い眼や、薄い着物——彼女は夏になるとそれを着て夜の客にお給仕した——などの爲めにこの亂暴な若者共には美人に見えたのであつた。彼等は袖をヴァレンシアに向けると、もう「トーナ主婦さん」の所に行くことを考へてはしやぎ出した。

然し彼女はしつかりした女で、彼等を取扱ふことを知つてゐた。決して彼等のいふことを聽かなかつた。彼等が露骨にいひ寄りでもしやうものなら、彼女は馬鹿にして顔を背け

るか、または平手で張り飛ばした。不意に抱き締めでもしやうものなら、うんと蹴り付けた。その爲めに船の櫓のやうに頑丈な若者が砂の上に蹴り倒されたことは幾度もあつた。

彼女は他の女共のやうに喧嘩すきではなかつた。然しかうして人に玩具おもちゃにされては黙つてゐることが出来なかつた。彼女は母では無かつたか？ 二人の子供等が直ぐそばで、薄い板壁一枚に隔てられて、寝てゐたではないか？ 彼等の強い寢息すらも聞えてゐたではないか？ そして彼女の唯一の望みは、この小さな家族を支へて行きたいといふ事のみであつた。

子供の行末がぼつぼつ心配になつて來た。彼等は、晝間の陽の強い間は、この陸船の日蔭で遊ぶか、磯を走りまはるか、厚く海草の茂つた中に、赤黒い小さな脚を埋めて貝や榮螺を探すかして、二羽の鷗のやうに成長して行つた。兄のバスクアレトは父の生き寫しであつた。肥つて、腹が出てゐて、丸顔で、例へば食物の良い神學生の様子をしてゐた。漁夫共は彼の事を「牧師レトリック」と呼んでゐた。これは彼が一生涯、附いて廻つた綽名である。彼は弟のアントニオより八つ歳上であつた。弟の方は瘦せぎすで、神経質で、きかん氣の子供であつた。眼は母のトーナにそっくりであつた。

バスクアレットは弟に對して、まるで本當の母のやうであつた。最も忙がしかつた商賣初の頃など、トーナが酒場で働いてゐると、彼は注意深い子守のやうに弟の守りをした。濱に行つて子供達と一緒に遊んだけれど、弟を決してあの亂暴な漢垂らし共に背中を叩かせたり、後髪を引つ張らせたりさせなかつた。

夜、寝る時にはこの船酒場の狭い寢室の中で、トネット(アントニオの略稱)が一番良い場所を占めた。おとなしい兄は床の中で弟に廣い場所を譲つて、自分は片隅に丸くなつてゐた。すると弟の方は弱いくせに、暴君のやうに振舞つてゐた。

二人の子供は、大潮の日には酒場の側まで打ち寄せる緩やかな波の音に眠らされ、又冬になると、戸板にぶつつかる凄風叫びを聞き乍ら、同じ布團の中で、固く抱き合つて寝た。幾夜か大騒ぎする漁夫共の物音に眼を醒された。母が怒つて怒鳴る言や、平手で叩く牙えた音を聞くこともあつた。彼等の寢室の板壁が、中心を失つた體の恐しい打撃に振動したのも、一度だけではなかつた。然し無邪氣な彼等は何の疑ひも起さないで又怖はがりもしないで、再びすやくと眠つてゐた。

トーナは子供等に對して不公平な取扱をした。未だ寡婦になり立ての或る晩の事であつ

た。子供達がせまい部屋の中で、小さい頭を寄せ合つて、父が頭蓋骨を碎いたその同じ板——多分さうであつたらう——の上に寝てゐるのを見た時、彼女は強く感動した。そして、この陰氣な船の中で自分の夫を失つたやうに、今度は自分の子供達を失ふのではないかと云ふ感じがして泣いた。然しその後生活も豊かになり、あの慘事の記憶も薄らいで來ると、悪戯兒(いづらこ)のトネットに對して偏愛を表はし始めた。彼はみんなの者に、亂暴に我儘に振舞つたけれど、母に對しては、じやれる小猫のやうに甘えてゐた。

彼女はトネットに對して全く眼が無かつた。彼は七つの歳になるともう終日、船を出て悪戯小僧共と濱と一緒に走り廻つて暮し、晩になると着物を裂き、水に濡れ、ポケットに砂を入れて歸るといふ、先づ濱邊の小無頼漢であつた。かうして兄は弟の世話の要も無くなると、酒場で日を過ごした。彼は茶碗を洗つたり、客に給仕をしたり、鶏や豚に餌をやつたり、臺所の竈の上に煮えてゐる鍋を細心の注意で見守つたりなどしてゐた。

彼の母は暑い日の午後など帳場の後で居眠りしながら、彼をちつと眺めてゐると、何時も強い驚きに打たれた。と云ふのは、彼が、船で漁夫見習をしてゐた時分の夫そつくりであつたからである。彼の顔は光澤(つや)のいゝ、にこ／＼した、夫と同じ顔であつた。體もこつ

ごつして、頑丈な同じ體であつた。脚は太く、短かい、同じ脚であつた。そして彼は、父と同じやうに、先づ「善人」と思はせる、あの正直で飾り氣の無い様子や、愚圖で辛抱強い様子までも備へてゐた。

外見ばかりでなく、考へまでも同じであつた。非常にお人好しで、内氣だつたけれど、いざ金を儲けることになると思つた。又彼は海のあらくれ男達が糧を乞ふことの出來る裕福な慈母を熱愛してゐた。

十三歳になるともうあの酒場で働くのが馬鹿げて來た。で彼はとぎれ／＼の言葉や、矛盾した文句や、要領を得ないことを列べて自分の意志を洩らした。それがあの鈍い頭からやつと搾り出すことの出來たのであつた。その言葉を綜合して見ると、彼はあの酒場でお給仕する爲めに生れて來たのではないといふのであつた。その仕事は彼には餘り樂すぎるといふのであつた。それはあの労働の餘り好まない弟のすべきことである。彼は頑丈な體を有してゐる。彼は海が好きである。父のやうに漁夫になりたい。——といふのであつた。

トーナはそれを聞くと怖しくなつた。彼女の記憶にあの四旬齋クワレステの日の戦慄すべき出來事が甦つたのであつた。然しバスクアレットは飽くまでも意志を通さうとした。あのやうな不

祥事は毎日起るものではない。彼はバスク、アロ親方の親友であつた老船頭のボラスカ親方が屢々云ひ聞かせたやうに、働くからには、是非、父や祖父の稼業が繼ぎたいと云つた。

母は、二艘引きの網獵期の始まる時分に、到頭彼の乞を容れた。で、彼はボラスカ親方の船に、見習——所謂、船の「猫」として、乗り込むことになつた。報酬としては、食べさせて貰ひ、網の目から出るやうな雜魚——蝦だとか、龍の落し子だとか——そんなもののみんな貰ふことになつた。

彼は立派な稼業始めをした。それまでは父の古物を着てゐたけれど、トーナは息子に多少格を付けて新しい稼業に入れてやりたいと思つたので、或る午後の事、酒場を閉めて、彼を伴れて、グラオ町の雜貨店に出かけた。そこでは海員用の衣服を賣つてゐた。バスクアレットは、この店が彼には永い間、奢侈の殿堂に見えてゐたことを思ひ出した。彼は青い水兵服や、黄色い油引きの衣で作つた雨外套や、大きな防水用の長靴や、船主だけの用ひる總ての衣類などに眼を配つてゐた。それから、包み紙で作つたやうに丈夫で、堅い、マジールカ織りの一枚のシャツと、黒い羅紗で作つた胸巻きと、濃黄色のフランネルで作つた一揃ひの着物と、悪い天氣の日には首までも冠ることの出來る赤い頭巾と、上陸用の黒い

絹の帽子と——つまり見習夫に必要な一切の衣類を買つて貰つて、得意になつて出た。こんな譯で身に付ける物は何もかも整つた。もう彼は父の古着で押し通す必要もなくなつた。あの古着を着けてゐた時分には、風が吹くと帆のやうに膨らんで、厭でも早く濱邊を走らされてゐたのだが。靴もいふまでもなく買つて貰つた。然し何時も跣足に馴れてゐた彼はその靴を穿いた時程痛い思ひをしたことがなかつた。この子供は、海の爲めに生れて來たのだと云はれたことがあるが、それは嘘ではなかつた。

實際、彼にはこのボラスカ親方の船の方が、邊りに豚が唸つたり、鶏がやかましく鳴いたりする陸船よりは、遙かに居心地がよかつた。彼はよく働いた。そして彼のあてがひぶちの外に、老船頭の足蹴にもあづかつた。このボラスカ親方は、陸上では優しかつたけれど、一度船に乗ると自分の父だつて尊敬しないやうな男であつた。バスクアレトは猫のやうに身輕に檣に昇つて、航海燈を掛けたり、網を整へたりした。網を揚げる時になると引つ張る手傳をした。甲板洗ひもした。船艙で大きな魚籠も並べた。竈の火も焚いた。そして甲板で働く者共に不平を云はれないやうに、常に鍋の中のものゝ煮え加減にも注意した。然しかうした仕事の報酬として、どれだけの満足を與へて貰つたか！ 船頭とその下

の者共が食事を終る迄、彼ともう一人の見習夫とは、おとなしく、行儀よく、側にかしこまつてゐた。それから彼等はお残りを頂戴する譯であつた。二人は舳の邊りに坐り、鍋を兩脚の間に置き、パンを腕に抱いて食事をはじめた。然し、もう甘い所は前の者達がすっかり食つてしまつてゐた。匙が鍋の底に觸れるやうになると、パン片を中に入れて、鍋の金が磨いたやうに綺麗に光り出すまで浚へては食つた。

それがすむと、乗組の者が錫の徳利の底に残してゐた葡萄酒を飲んだりした。この「猫」等は、仕事が無ければ、舳で皇子のやうに横になつてゐた。シャツを洋袴の上に引き出し、腹を晒し、船の動搖に眠氣を催し乍ら、快い微風になぶられてゐた。煙草には事を缺かさなかつた。ボラスカ親方が誰にだつてくれたからである。彼は衣囊から時にはアルヘルの刻み煙草、時にはババナの粉煙草を掴み出して惜しげもなく皆の者に配つてやつた。これはカバニヤール村に密輸入されたものであつた。

この生活はバスクアレトに取つて理想的のものであつた。彼の母は、彼が上陸する度に益々肥り、益々陽に焼けるのに氣がついた。然し彼は、船の「猫」共に斷えず接してゐたにも拘らず、相變らずのお人好しであつた。この船の「猫」共は大抵どんな悪い事でも仕兼ね

ない不良少年で、話でもする時には、彼等の丈程もある大きなパイプで煙草を吸ひ乍ら、他人の顔に煙を吹きかけたりしてゐた。

トーナは長男があゝ屢々酒場に歸つて來なかつたら、殆んど彼の事を忘れたかも知れなかつた。

彼女には何時も面白いことばかりは無かつた。屢々子供の無いやうに、あの船の中で一人ぼつちで日を送ることがあつた。雑魚の配け前を得る爲めに海に出てゐる「牧師」のバスケットは休日になると、大喜びで家に歸つて、母に三四ペセータの金を手渡した。これは彼が一週間の所得であつた。もう一人の、小さい方の、悪戯小僧のトネットは、もう仕方の無い放浪兒になつてしまつて、腹でも空かなければ家に歸つて來なかつた。

彼は海岸の不良少年の群れに投じてゐた。彼等は、濱邊を一緒に駈け廻つてゐた野良犬程も、親といふものを意識しなかつた。彼は魚のやうに泳いだ。夏になると、臆面もなくあの瘦つぼちの赤黒い體を露はし、海の中に飛び込んで、散歩者共が投げる五十センチモの銅貨を口に銜へて上つて來た。晩になると、洋袴を破り、顔に摺り傷を拵へて、酒場に歸つて來た。彼は幾度か、ブランデーの樽の側に坐つて甘さうに飲んでゐるのを母に見

つけられた。或る日の事、彼は波止場に積んである箱を破つて砂糖を盗んだので、水上警察に引つ張つて行かれた。夕方になつても歸つて來ないので、母は覆衣を掛けて水上署迄行き、涙を流し乍ら、息子の黒癖を自分で矯すからと誓つて、やつと免して貰つたことすらあつた。

こんなでも彼女はトネットが可愛くて仕方が無かつた。一體、誰に似たんだらう？ あんなに正直な父と母とからこんな子供が出たと云ふのは恥かしいことである。この不良兒は、家に澤山の食物があるのに、スコットランドから來る汽船のまはりを彷徨いて、荷揚人足の際に乗じ、鱈を小脇に抱へ込んで逃げ出したりしたこともあつた。こんな子供には實際、折檻の必要があつた。丸十二になつても、仕事する氣にならないで、母に箠の先で肋骨の折れる程叩かれても、云ふ事を聽かなかつた。

トーナはマルチネスといふ男に、自分の不幸は何でも打ち明けてゐた。彼はその邊りの海岸で見張りをしてゐる若い税關の監視で、彼女の酒場の日陰の方に腰を掛け、銃を膝の上に載せて、海の果をぼんやりと眺め乍ら、主婦の止め度もない泣き言を聞いて暑い時間を通してゐた。

このマルチーネスといふ男はウエルバ生れのアンダルシア人であつた。背のすらりとした好い男で、いかめしくあの舊い正服を着けてゐた。そして話をする時には、えらさうに赤髭を捻り上げたりした。

トーナは彼を賞めてゐた。——育ちの良い人は隠されないものだ。遠くからでも直ぐにわかる。それに、まあ、何といふ優しい話ぶりをする人だらう！そして何といふ立派な文句で話す人だらう！學問した人は一目でわかると言つて。

彼は田舎の神學校で永い間修業した。今彼がかう云ふ身分になつてゐると云ふのも、第一牧師になるのが厭だつたし、それに世の中を實際に見たかつたからである。それで彼は家の者達と喧嘩して飛び出し、その擧句、税關の監視に雇はれたのである。——彼はさう云つてゐた。

酒場の主婦は、彼が品のないアンダルシア人のづう／＼辯で喋るのを夢中になつて聞いてゐた。それから彼女が話す段になると、負けない氣で、このカバニール村でも人の笑ひさうな、ごつごつして、はつきりしない西班牙語を使った。(譯註、ウァレンシアでは、標準語の西班牙語と同じく異つた方言が使はれて居る。)

「ねえ、シニョール・マルチーネス。(譯者註、「セニョール」と云ふ西班牙語は名前の前につける敬語で、「さん」といふ意味である。しかし、トーナは「シニョール」と發音してゐた。)あ

の子が悪戯するので本當に私、困つてゐるんですよ。「何の不足があるんだえ、馬鹿め。じゃ、何故、あの穢ない餓鬼どもと一緒に遊ぶんだね？」と、さう云つてゐるんですよ。シニョール・マルチーネス、貴方は大變辯口がいゝから、一つ嚇かしてやつて下さいな。おとなしくならないと、ウァレンシアに伴れて行つて、牢屋にぶちこんでやると云つてやつて下さいな。」

シニョール・マルチーネスはともかくあの悪太郎を嚇かしてみることを誓つた。そして彼は怖い顔して説諭を加へた。トネットは、その男の正服と、一時も手から離さなかつた錢砲に嚇かされて、その場だけはまあおとなしくしてゐた。

マルチーネスは、かうした小さな用事を足すことからして彼女の家庭に入り込んで益々懇意になつて來た。彼は其處で辨當を拵へて貰つた。そして殆んど終日、そこで見張りをしてゐた。酒場の主婦は一度ならず、喜んで彼の白い正服を繕つたり、下着のボタンをつけてやつたりした。

「可愛さうなマルチーネスさん！私のやうな者でもゐなかつたら、この若い好い男はど
うなるんでせう！乞食のやうに誰も構つて呉れないで、破れた着物をやつぱり着てゐる

んでせうね！ これは、全く心立てのいい女には黙つて見て居られないことですよ。」

夏の午後など、太陽が寂れた海岸一杯に光を投げて、焼けた砂から火事のやうな光を放散してゐる時分になると、何時でも、同じ場面があつた。あの竹の目覆の下で見られた。マルチーネスは帳場臺の側で草敷きの椅子に腰をかけ、好きな作者のペーレス・エスクリックの本を讀んでゐた。これは厚い幾部かになつた本で、監視の手から手へと、全海岸を渡つて來たので、手垢に汚れて、その角はもうすつかり取れてゐた。マルチーネスが用ひてゐたあの調子のいい立派な言葉や、彼女を感服させたあの道德觀は、彼女が文字を識らない爲めに、迷信的の敬意を拂つてゐたが、實は皆あの本から出てゐたのであつた。

彼女は帳場臺の後ろで、自分が何をしてゐるか解らないやうに無中で裁縫をしながら、マルチーネスに見惚れてゐた。先づ三十分ばかりも、あの意氣な赤髭に見入ると、今度は又三十分ばかりも鼻はどんな風だとか、金色の髪を兩方に押へてどんな風に甘く分けてゐるのだらうとか、そんなことにちつと見入るのであつた。

彼は頁をめくる時に屢々頭を擧げて、自分を見つめてゐる彼女の黒い瞳に出會すと、顔を赤らめた。それから又讀み續けるのであつた。

酒場の主婦は後になつて、何故あゝ見惚れてゐたかと自らを責めた。——然しこれはどういふわけなんだらう？ 嘗て夫のバスクアローの生きてゐた時分にも、どんな顔をしてゐるか、つくづく見入つた事は勿論あつた。併し今は、もう彼を眺めないではゐられない羽目に陥つて、もの狂ほしさが刻々に増すばかりだ。人がもしこれを知つたら何と云ふだらう？ 疑ひもなくあの男には、人を惹き付ける何物かがあつた。正にさうである。彼はそんなに上品で、そんなに好い男である！ 彼はそんなに話上手である！

併しこんな事を考へて見た所で私に何になる？ 私はもう四十に手がとどかうといふのに！——と反省した。確かな所は彼女も覺えてゐなかつたが兎に角三十七歳位になつてゐる筈であつた。それなのに彼マルチーネスは二十四そこ、であつた。然し何といふ悪魔の悪戯だらう！ 多少歳は過ぎてゐたけれど、彼女は未だわるくはなかつた。未だ若々しさが残つてゐた。これはあの船の若者共が、うるさくつきまとつたのを見てもわかる事であつた。

況や、世間の人達が疑を抱くやうになつたのを見れば、彼女が最初に考へたやうに、まんなら出來ない戀でも無かつたらう。實際マルチーネスの同僚や、濱に來る魚賣りの女達

は、もう意地の悪い想像を廻らして、とやかうと喋り立てゝゐた。

六八

結局、世間の人達の豫想した通りの事になつて來た。トーナは辯解する爲めに、子供達が父親を欲しがつて、あのマルチーネスでなければ厭だと云つてゐると、云ひにくさうに申譯をした。荒くれた漁夫達を遠慮會釋も無く撲り付けてゐた勇敢な女も、自ら降伏してあの臆病な青年の決心をうながさなければならなくなつた。で彼女から口を切つた。するとマルチーネスは、頭の中では高遠な事を考へてゐながら、地上の俗事には器械人形のやうに人の云ひなりになる所謂「超人の服従」をもつて、引き摺られて行つた。

この事は世間に知れ渡つた。トーナ自身はこの爲めに別に厭な顔もしなかつた。却つて今では家に主人の居ることを知つて貰ひたかつた。カペニールの町に用事でもあつて出掛ける時には、酒場をマルチーネスに預けて行つた。彼は相變らず日覆の下に腰を掛け、銃を兩膝の上に載せて海を眺めてゐた。

二人の子供ももうこの新しい事件をすっかり知つてゐる様子であつた。「牧師」すら上陸した時には多少驚いた風で母を盗み見した。そして何時もこの酒場に來てゐるあの正服を着けた金髪の青年の前に出ると何だか恥かしさうな風であつた。トネットの方は厭に、やに

やし乍ら、その事件は濱の不良少年共の間では専ら話の種になつてゐると云つた。そして以前のやうに監視の説諭に驚かなくなり、却つて嘲笑するやうになつた。それから彼を輕蔑したやうに、砂の上を飛んだり跳ねたりしながら逃げて行つた。

その當座はトーナに取つて爛熟期に於ける密月であつた。パスクーロとの結婚生活は、今になつて見れば單調なる忍従であつたやうに思はれた。彼女は、凋落に向ふ年増女に特有な爆發的の愛を捧げてマルチーネスを熱愛した。情熱の爲めに盲目になつて、世間の蔭口などにはてんで意も止めず、大膽に嘯いてゐた。「それがどうした？ 云ひたい奴は勝手な事を云ふがいゝさ！ 私よりもつと勝手な事をする人間もあるんだから。何のかのと云ふ女は、私に好い男を取られたので、嫉^あいてゐるんだ。」

何時も夢遊病者のやうな風貌をしてゐるマルチーネスは色男氣取で、彼女が睦言を云つたり、愛撫したりするまゝに委せた。彼は同僚や上官連に大にもてゝゐた。と云ふのは、彼が酒場の錢箱を融通したからであつた。そればかりではなく寢室で床の上に横になる場合には、屢々側に掛つてゐた銀貨を入れた靴下にまでも手を付けてゐた。そして彼は忽ちの内にその靴下を空^{から}にしてしまつた。然しトーナは別にやかましい事を言はうとしなかつ

た。

「私はお前さんの亭主なんだらう？　ぢやあの金だつて私のものさ。まあ酒場の繁昌して
るうちは何もこぼすには及ぶまい。」と彼は辯解してゐた。それから四五ヶ月も経つとト
ナは眞面目に考へなければならなくなつた。或る日マルチーネスに云つた。

「ねえマルチーネス、シニール・マルチーネス。貴方も眞面目に考へて呉れなくつちや、
困るわ。後生だから私の云ふ事を聽いて下さいな。聽いてくれて？　それはね、早く結婚の
手続きしなくつちやいけないのよ。もうこの儘にうつちやつて置く譯にはいかないわ。遠
からず出来る物の事を始末して置かなくつちや。二人の子供の母であつてみれば、三人目
のが生れて、これは俺の子だつて云つて呉れる亭主がゐないわけには行かないからね。」

彼はそれまで何時も、行く行くは立派な將軍か、總理大臣か、それとも溺愛してゐる小
説の主人公のやうなえらい人物にならうなどと取り止めも無い事を考へて、超然と高くと
まつてゐた。然し今、彼女にこの話を持ちかけられると不意に、高い理想の世界から墜落
して傷ついたやうに苦しさを身振をし乍らも、彼女の云ふ事には何でもかでもよろしい
よろしいと答へてゐた。

七〇

そして彼は結婚に必要な書類を取り寄せよう、然し郷里のウエルバは遠いので可成り待
たなければなるまいと云つた。

トーナはそれを待つことにした。そして斷えずこのウエルバといふ町は玖馬かフィリッピ
ンの近所にもある餘程遠い處のやうに思つてゐた。

然し時は空しく過ぎて、一方、事は愈々急迫して來た。

「マルチーネス、シニール・マルチーネス。もう後、二ヶ月しかないのよ。私にはもうこ
れが隠し切れないわ。それに人がもうみんな知つてるんだもの。子供達は新しい弟が生れ
たら、まあ、何といふでせう！」

「何も私が悪いんぢやないんだ。書類を早く送らせる爲めに私があんな澤山の手紙を書い
てるのをお前だつて知らない事はあるまい。」とマルチーネスは答へてゐた。

遂に或る日の事、彼は郷里まで行つて、厄介な書類を取つて來ると云ひ出した。その爲
めにはもう上官の許可を貰つて來たと云つた。

「それは結構よ！」その決心はトーナを喜ばせた。旅費の足しにと云つて、彼女は帳場の
箱の中に藏つて置いた金をすつかり出して渡した。

「ではさよなら、御機嫌よう！」と云ひ乍ら、別れに彼の頭を撫でて涙を落した。

トーナが待ちに待った彼は、竟に歸つて來なかつた。あの海岸に來る監視等の中には、事實を彼女に云つてくれる親切な者もあつた。

マルチーネスはウエルベに行つたのではなかつた。彼があんなに手紙を書いたのは、ヴ、レンシアの空氣が適しいので、何處か遠い處に轉任させて貰ひたいと、マドリッドに請願する爲めであつた。その請願は許可せられて、彼はコルーニャの管轄に廻されたのであつた。

トーナは氣も狂はんばかりであつた。

「泥棒！ 泥棒よりもひどい奴！ あの猫被りを見るがいゝ！ 口先の上手な奴等を信用して見るがいゝ！ この私を——財布の空になるまで買いでやつたこの私をこんな目に遭はしやがつて！ 晝寝の時間にはあの日蔭で母親のやうに優しく、頭を撫でゝやつたこの私を！」

哀れなこの女の絶望も、結婚をかくも急がせた子供の生れるのを防ぐことは出來なかつた。それから三四ヶ月も経つと、トーナは帳場臺の後ろで、肥つた牝牛のやうなふつくり

した胸を現はし乍ら、色の白い弱々しい、青眼の、黄金の球のやうに輝く金髪の女の兒に、黒い乳首を哺ませて、相變らず酒を賣つてゐた。

あの酒場になつた古船を家とする一家族の單調な生活には、別に何の變化も無く歲月は過ぎた。

「牧師」は、日に焼け、肥つて、どんな危険をも恐れない、立派な水夫になつた。ボラスカ親方の船では、見習夫から昇進して、今では押しも押されぬ重要な乗組員になつてゐた。そして毎月、四五ドローロの金を母に渡して貯蓄して貰つてゐた。

トネットには未だ仕事がなかつた。トーナが彼に仕事を見付けてやると、彼は數日の内に止めてしまつた——かうして彼と母との間には根比べが始まつてゐた。一週間ばかり靴屋の弟子になつた事もあつた。それからボラスカ親方の船に『猫』といふ名義で二月ばかり航海した。然し親方は幾ら撲つても云ふ事を聴くやうにならないので愛想を盡かしてしまつた。それから一番確實な稼業の樽師にならうとした。然し親方の方で彼を投り出してしまつた。それからとう／＼港の荷揚人足の仲間に入つた。これには不精無精に一週間二度までは働いてゐた。

彼はかうして放浪生活を送つて行く間に、悪習慣に染んで行つたけれど、村祭りの日——それはこの無頼漢に取つては最も大切な日であつた——だけ、トーナは彼の假裝姿を眺めて喜んだ。彼は口髭の生えかゝつた淺黒い顔の上に平たい大きな絹の頭巾を戴き、ほつそりとした體には身に合つた麻の青い上衣を着け、黒と緑の市松模様になつたフランネルのシャツの上には黒い絹の帯を締めてゐた。

彼女はその日の若者の母であることを誇つた。——彼もやつぱりあのいやな記憶に残つてゐるマルチーネスのやうに女誑しにならうとしてゐる。然し彼はもつと快活で、もつと大膽で、てきぱきしてゐる。その證據には、カバニールの村中の娘が、彼を自分のものにしようと争つてゐるではないか？

彼女は村の娘達が自分の息子のトネットに好意を持つてゐるのを知つて喜んだ。そして彼女等のする事をすつかり知つてゐた。

惜しいことには、彼は強いブランドーを飲む癖を捨てることが出来なかつた。兎に角彼は立派な一人前の男になつてゐた。車に轢かれても平氣でゐさうなあの鈍間な兄とは違つてゐた。

或る日曜の午後の事であつた。彼は美風軒といふ頗る——皮肉な名前である——居酒屋で、彼よりも安く働いてゐた荷揚人足の一團を相手に喧嘩を始めて、コップを投げ合つた。で監視共が取り鎮めに來た時には、短刀を手に、机を挟んで敵に迫らうとしてゐた。これが爲めに一週間以上、警察の監禁場に投げ込まれた。結局トーナの歎願と、選舉委員をしてゐたマリアーノ親方の運動で、彼を假出獄させることが出來た。然しその監禁は彼に少しの効果をも齎らさなかつた。彼は出獄した當夜、もう英國の水夫達と酒を飲んだ擧句、彼等に撲られたので、例の名題の短刀を振り廻はした。

彼はカバニール村を彷徨ひ歩く牡鶏であつた。仕事の方は手につかなかつた。暴風の夜も平氣で、酒場から酒場へと飲み歩いて、母の所へは數週間も歸つて來ないことがあつた。彼が家に寄り付かないのにはもう一つの理由があつた。それは多くの人々には、もう許嫁の關係でもあるやうに見える程の親密の伴つた、可成り眞面目な戀愛をしてゐたからであつた。然し彼の母はこの關係に反對した。勿論彼女とてもトネットに對して皇女を望んだのでは無かつたが、あの馬車屋のバエリヤの娘ドロレスでは如何にも飽き足らないと思つた。このドロレスといふ娘は、牝猿のやうに破廉恥な女であつた。確かにすばらしい美

七六

人ではあつたが、面倒をしなければならぬ姑を、取つて食ひ兼ねない女であつた。

彼女がかうした風なのは何も不思議はなかつた。と云ふのは、母を早く失ひ、あの酔はらひのバエリヤの手一つで育つたからであつた。彼女の父は夜明け方馬車に乗つて出かける時分からもう千鳥足をしてゐた。酒の爲めに體はすつかり衰へて、鼻ばかり大きくなつてゐた。そしてこの鼻は益々赤く大きくなつてゐた。

その上に彼は評判の最も悪い不徳漢であつた。彼の馬車の客と云ふのもヴレンシア市のしかも漁夫街にしかゐなかつた。英國の船でも港に着くと、水夫達を馬車に載せて遊女屋に案内するやうな恥知らずであつた。

夏の夜には自分の車に、部屋衣を着けて、白粉を頬に塗り、頭に花を翳した遊女共を載せて嫖客と一緒に海濱の料理屋に案内してゐた。すると彼等は夜の明けるまで其處で大散財した。彼は少し離れた所で、鞭と酒瓶を手から一時も放さず、獨りで酔つばらひ乍ら「俺の家畜」と稱してゐる賣春婦共を親しげに眺めてゐた。

最も甚だしいのは、自分の娘の前だつて少しも考へなした振舞をする事であつた。彼は娘に對しても、彼のお客の女でもあるかのやうに、同じ口調で話してゐた。そして酒を飲

むと何でもかでも喋らなければ気がすまなかつた。小さなドローレスはおづ／＼して、彼の亂暴な足の届かない所に坐り、眼を大きく開いてパエリヤの露骨な獨語を聞いてゐた。然し彼女の眼の中には不健全な好奇心が現はれてゐた。彼はその日に目撃したあらゆる猥褻な事を獨りで喋つてゐるのであつた。

七八

彼女はかうして育つて來たのであつた。だからこの小娘は、どんな事でも知つてゐた。それでトーナは、彼女を息子の嫁にさせたくなかつた。今、完全に女にならうとしてゐるドローレスが未だすつかり墮落し切つてゐないと云ふのも、近所のかみさん達が何かにつけて良い忠告をして遣つたからであつた。それなのに、トネットを自分の夫でもあるかのやうに家へ引き摺り込んだりして怪しからぬ事をつゞけてゐた。トネットは、馬車屋の親方が夜遅くでなければ歸らないのをいゝ事にして、彼女の家で食事をしたりした。ドローレスは彼の着物の綻びを縫つてやつたり、パエリヤの着物の衣囊ポケットから金を掴み出して男にやつたりなどした。するとあの父親は酒場で酔つばらつて正氣を失つてゐる間に、彼の仲間の者に金を盗まれたものと思つて、友達くらゐあてにならぬ奴は無いと云つて、ひどく腹を立てゝゐた。實際彼女のやつた事は立派な掠奪であつた。

トネットは自分の家であるあの海濱の酒場から、馬車屋の家へと、今日一つ、明日又一つと云ふ風に、衣類を全部運んでしまつた。

トーナは獨りぼつちでゐた。「牧師」は何時も金儲けに海に出てゐた。漁夫として漁に行くこともあれば、トレヴィエハへ鹽積みに行く船の水夫となつて航海してゐる事もあつた。トネットは酒場を飲み歩くか、さもなければパエリヤの家に入り浸つてゐた。母のトーナは、あの金髪の女兒の外に何の相手も無く、小さな店の帳場臺の後ろで、日々に老いて行つた。彼女はその子供を妙な風に愛してゐた。と云ふのはあの畜生のマルチーネスに生きうつしであつたからであつた。「いつその事、惡魔が連れて行つてしまへばいゝのに」と獨語することすらもあつた。

神は生憎善良な人間を何時も愛してはくれなかつた。彼女の商賣は寡婦生活の初期程に繁昌しなかつた。それに外にも澤山の破れ船の酒場が出來た。で漁夫達は、好きな酒場を選択することが出來た。それに、彼女はもう昔の色香も無くなつたので、海の人達はもう岡惚れして飲みに来るやうな氣も起さなかつた。

その結果は何うであつたか？ 彼女の酒場には勿論舊い得意は來てゐたけれど、今では

食つて行くに必要なだけの収入を得るにすぎなかつた。

トーナは幾度か遙かに自分の白塗の船を眺めた。火の消えた竈や殆んど破れ果てた板圍ひを眺めた。その中には毎年一回の屠殺を待つてゐる白い豚も唸つてはゐなかつた。僅かに五六羽の牡鶏が荒れ果てた砂地の上で物寂しげに餌を拾つてゐた。

時は單調に緩々と彼女に過ぎた。ただトネットの道樂を心配したり、あの正服を着けたマルチーネスの寫眞を眺めたりして、止め度無く襲ひ來る惰眠と戦つてゐた。その寫眞と云ふのは、彼女に昔の失策を忘れさせないように寢室の壁に物々しく掛かつてゐた。

あの不良な監視の惡戯と恵みとに依つて、船の中に生れた女兒の幼ないロセータは、殆んど母に構つて貰はれなかつた。彼女は野獸の兒のやうに獨りで成長して行つた。トーナは夕方になるとロセータを探して出掛けた。それから家に連れて歸ると怖しく打擲を加へて、船の中に閉ぢ込めてしまつた。で、晝間は何處かに遊んでゐて、腹が愈々空かなければ、母の許に歸つて來なかつた。

總ては神の思召である。かうしたロセータは哀れなトーナが負つて行かなければならぬ更に新しい十字架であつた。

彼女は含羞^{はにかみ}やで獨り居るのが好きだつた。貝を拾つたり、藻を集めたりしてゐない時には、何時も濕つた砂の上に寢轉んでゐた。催眠術に掛けられたやうにぼんやりして、あの青い眼で大空を眺めながら、幾時間でも過ごしてゐることがあつた。

潮風は彼女の蛇のやうにうね／＼した硬い金髪を吹き立たせ、古い袴^{スカート}を波打たせてゐた。その下には彼女の眞白い弱々しい脚が露はれてゐた。その裾の下に何時も見えてゐる部分は、太陽の熱に赤く焼けて、丁度靴下を付けてゐるやうだつた。

彼女は其處の柔かい濕つた砂の上に腹匍ひになつて、波紋^{モジュール}布のやうな面白いうねりが白い砂に寄せては返す度に散らす水沫を顔に浴び乍ら、幾時間でも過ごしてゐた。

彼女も嬌^{こゝろ}すことの出來ない放浪兒であつた。トーナは彼女の事を「親木から出た枝」と云つてゐた。あのやくざな父も、やつぱり夢見るやうにぼかんとして、何にもしないで、幾時間でも海を眺めながら過ごしてゐた。

もしもトーナが娘の働きで食つて行かねばならなかつたら、あの娘も多少何とかしたかもしれない。兎に角、彼女は愚圖で怠け者であつた。トーナが酒場でコップや皿を洗はせれば落して壊^{こぼ}すし、竈の番をさせれば鍋の中の魚を焦すと云ふ風であつた。その擧句、母も

愛想を盡かして何もさせなくなり、あの娘が濱邊を走り廻らうと、カパニャールの針仕事に行かうと好き勝手にさせてゐた。

時にはロセータは非常に物を覺えたがつた。或る日などは母に打たれてもきかないで、家を抜け出してある女教師の許に走つた。然しそれから四五日経つて、母が娘の學校に行くのを許してやらうと決心した時には、もうその女教師の許を逃げ出してしまつてゐた。それでも夏だけは哀れなトーナの手助けをした。と云ふのは、小使錢が貰へるし、同時に思ふ存分走り廻れたからであつた。ロセータは身の丈程もある瓶を背負ひ、手にコップを持つて出掛けた。そして波止場のあたりに混み合つてゐる立派な馬車の間を、金髪の纏れを風に吹かして走り廻り、夢見るやうな眼を八方に配り乍ら、弱い聲で叫んでゐた。「冷つこい水！ 冷つこい水！」と。その水は「瓦斯の泉」から汲んで來たものであつた。

かうして瓶を背負つて水を賣ることもあれば、時には菓子一杯に入れた藤の籠を提げ乍ら、「甘いのも、辛いのも。」と寂しい聲を張りあげて菓子を賣つてゐることもあつた。晩になると五十センチモばかりの金を母に渡してゐた。するとトーナの苦々しい顔も多少は和らいだ。景氣の悪い爲めにそんなに利己的になつてゐたのであつた。

かうしてロセータは成長して行つた。何時も含羞みやで、獨りぼつちで、憎らしい程平氣で母の打擲を受けてゐた。彼女には目もくれなかつたトネットを嫌つてゐたが、バスケットが海から歸つて來ると、彼女の纏れた髪を優しく撫で、やつたので、彼に對しては、屢々笑顔を見せてゐた。濱の悪少年共を侮つて、高慢な女王のやうな態度で、彼等から遠ざかつてゐた。トーナは、この娘が家での唯一の相手であつたけれど、ちつとも構つてやらなかつた。で彼女の家は冬の晩など、まるで沙漠のやうにひっそりとしてゐた。そして彼女はトネットと馬車屋の娘のことを斷えず心配してゐた。——あの阿婆摺れ娘は彼女の家族をみんな奪はうとしてゐるのだ。トネットだけではもう満足出來なくつて、彼に兄の「牧師」を連れて來させた。兄は船から降りると濱の酒場には、形式に一寸顔を出すだけで、憩ふ爲めにいそいそと馬車屋の家に出掛けた。其處では彼の訪問が別に二人の戀人の邪魔になる風でもなかつた。

トーナは、ドロレスが自分の子供達を誘惑する事よりも、實は自分が以前から望んで居た計畫が水泡に歸することの方を餘計に心配してゐた。

彼女はトネットを或る舊い友達の娘と結婚させたいと考へてゐた。

その娘と云ふのは、美しくしさでは、馬車屋の淫奔娘いたづらじずめとは比べものにならなかつたけれど、トーナはその娘の心立ての良し事——やくざな人間共の間では必要な条件——を稱めたくへてゐた。そして彼女のお眼鏡にかなつてこのロサリオが孤兒であるといふ事——これも重要な事である——は欠かきにも出しては云はなかつた。娘の両親が在世中にはカバニールに小さな店を持つてゐて、トーナも屢々其處で仕入れをしてゐた。然し彼等が死ぬると娘が後を繼いで、今でも相當の資産を持つてゐた。——少なく見積つても三四千ドゥーロはあるといふ事であつた。

その哀れた娘はトネットを本當に愛してゐた。カバニールの通りで彼にでも會ふと、優しい小羊のやうに微笑を浮べて挨拶してゐた。午後など濱に来てトーナと話しするのを唯一の楽しみにしてゐた。それもたゞ彼女が村中の娘に大騒ぎをさせる、あの色男の母であつたからであつた。

然しトネットは一向行ひを慎む模様もなかつた。彼に對して全權力を握つてゐたドロレスすらも一旦狂氣きやうきの嵐が吹きだすと彼を制御する事が出来なかつた。彼は數週間に亘つて姿を隠してしまふことがあつた。その間、人の話に寄ると、ヴァレンシアに行つてゐて、

晝間は漁夫街の或る家に寝、晩には酒に酔つばらつてだらしない遊女共を相手に暴れ廻り乍ら、ある劣等な博奕場で勝つた金を、餓ゑた海賊のやうに浪費してゐたとの事であつた。

かうして放蕩をしつゞけて歩いてゐる内に、或日彼は、大金を使ひ込んでしまつた。それが爲めに、彼の母は一月ばかりも愚痴をこぼして、斷えず我鳴り散らした。

彼はカバニールの生活がほと／＼厭になり、酒場の酒もまづくなつて來たので、同じやうな連中と一緒に海軍の志願兵になつた。

愈々出發の日になると、あの放蕩兒が青い正服を着け、白い水夫帽すいふぼうを斜かたに被り、衣類入れの袋を肩にして、ドロレスと母に暇乞ひすると、カルタヘーナに出掛けて行つた。其處には彼の乗組む軍艦が碇泊してゐた。

神と共に歩け！ トーナは非常に彼を愛してゐたけれど、兎に角彼が居なくなれば息をつくことが出來た。彼の出發を一番悲しんだのはあの哀れた孤兒のロサリオであつた。何時も口數の少ない、おとなしい彼女は濱でロセータと一緒に針仕事をしてゐた。そして、きまり、悪たよりさうに、トーナにトネットの消息を聞いたりした。

かうして時は過ぎて行つた。彼女達は、トネットが一等水兵として乗り込んでゐる練習艦「ヴィーリア・デ・マドリッド」のしてゐる航海や碇泊をあの陸船の中で想像に描いてゐた。

じめじめとした帳場臺の上に、彼からの幅の狭い封筒が投り込まれた時の歡びは、たとへやうもなかつた。それは赤い封蠟で封じてあることもあれば、パン片で封じてあることもあつた。その上には次のやうなこみ入つた宛名が肉太に書いてあつた。

牛小舎ワキノ酒場ノ主婦

トーナ様へ

其の厚い紙の封筒からは、彼女等の見た事もない植物や、荒い海や、薔薇色の霞に閉ぢこめられた沿岸や、火のやうに夕焼けた空などを思はせる珍しい異國的な香ひが流れてゐるやうに思はれた。三人の女はその手紙を始から終りまで幾度も讀み直して、未知の國の事を考へた。そしてハバナの黒奴や、フリッピンの支那人や、南亞米利加の新市街などを想像に描いて見た。

「何といふえらい子だらう！ 今度歸つて來ると、どんなに話があるだらう！ あゝなつた事は彼の爲めに良いかもしれない。旅をしていくらか確かりして來るかもしれないから。」

と思ふと又元のやうに弟息子が可愛くて耐らなくなつた。そして彼女は、馬鹿にしてゐた兄の「牧師」が順調に進んで、漁夫仲間では殆ど親方にならうとしてゐるのに、色男のトネットは艦の嚴しい規則に服従してゐるのだらうと考へると、多少やきもきさせられた。

「牧師」はいつも船主と一緒に出掛けてゐた。それから、あのトーナを救つてくれたマリアーノ親方とは何か密約すらも結んでゐた。とにかく彼は可なり金を儲けてゐた。然し家には一文も置いて行かなくなり、あの酒場の屋根の下には形式に一寸腰を下ろすと、直ぐに出掛けるといふ風なので、トーナは頗る不機嫌であつた。

彼は他所に金を貯めてゐた。それは何處であつたらう？ 無論、あの呪はれた女、ドロレスの家であつた。彼女はその金を他のにやけ男共にやつてゐたに違ひなかつた。と云ふのは彼等が従順な犬のやうに彼女の後に付き纏つてゐたから。

この大馬鹿者の「牧師」は、自分の金の紛失するのを恐れるやうに馬車屋の家に入り浸りになつてしまつた。彼はドロレスが他の男のものであるといふ事を知らなかつたらうか？ トネットから來た手紙や、彼女が近所の男に書いて貰つてゐた返事の手紙を見なかつたらうか？ 何といふ馬鹿物だらう！ 母の嘲笑も氣に止めないで入り浸りつゞけてゐ

た。そして弟に先鞭を付けられて居る事も考へないらしく、ぢり／＼と彼の位置に代らうとしてゐた。ドローレスは彼に對してもトネットに對すると同じやうに氣を付けてやつて、着物の綻びを繕つたり、貯めた金を保管してやつたりした。勿論この後者の方は、あの放蕩者のトネットにはその必要も無かつたが。

或る日の事、彼女の父親の「パエリヤ」が死んだ。——彼が馬車の車に轢かれたのを人々が家に運んで來た。彼は馭車臺から落ちたのであつた。彼は寝る時すらも離さなかつた鞭を握んだまゝ、體中の毛孔からはブランデーを浸み出して、彼にふさはしい最後を遂げた。その時彼の馬車は「俺の家畜」と呼んでゐたあの厚化粧したお客を満載してゐた。

ドローレスには他に頼る者としては魚賣をして居る叔母の「ピコーレス」しかあつた。彼女は姪を撲りさへすれば良いと心得てゐる、餘り感服しない保護者であつた。

トネットが出て行つてから二年目に重大な知らせが傳へられた。それはドローレスと「牧師」とが結婚した事であつた。その知らせは何と大きな反響を「カバニヤール」に傳へた事だらう！ 人々はドローレスから話を持ち出したのだと云つてゐた。その上に人を噴き出させ

るやうなひどい細かい事までも附け加へられた。

トネットはそれを黙つて聞かなければならなかつた。あの馬車屋の娘は彼女の家庭に何としてみても入り込まうとしてゐたのであつた。そして將にその目的を達しようとしてゐたのであつた。あの抜け目の無い女はこの先きどうなるかといふ事をちやんと知つてゐた——何時かは仕事の犠牲になるべきこの馬鹿物の亭主は望んだりかたつたりのものであつた。何といふ泥棒だらう！ 家族の中で金を儲ける唯一人の男を射落す事を何とよく心得てゐたことだらう！

然しトネットは程なく利己的な考を起して黙許してしまつた。——いつそ彼等は結婚した方がいだらう、すべてが簡単に治まるし、彼女の計畫を運ぶのにも都合だ。トネットはどうしてもロサリオと一緒にさせなければならぬ——と考へたからであつた。で、ぶつぶつは云つてゐたものゝ結婚式にも列席し、わけも無く男を捨て、他の男へと走つたあの尻軽女を「我が娘」と呼んだ。

トネットがその知らせを聞いて何といひ出すだらうといふ事は人々の興味を以て眺めてゐる事であつた。然し案外にさつぱりしたものであつた——あの水兵は、彼が「ほんとに結

構なことだ」と祝つて手紙を寄越したのが知れると、人々はその意外なのに驚いてしまつた。永い事ドロレスに遇はなかつたのと、断えず旅行して世間を識つたのとの爲めに、保護者を失つた彼女が結婚するのは至つて當然の事であると思はれる迄に、彼は變つてゐた。殊に彼女が他の男の手に落ちるよりも、あの好人物の兄と一緒にゐる方が遙かにいいことであると云つてゐた。

或日彼は除役状を懐に、荷物袋を背負つてカバニヤールに歸つて來た。人々は彼の男らしい風貌のみならず、除役金として受取つた金を撒くその氣前の良さに驚いてしまつた。かうして彼が手紙で云つた事のあるやうな氣前よさを事實の上に現はしたのであつた。

ドロレスには善良な姉に對するやうに挨拶した。もはや過去の事を思ひ出すべきではなかつた。彼とても旅行してゐる間にすゑん道樂をした。で彼は彼女の事も兄の事も別に氣に止めなかつた。ただ彼は歸省以來博して居る世間の人氣に有頂天になつてゐた。

人々は夏の夜など、今では「牧師」の住んでゐるバエリヤの元の家の門の前で、低い椅子に腰かけたり、地べたに坐つたりして、トネットの外國の話を夢中になつて聞きながら、涼み明かした。彼はその話を面白可笑しくする爲めに時には嘘もまぜて、この愚かな稱讃者共

を少なからず驚かした。

勞働の爲めに粗野で荒くれた漁夫達や、彼の昔仲間の荷揚人足共に比べると、今のトネットは、生白い顔をし、口髭を捻り上げ、手は綺麗に磨き、頭は香油を塗つて入念に撫で付け、髪を真中から分けてゐた。そして絹頭巾の下から額に卷毛を覗かせたりしてゐるさまはカバニヤールの娘達に貴公子のやうに見えた。

トーナはこの息子がすつかり氣に入つた。勿論彼が昔と變らない道樂者ではあつたけれども、以前よりは容子のよくなつた事を彼女は認めた。之はあの厳格な艦の生活から得た賜物と思はれた。彼は同じ彼であつた。然し嚴しい軍律が外側の粗暴性を磨き落したのであつた。彼は酒を飲むにしても、決して酩酊しなかつた。喧嘩をしないでも、立派に男を立てゝゐた。そしてもはや酒の上の亂暴をしなくなつた。ただ享樂主義者たる彼の利己心を満足させるのに汲々としてゐた。

これが爲めに彼は快く母の話を聞き容れた。

『ロサリオと一緒になれつて？ それは結構。あれはおとなしい娘だ。その上にあの娘は相當な資本を持つてゐるから、何か爲ようとする男に取つて大に役に立つのだ。』と云つた。

この資本こそ彼の望んだところのものであつた。

「苟も國王の海軍に勤めた事のある男子が、まさか昔のやうに波止場で袋も擔げまい。何でもやるが、これだけは御免だ。」と云つてゐた。

程なく彼がロサリオと結婚すると、トーナは大喜びだつた。これで總ては好都合だつた。何と立派な夫婦だらう！ 彼女は小さくつて、含羞みやで、従順で、盲目的に夫を信じてゐた。彼は新しい資産の内に意氣揚々と、すまし切つて、例へば彼はフランネルのシャツの下に妻の持参金の無数のドゥーロで作つた胴甲を宛てゝゐるやうであつた。そして誰に對しても片腕を貸してやるといふ風で、まるで親方のやうに夜晝カフィーに行つてパイプを吹かし、雨の降る日には新しい防水長靴をびかつかせてゐた。

ドロレスは何げない様子で彼に顔を合はせてゐた。然し女王のやうなあの眼の中には金點を散らして、底知れぬ慾望の熱を表はす火花が輝いてゐた。

幸福な一年は過ぎた。然しロサリオの生れたあの惨めな小さな店で一錢二錢と貯へられた金は、トネットの爲めに消失されてしまつた。そして濱の酒場の母が息子の無駄遣ひを咎めた時には、もう金囊の底が見えてゐた。——これは彼女自身が云つた事であつた。

貧乏が先づ頭をもたげて來た。それに附隨してトネットの家では不和や、涕泣や、打擲が始まつた。ロサリオは近所の女たちがしてゐたやうに魚籠を握つた。評判の金持の娘も今となつては、最も惨めな魚賣に身を落して、あの荒んだ骨の折れる生活をしなければならなかつた。彼女は夜半に起きた。それから濱の水溜りの中に立つて漁船の歸りを待つた。幾度か身に纏つた古い覆衣フクロを嵐に吹き捲まくられた。それから重い籠を背負つて、徒歩でヴァレンシアの市場に行つた。午後には餓と疲れの爲めにへとへとになつて歸つて來た。然し彼女は自分の「旦那様」に普通りの見えを張らして行くことが出來、又彼から悪罵や打擲を受けないやうにすることが出來れば、先づ幸福だと思つてゐた。

トネットを夜カフィーに行かせたり、船の機關士や船主共の宴會に出席させたりする爲めに、彼女はあの魚市場で幾朝か、仲間共の臺の上に見えた、湯氣の立つチョコレートや、パンの間に挟んだカツレツの前に、唆られる烈しい餓を忍んだのであつた。

怒りつばい、何かにつけてこの運の悪い結婚を呪ふ彼女の愛人に、何の不足をもさせないと云ふ事が彼女に取つて一番大切な事であつた。そして益々痩せ衰へて行く彼女には、夫に昔の評判を保たせて行く爲めに、カフィーで「ドミノ」をして遊ぶ金や、十分な食物や、

立派なフランネルのシャツやを缺かさなければ、彼女のあらゆる困窮は何でもない事のやうに思はれた。かうして行かせるには決して容易いことでは出来なかつた。彼女は未だ三十にもならないのに、ずつと老けて見えた。然しカバニヤール第一の美男子を自分の占有物としてゐることを誇りとしてゐた。

貧乏になつたトネットは兄の家に出入りするやうになつた。弟夫婦が頭を下げて来るのに引きかへ、兄夫婦の方は景氣がよかつた。

兄弟は悲境に於てお互に助け合ふべきものである。これは又頗る自然な事なのである。これが爲めにロサリオもいや／＼乍らドローレスの家に行つてゐた。そしてトネットが義理の姉と再び懇意な關係を結ぶのを忍んでゐた。此の事は彼女に殆ど耐へられないことであつたけれど、とやかう云ふべき場合ではなかつた。「牧師」の機嫌を損ねないようにする事が肝心であつた。賣る魚の無かつた時や、あの容子のいい無頼漢の夫が、港相應の小さな商賣にたづさはつてゐながら、ちつとも金を儲け得なかつた時に、數週間に涉つて彼等夫婦を養つて呉れたのは實に彼であつた。

もと／＼憎み合つてゐた二人の女は遂に表面をつくるひ切れなくなつた。

ドローレスは結婚してから四年目に妊娠した。「牧師」は神に恵まれた男のやうに、こゝこして、この目出度い知らせを人々に傳へた。近所の女達も喜んだ。然し何か一物ありさうな風で喜んで居た。其處には一つの漠然たる疑惑があつたからであつた。それはトネットが兄の家に頻繁に出入りするやうになつて、カフィーでよりも彼の家で、より多くの時を過すやうになつた時期と、彼女が遅く妊娠した時期とが、丁度符合するといふのであつた。

あの二人の姉妹は野性をむきだしにして罵り合つた。斯うして二人の間には永遠に親しみがたい隔てが生じた。それから、トネットは獨りで兄の家に行つてゐた。ロサリオにはそれが氣に入らなかつた。そして夫婦間の争ひは何時も野蠻な撲り合ひに終つてゐた。

かういふ風で時は過ぎて行つた。ロサリオはドローレスの子供がトネットと同じやうな顔をして居るといふ事を認めた。「牧師」は弟に對して昔した事の弱味があつたので彼の云ひなり放題になつてゐた。そして中々の儉約家だつたけれども、無頼漢の弟が金を強請るのを斷るわけに行かなかつた。あのバエリヤの美しい娘はロサリオのことを「肺病やみ」だとか「牝の七面鳥」だとか云つて罵つてゐた。又彼女の貧乏や、苦しい生活を嘲笑し、トネットを自分の意の儘にしてゐることを誇つた。實際彼は又昔のやうに犬の如く従順に彼女の後

を追つてゐた。

永遠のいがみあひと嘲弄的な高慢との風が、改築して立派になつた舊パエリヤの家から、ロサリオが貧窮に追はれて逃げ込んでゐるみじめな小舎へと、吹き荒んでゐるやうに思はれた。「善良な」近所の女達は御親切にも二軒の家の間を往復して、その暴慢や罵詈を齎らす役をしてゐた。

ロサリオが、激怒の爲めに眞赤になつて、眼を泣きはらし、鬱憤を晴らしたい、慰めて貰ひたいと思つた時にはいつも海濱のあの船酒場に行つた。これも今では薄暗くなつて主婦と共に老いてゐるやうに見えた。其處ではトーナとロセータとが彼女の話を困つたものだといふ様子で頭を振りながら黙つて聞いてくれた。この親子は骨肉の深い關係があるにも拘らず、暗々裡に敵意を抱いてくらしてゐた。然し二人共男に對して怖しい憎惡を持つといふ點にだけは同感であつた。彼女等の住家になつてゐたあの船は氣象臺のやうで、其處からは二つの家庭に起る總ての出來事が眺められた。

トーナは、酒場全體を支配してゐるやうに見えた監視の寫眞を尻目に見ながら、きつぱりと云つてゐた。

「男の畜生！ 何奴も此奴も首を締る紐にも足りないやくざものめ。」

何事をも知り、何事にも驚かない、處女の綺麗に澄み切つた青海のやうな眼を持つたロ

セータは夢見るやうな表情を浮べ乍ら呟いた。

「やくざでないものは、「牧師」のやうに莫迦よ。」

冬ではあつたが日向は可成り暑かつたので、「牧師」とトネットとは、濱の砂の中に埋つた古船の蔭に陽を避けてゐた。海にでも出やうものなら焼け付く程な陽氣であつた。

二人は濱の輝きと熱氣との爲めに眠氣を催してゐるやうにゆつくりと話してゐた。何とすばらしい天氣だらう！ 大抵大雨が降つたり大嵐が吹いたりする聖週間の前日とは思はれなかつた。

光の漲つた空はまばゆかつた。白銀色の雲の断片が、偶然に落ちて來た泡の塊のやうに散らばつてゐた。熱した砂の上から立ち昇る海氣は、遠く隔つてゐる物體を包んで、その輪廓を震はせてゐた。

海岸はひっそりとしてゐた。

屋根を赤く塗つて、壁に青縁の附いた窓の開いてゐる牛小舎——その中では船を曳く牡牛が反芻してゐる——は岸に揚げた漁船の長い列の彼方に四角な外形を見せてゐた。あれ等の船は、縦横に道路をつけた移動的な一市街を濱に造つてゐた。これは陸上の船を胸壁

に用ゐてゐた希臘英雄時代に於ける陣營とも見えた。

心もち船首の方に傾いてゐる太く丸い先端を持つた羅典型の櫓が槍の林のやうに立つてゐた。タールを塗つた多くの網はあの棒の林の中に生えた攀蔓性植物のやうに錯雜してゐた。

下ろした大きな帆の下では、赤い脚を露はして、烏打帽を耳の所までも被つた水陸兩棲の人々が、網を繕つたり、甘い魚の汁を煮る籠の火をかきなどして甲板の上に蠢めいてゐた。熱い砂の上には白や青に塗つた大きな龍骨が、太陽の愛撫の下にだらしなく横たはつた海の怪物のやうに坐つてゐた。

この俄かに出來た街——多分その晩には大海原の彼方に散つてしまつたであらう——は碁盤の目をなした近世市街のやうに整然たる秩序を保つてゐた。

唐草模様をなした砂へ、薄い硝子の屑のやうになつて打ち寄せてゐる波に近い第一列には、釣りをする爲めの小さな舟が、その背後の方にすらりと並んでゐる高さの揃つた色の同じい大きな曳網舟の可愛い雛兒のやうに、小さいさつぱりとした姿を浮べてゐた。

一番後ろの方には濱の老練者たる年經た舟が廣々と吹き來る風を受け、肋の邊の蟲に喰

はれた處を黒くへり込ませて表はしてゐた。その様は丁度闘牛に引き出される馬が年老いた爲に惜氣もなく捨てられようとしてるので、人間の無情さを考へ込んでゐるやうな、さうしたうら寂しいものであつた。

檣には日に干してある赤ばんだ網や、ネルの襯衣や、黄色い粗羅紗のスポンが高く風にゆらめいてゐた。この美しい満艦飾の上を縫うて鷗が輪を畫き乍ら飛び交うて、そして丁度場に酔ひ果てたかのやうに碧く落着いた海にスーツと身を落してはその軽やかな動搖に波を立たせ、眞晝時の暑さの下にギラ／＼と輝く泡をブツ／＼と立たせるのであつた。

「牧師」はその穩かな牡牛のやうな黄味がかつた眼を海から岸へと運びながら、天候の事をしやべつてゐた。

遠く彼方で水に咽を濕してゐる鳩の翼のやうに紺碧の水平線の上を迂り行く尖つた白帆を追うて視線を向けつゞけた。それからやがて岸をちつと視た、その岸はズーツと彎曲を畫いて入江を形造り緑の丘と白の家並とに縁どられてゐた。ブイグの岡は海が荒れる度に水に洗はるゝ低い濱邊からニュー／＼と高く隆起して見えた。サグントの城は柔かいキャラメル色をした嶺の連りの上にその參差とした城塞を入り組ませて見えてゐた。でも其處から更

に陸の奥を見れば地平線を劃つて齒狀をした連峯が凹凸としてゐる赤い花崗岩のドツシリした頂で、大空を舐めてゐるやうに立ち並んでゐるのであつた。

季節は既に上季節——に這入つてゐた。「牧師」は既にこの天候を確言してゐたのだが、かうした事を言ひ當てる術は彼の親方のボラス親爺から傳授されたのだとはカバニャールでは皆が知つてゐることであつた。來週迄には未だ三四回のしげがあらうが、それも大した事はあるまい。悪い天候も速に去つて、人間共が何の心配もなしにその日のパンを稼ぐことが出来るやうになるのだから、神様に感謝すべきであつた。

で彼は密輸入した黒い安葉巻をくはへて、磯の人を威壓するやうな静けさをちいつと見入りながら、ポツリ／＼と口をきいてゐた。時々水の嘩きのゆるやかさを破つて單調な歌を歌ふ女の聲が恰も地の下からでも出て來るかのやうに遠く響いた。眠氣を催させるやうな調子を合せて重い帆柱を引張つてゐる子供らの「ヨイ・ト・サアー」といふ聲も、ゆるやかに響き亘るのであつた。髪をバラ／＼に散らした女達が船の上から聲を張りあげて、牛小屋で牛に見とれてゐる「猫」共に食事だよと鳥が騒ぐやうに我鳴り立て、ゝゝゝゝ。絶え間なく規則的に打つてゐる尖鐵の槌の音も響いてゐた。で總ての騒音はその音も物も幻影的な

おぼろな中につきみ盡くしてゐる、光さへもはつきり通り得て居らぬ大氣の莊嚴な靜寂の裡に跡もなく消え失するのであつた。

トネットは兄がヂツと沈黙してゐるのは、凡ての計畫をたくらみ終せるが爲めであるか知らと思つて、その心を探りない風な面持をして兄を見てゐた。

遂に「牧師」は口を切つた。一言に纏めて言ふならば、彼は徐々に金を儲けるなんぞといふ事には既に倦き果てゝ居た。それで外の者達がしたやうに一攫千金を欲してゐた。海に出ると、凡ての計畫といふ計畫は、意のままになるものだ。たゞある者は度胸一つで素晴らしいみいりを得るのに、折角汗水たらし抜いた擧句に、碌なものしか得られない場合もある。

「どうだいわかつたかい？ トネット」と念を押すと、返事も待たないで立つて古船の軸の所まで行つた。誰かその反對側で彼の話を聴いてはゐなかつたかといふ事を見る爲めであつた。

誰もゐなかつた。濱は矢張りひつそりとしてゐた。夏にはヴァレンシアから海水浴に来る人々の爲めに掛小舎の建つ濱邊の砂の積り果てまで人つ見一人見えなかつた。彼方には旗

を上げた櫓や、交錯したヤードや、赤や黒の煙突や絞首臺のやうな起重機などが港の中に聳えてゐた。東の防波堤は地震の爲めに俄かに崛起した赤い岩石の巨壁のやうに海の中に突き出てゐた。その奥にはグラオ町の建物が重なりあつてゐた。それは倉庫を持つた大商店や仲買店や船舶代理店や銀行家や港での上流社會に屬する人々の建物であつた。

その外カバニヤール村やカニメラール村やフランサ岬などの色様々の建物が一直線に連つて、港から遠ざかるに従ひ、屋根から成り立つた尾のやうに次第に細くなつて見えた。近くには數層建の立派な家や綺麗な塔が並び、遠い端の方には海風に吹き捲られた藁屋根の白い小舎が牧場に取巻かれてゐた。

「牧師」は誰も彼の話を聞いてゐた者がななかつたので、安心して再び弟の側に坐つた。

その計畫は彼の妻の發意に依るものであつた。彼は色々と思案した擧句、それは可能的なものであると確信するに到つた。即ち漁夫達が屢々訪れる流動質の青い家——海——の筋向ひの壁とも云へさうな、例の「向う岸」のアルエルに航海しようといふのであつた。欲しい時には必ず取れない魚を取りに行かうといふのではなかつた。

それは、密輸入する爲めの見事な包み物を積み取りに行かうといふのであつた。「五月の

花」と稱する上等の煙草を船に満載して歸らうといふのであつた。これこそ正に面白い商賣である。非業な最後を遂げた彼の父も幾度となくやつたことである。

「これをどう思ふ？」と彼は念を押して云つた。

そしてこれ迄は町の巡查や港の水掛りの命令にさへ背くことの出来なかつたあの正直者の「牧師」が、永い間、頭の中に描いてゐた煙草密輸入の件を考へると、嬉しくつて耐らなさうに哄笑した。もう彼にはタールを塗つたキャンパスの包物が、砂の上に轉がつてゐるやうに思はれた。彼は善良な海の見として、祖先の人々のやつたあの冒険を回想すると、この密輸入なるものは漁業に倦きた男に取つて、極めて正常な忠實な職業であるやうに考へられた。

トネットもその仕事を面白いと思つた。彼は既に單なる水夫として傭はれて、二度ばかりもこの種の航海をしたことすらあつた。殊に今波止場に仕事が無い上に、マリアーノ親方が港で働く位ならこの仕事に限ると、始終勵ましてゐたので、兄と一緒に行くのに何等の差支も無かつた。

兄はもうその準備を終つてゐた。最も肝心なもの——彼等の船としてはもう「ガルボー

サ號」を買つてゐると打ち明けた。と、トネットがその名を聞いて驚きの叫びを揚げたので、「牧師」は明細に説明した。

「成程あの船は肋骨は離れてるし、甲板は陥ち込んでるし、まあ殆んどご坐つてゐる。波に揺られりや、古ギタール見たいな音を立てやがる代物だ——それや俺もちやんと知つてる。だがな、あれが三十ドゥローロちや全く高くはあるまい。薪を買つたまでのことだ。併し海のことがよく分つて、木葉船に乗つても航海される男にや、これで澤山だ。それに何を……」
彼は狡い大童のやうに眼をしばたき、乍ら云つた——「こんな船で仕事をすりや、萬一巡邏船に捕まつて没収されても、大した損をしないで済むといふ一得があるんだて……」

かう云つた極めて單純な論法で、彼の冒険事業の利益を確信し、彼が生命の危険を冒すと云ふ事には少しも考へ及ばさなかつた。

彼の弟と、その外に信賴出来る二人の男とで人員は整つた。

今ではもう叔父のマリアーノに相談しさへすればよかつた。叔父は自分も嘗てこの種の仕事をやつてゐたので、アルエルの事には精通してゐた。

で、一旦決心した以上、愚圖々々して餘計な心配を起してはならないと、早速彼等の尊

敬する人物——叔父のもとに駐けつける事にした。

その時刻には、叔父は「カフェー・デ・カラビーナ」で煙草を吹かしてゐるに相違無いと思つたので、二人は其處へ出掛けて行つた。

牛小舎の側を通りすがりに彼等は日々に黒くなつて寂れて行く母の船酒場を眺め乍ら、「お母さん。今日は！」と聲をかけた。すると尼の頭巾のやうに白い手巾を頭に被り、下つ脹の、光澤のいい母の顔が、帳場臺の上の天井に切り開いた窓口から覗いた。

街に近い沼の傍では穢い瘦せた羊が草を食んでゐた。水溜の中では蛙が鳴いてゐた。その單調な「ラック！ ラック！」といふ聲は濱邊の浪の吹きに雜つて聞えてゐた。

コルクの浮きを縁に付けた葡萄酒色の網が砂の上に擴げてあつた。その上を鶏が金屬的の光澤を持つた美しい羽を立て乍ら餌を拾つてゐた。

ガス運河の岸には女達が踞んで臀を動かし乍ら、毒瓦斯を發散する黒つばい泥土の上を流れる穢い水で、着物や皿を洗つてゐた。前世紀の巨獸の骨のやうに遠くに見える、組合せた新しい材料のまはりを船大工が手に槌を持つて歩き廻つてゐた。綱師は體のまはりに亞麻の束を巻き付けて、運河の岸を後退りし乍ら、指で巧に綱を作つてゐた。その綱は果て

しなく長くなつて行つた。

程なく彼等はカバニャールの「小舎街」と稱せらるゝ區域に來た。其處には貧の爲めに全く海の奴隷になつてゐる惨めな人々が住んでゐた。そのあたりの家は皆不揃ひであるのに、道路だけは眞直で整然としてゐた。赤煉瓦を敷いた歩道は家の入口の高さに従つて、所々で段をなしてゐた。

深い車の轍を残し、數週間も前に降つた雨が未だ溜つてゐるとす黒いぬかるみの小路の兩側に列んだ低い無果樹は、その粉を吹いた枝で道行く人を叩いてゐた。ごつく／＼した幹は細引で繋がれて、洗濯物が乾してあつた。それは海から吹いて來る冷たい微風に旗のやうに翻つてゐた。

白塗の小舎の間には數層建の近世式な家が所々に聳えてゐた。それ等の家は、新しい船のやうに假漆で塗られ、その家主が陸上に於ても吃水線を忘れてはならないと思つたかの如く、正面の壁も二つの異つた色で塗られてあつた。

或る家の入口には舳に彫つてある人頭のやうに彫刻した飾物が付いてゐた。それに家全體——色彩も輪廓も陸に揚げた船の様を呈し、主人の昔の海上生活を明かに示してゐた。

又或る家の門の前には高い屋根程もある滑車を附けた頑丈な橋が立つてゐた。それは二艘引きをする大型の船の船主が其處に住んでゐる事を示すものであつた。橋の絶頂には最も精巧な漁獵道具が干してあつた。それは領事旗のやうに揚々と風に靡いてゐた。「牧師」はそれ等の橋を羨しさうに眺めた。一體何時になつたら、グラオの基督様は彼をしてドローレスの爲めにこんな橋を門の前に立てさせて下さるだらうか？

ガス運河を過ぎると、ヴァレンシヤの有産階級が避暑に来るカバニールに這入つた。

緑色の大きな欄干に圍まれた低い建物の別荘は未だ閉められてひっそりとしてゐた。この寂れた街の幅廣い舗石道には通る人の足音が朗らかに反響してゐた。房々したバナナは獨りぼつちでぐつたりと垂れて、笑ひや戯談や斷えず聞える楽しいピアノの音に満ちた、賑かな夏の夜を回想してゐるかのやうであつた。ただ時々、先の尖つた頭巾を被り、手をポケットに突込み、パイプを口に啣へてのろ／＼とカフェー——未だに活氣を保つてゐる唯一の場所——へ歩いて行く村人が見られるばかりであつた。

「カラピーナ」と稱せられるカフェーは村人で一杯であつた。入口の前の天幕の下には青い服を着け黒い絹の頭巾を被り、銅色の顔をした多くの水夫共が腰掛けて「ドミノ」の札を

ばかり／＼と机に叩きつけてゐた。其處は室外であつたけれど、ジンと煙草の強い臭ひがぶんぶんしてゐた。

トネットは結婚したてによく此處に来て、氣前のいい男として皆の者にちやほやされたことがあるので、このカフェーの事はよく知つてゐた。

其處に叔父のマリアーノは大きなパイプで煙草を吹かし乍ら一人で卓子に就いてゐた。多分町長か誰かさう云つたやうな人の來るのを待つてゐたのであらう。彼はつんとして老船大工の「ゴリーお父さん」が新聞を読むのを聞いてゐた。

この老人は二十年間毎日の如く午後には必ずこのカフェーに来て、漁夫共の前で新聞の名前から廣告までも拾ひ読みしてゐた。彼等は休息日など、夜明けまでもそれを聞いてゐたのであつた。

「——議會は開かれた。——サガスタ氏は發言を求めた——」

そこで中止して隣席に坐つてゐる男にかう云つた。

「ねえおい。このサガスタといふ野郎は怪しからん奴だせ！」

それから別に説明を付け加へないで鼻眼鏡を挟み直し、さて又あの半白の鬚をもがつか

せ乍ら拾ひ読みし始めた。

「諸君——氏が昨日述べられた事に答へまして……」

するとこの——氏に就いて説明する爲めに新聞を置いて、あの夢中になつて聞いてゐる漁夫共に、えらさうな一瞥を與へ乍ら力を入れて云つた。

「この野郎は法螺吹きだ！」

よく日暮れ迄も感服してあの老人の拾ひ読みを聞いてゐた「牧師」は、その日に限つて彼には目も呉れなかつた。彼は、口から態々パイプを離して「やあ、小僧共かい！」と挨拶してくれた叔父、えらい友人達の爲めに取つてあつた席に自分達を坐らせてくれた叔父に、べこべこしてその方に氣を取られてゐた。

トネットは隣の卓子で夢中になつて骰子を振つてゐる賭博師共を後ろ向きになつて眺めた。それから時々煙で一杯になつてゐるカフェーの内部に目を配つて、石版畫の下——帳場の後ろに腰かけてゐる「カラビーナの娘」——このカフェーの看板娘を見た。

「カイヤオ」事マリアーノ親方(彼の前でこんな綽名を呼ぶ人はなかつたが)といふのはもう六十近い老人だつたけれど中々頑丈で、銅色の顔をしてゐた。眼は煙草色を呈し、半白

の口髭は猫のやうにびんと弾ね上つてゐた。そして小金でも溜めた馬鹿者に特有な高慢な風が彼全體を蔽うてゐた。

彼が若い時に「ヌマンシア號」の一等水兵として参加したあの勝戦——カイヤオ事件の事を毎日くどい程話してゐたので人には彼の事を「カイヤオ」と呼んでゐた。(譯者註。「カイヤオ」とは以前西班牙の植民地に於ける港である。)その話の中には、何かと云ふとメンデス・ヌーニェスといふ勇士の名を引き合ひに出してゐた。そして彼がこの勇士の大の親友でもあつたかのやうに、何時もドン・カストと呼んでゐた。

彼が勇しい軍艦の射撃の音をブン！ブルルーン！と口眞似しながら、例の太平洋に起つた事件を語り出すと、聞き手は皆手に汗を握つて聞くのであつた。

その上に彼は金儲けにかけて中々抜け目の無い男であつた。税關の長官から監視迄、未だ國境の守りには無頓着であつたあの幸福な時代に、密輸入を實行した。今でもなほ機會があれば結構仲間入りをしてゐた。彼の主なる職業は漁夫やその妻共に一ヶ月五割の利息で金を貸してやるといふ飛んでもない「慈善事業」であつた。かうしてあの惨めな人々を自分の権力に従へて、金を捲き上げた上に、町の選舉運動の際には彼等を道具に使つてゐた。

彼の甥達は彼が市長や町長を捉まへて『おい君！』などとぞんざいに話したり、時には町の親方連を代表して知事に陳述する爲めに、立派な着物を着て、ヴァレンシアに行つてゐたので驚嘆した。

彼は吝嗇で残酷で、何事につけ一ペーサーの金でも儲けようと考へてゐた。然し漁夫達とは親しくしてゐた。甥達は彼が死ぬると多少彼の遺産が貰へると云ふ期待以外に、何の恩恵を蒙つてはゐなかつたけれど、彼は村中で一番尊敬せらるべき徳望家と思つてゐた。でも彼等は叔父が中年の美人の下女と二人きりで住んでゐるあの女カエテラ・レイナ王通の立派な屋敷には極く稀にしか入つたことがなかつた。その女といふのは、人の云ふ所に依ると、主人と隔て無い口のきゝ方をして、何處に彼が躰繰金を隠してあるかといふ事迄知つてゐる程、危険な親密さになつてゐるとの事であつた。

彼は眼を細くして眉を寄せ乍ら、『牧師』の話を聞いた。『えらい……えらい。その計畫は正に上々だ！ 俺はお前のやうな働き者で大膽な男が好きだ。』

彼は無學な成金の虚榮心を満足させる爲めにすかさず自分の若い時の自慢話を始めた。——彼は兵役を果して一文無しで歸つて來ると祖先傳來の漁夫稼業がしたく無かつたの

でジブラルタルやアルヘルなどへ仕事に出かけたのであつた。『これは一つには商業の進興を計り、一つには世人に專賣のポロ煙草を吸はせたくなかつたから……』と辯解してゐた。兎に角、彼はあの糞度胸と彼を見捨てなかつた神の恵みとで、晩年を樂に暮して行けるだけのものは持つてゐた。彼は話を續けた——

『あの時代はまた格別だつた。何の妨げ無しに仕事が出来たんだもの。だが今日ではさう容易くは行かない。監視共が、教養所を出たちやきちやきの士官に引率されて、澤山の監視所で、蠅の羽音も聞き漏らすまいと、手を耳にあてがつて、見張つてゐる。それに今日は昔と違つて、僅か十二オンスばかりの煙草で、一時間盲になつて呉れるやうな監視もぬまい。先月もマルセイユから反物を積んで來た三艘の船が、オロペーサ岬の邊で捕まつた。假にもかう云ふ仕事をやるからには、餘程注意して掛からなくつちや……人が悪くなつたせゐるか御注進でも爲ようと云ふ人間がざらにゐるからなあ……』

『牧師』の意は決して居たのであらうか？ もしさうだとすれば彼はどしどし進む可きであつた。それに叔父は決して彼に反對して意志を翻へさせるやうな男ではなかつた。寧ろ彼は身内の者の惨めな生活に愛想を盡かして、新しく運命を開拓しやうとするのを喜んで居

た。「牧師」が此の商賣を始め、漁獵に見切りを付けて了つた方が彼の父——あの哀れなバスクアローが地下で何の位喜ぶ事だらう！

一體彼は叔父に何が頼みたかつたのだ？ 躊躇する事はない。話せばいいのだ。彼は其處に片腕貸して呉れる第二の父を持つてゐるのだ。

もしもそれが漁業の事だつたらびた一文だつて貸してはくれなかつたらう。殊な儲けも出来ないで擧句の果は溺れて死ぬると云ふこんな割の悪い稼業は大嫌ひであつた。然し商賣の事だつたら、一も二もなく承諾するであつた。

彼はもう一步も退くことが出来なかつた。あの禁制の包物に對する憧れが彼を引き摺つてゐた。でやつとの事で「牧師」が叔父に云ひ過ごしてはならないとびくびくして吃り乍ら考へを述べ出すと、叔父はもどかしくなつて自分からてきばきと切り出した。

「お前が船を持つてると云ふなら、外の費用は俺がすつかり出さうよ。では早速アルエルの倉庫にゐる友人に手紙を書かう、そして代金は俺が支拂ふ事にして一つ良い商品を積ませよう。でお前が首尾よく品物を陸に揚げたら、賣捌き方は手傳つてやるからな。」

「有難う！ 叔父さん！」と「牧師」は涙をぼろぼろ溢し乍ら呟いた。「叔父さんは親切だ！」

これで萬事好都合であつた。彼はもう何も云ふ事がなかつた。叔父はやつぱりみうちのものであつた。それに彼はあの哀れな最後を遂げたバスクアローの事を想ひ出して云つた。

「惜しい男だつた！ 實に度胸の据つた船乗りだつたに……あゝ！ とところで——彼は言葉を一寸切つて又語り出した——この商賣の利益の三割はお前にやらう。残りはみんな俺が貰ふぞ。それやもう解り切つた事だが……家族は家族、商賣は商賣だから……」

未だ感動してゐた「牧師」は此の自分勝手な議論に低頭して其の條件を承諾した。

それで話は杜切れた。トネットは二人が顔を突き合せてひそひそと話し合つてゐたことには氣も止めないで、後を振り向いて賭博者共を眺めてゐた。

「ではお前達は何時立つんだい？ 直ぐかい？」

叔父は前以て倉庫にゐる友人に手紙を出す必要があるのでさう尋ねた。

然し「牧師」は聖週間の土曜日迄は立たれないと答へた。實際彼はその前に立ちたかつた。然し義務が第一であつた。それは金曜日には弟と一緒に猶太人の團體の長として邂逅式に參列しなければならなかつた。彼の家族が何百年來人々から美望されて今日まで傳へて來たその役目を此の位の事で缺くわけには行かなかつた。

彼の着る可き死刑執行人の衣服は父の着けたものであつた。

僧侶に對しては一錢の寄進をした事がないので、村では不信仰家として通つてゐた叔父のマリアーノは甥の言ふことを聞いて、苦々しく頭を振つてゐた。

然し彼は甥に「それもよからう、まださう急ぐ事は無いから」と云つた。

「牧師」と彼の弟とは叔父の友達が來たので立ち上つた。

「萬事承知した。ではもう一度お前に來て貰つて話の結末をつけよう。……所でお前達は何か飲まないか？ 何？ まだ飯を食べてゐないつて？ さうか。では飯に歸りなさい。又會はう……」

二人の兄弟は寂しい通りに出て小舎町へと歸つて行つた。

「叔父さんは何て云つたい？」とトネットは呑氣に尋ねた。然し兄が叔父はうんと云つたと點頭いて見せると流石に喜んだ。

「では出發は定まつたね？ それは好都合だ。で甘く行けば兄さんは金持ちになるし、俺はこの夏避暑が出来るつて云ふ寸法だね！」

お人好しの「牧師」は叔父との會見が先づ成功したのと弟に油をかけられたので、すつか

り有頂天になつて、トネットを抱擁してやりたかつた。

この「馬鹿者」は全く善良な心を持つてゐた。彼は弟も好きだし、妻のドローレスも好きだし、息子のパスクアレトも無論好きだつた。

ただ遺憾な事には二人の妻の仲が悪くつて、先だつても魚市場であんな大喧嘩をしてしまつた。この事は、「牧師」は人の風聞を聞いて僅かに知つたのであつた。

夜は朗らかに明けたのに、カバニャールの通りには雷のやうな音が響き渡つた。人々はその耳を劈く間斷無き音に驚かされて、寢床から飛び起きた。

薄い寝衣を着けた村の女達は寢亂れ髪の毛のまゝ眠むさうな眼付をして門口に出て見た。曉の青味を帯びた光の中に、行列を作つた猶太人が銅鑼を叩いて、喧しい、物哀れな音を立てながらねり歩いて行つた。

曆の順が狂つてカルナバル祭と聖金曜日とが同じ日になつたかのやうに、假装した人が方々に見られた。これは村の若者達が異様な服装をして、慣例になつてゐる假装行列を作つて今邂逅式に出掛けるのであつた。

彼方には占星學者か裁判官のやうに、先の尖つた大きな帽子を被り、顔には布の假面カクを着け、手には黒檀の杖をつき、氣味の悪いほど長い衣の裾を腕に掛けた連中が、黒い油蟲の群のやうに薺めいてゐた。

或る者は一かどしやれたつもりで、折目の正しい純白な女の下着ヒナゲツを着けてゐた。その下

からは捲くつた袴ズボンの端とゴム靴を覗かせてゐた。跣足で自由に砂を踏み慣れてゐた彼等の大きな足は、その靴の中で何とも言へない痛みを感じてゐた。

猶太人の後には假装者が得意になつて通つた。彼等は、あり合せの惨めな衣裳で中世紀の芝居をやつてゐる下等な芝居小屋から、引き出されて來た役者とも見られた。彼等の衣裳は「武士の衣」といふ漠然とした俗な名の下に知られてゐるものであつた。——その小袴は小金物を付けたり繡取をしたり房を付けたりして、丁度山賊の着物のやうであつた。兜カサには鶏の尻尾で作つた妙な羽根飾を付けてゐた。腕や脚には目の荒い木綿布を巻き付けて、鋼鐵の網になぞらへた。

その後には薄黒い裳束を着けた高慢さうな猶太人が「聖母の守護兵」になり澄まして通つた。それが又滑稽に馬鹿氣て見えた。彼等はみんな立派な若者で、頭にはフレデリック大帝時代の武士の帽のやうな大きな冠を戴き、體には何處かの死棺から奪つて來たやうな銀線に飾られた黒い正服を着けてゐた。

かう云つた異様な姿を見るものは誰でも噴き出さずにはゐられなかつた。然し彼等がその役目を果たすために、その黒い莊重な顔に表はしてゐる熱心な色を見ると、敢て笑ふ程の

横着者はゐなかつた。

ましてあの武装してゐる團體を妄りに笑ひ物にすることは出来なかつた。十字架に掛けられた基督と聖母マリヤの像を守護してゐるあの猶太人達は、プリミチーブな時代から今日まで傳はつて來たあらゆる武器——騎兵の長いサーベルから樂長の小劍まで、拔身で携へてゐた。

子供達はあのけげげ、ばいばい、服装に引きつけられて後を追うて走つた。女達は皆戸口に出て、『まあ、綺麗な男ばかりだ事！』と嘆聲を發し乍ら見惚れてゐた。

この敬虔な假裝團は、こゝ一時間以内にチューリヤ親父の酒場の前の聖アントニオ街の真中で基督と聖母との邂逅式を行つて、あの忘恩な罪業深い人間達に見せてやらうといふのが目的であつた。

陽が昇るに従つて夜明けの青味を帯びた光線は、午前の淡紅色の暖かい色に變つて行つた。道には太鼓の騒がしい響や喇叭の嘯鳴たる音や勇ましい進行曲が益々加はるにつれて、このカバニール村には軍隊が入り込んで來たかのやうであつた。

やがて幾多の團體が集合すると四列縦隊を作つて勇しくまた嚴かに、征服者の如きさま

で歡聲に迎へられて進行した。

行列は屋根の上に翻つてゐる旗を授かる爲めに、隊長の家へと進んだ。それは基督受難の怖しい光景が刺繡された天鷲絨の陰慘な旗であつた。

「牧師」は世襲的特權に依つて猶太人の隊長であつた。彼は未だ夜の明けない内に起きて、不斷は箆笥の中にしまはれ、全家族に家寶と見做されてゐたあの美々しい衣裳をもの／＼しく着けたのであつた。彼はその年々肥滿して行くからだに、きちきち一杯の木綿の下着を着る時の苦しみは一通りで無かつたらう！

薄い着物を着けた彼の妻は豐滿な胸を露はし乍ら、「牧師」の短かい脚と太い腹とをあの下着の中に甘く納める爲めに、彼の體の方々を引張つたり突張つたりしてゆすぶるのであつた。その間息子のパスクレットは寢床の上に坐つて父を眺めて居た。そして父が慄悍な印度人のやうに羽根を付けた兜を被り、騎兵の恐しい長劍を下げたりするのを怪訝な顔をして見てゐた。その長い洋刀は彼が少しでも動くとき家具や壁に打つ突かつて恐しい音を立てた。

やつとの事でその骨の折れる衣裳着けはすんだ。それですつかり見事に出来上つたわけ

ではなかつたが、時間が来たのもういゝ加減に止めて置かなければならなかつた。一番下に着てゐるシャツは下着の壓迫に燃れてぶくぶくと膨らんでゐた。

彼の脚も同様に所々膨らんで腫物でも出来てゐるやうに見えた。呪はれた袴ズボン下の上部は彼の顔色が變るまでに緊められてゐた。それから彼の頭に油氣が多い爲め兜が顔に滑り落ちて鼻を傷めた。然し威嚴が第一である。彼は洋刀の鞘を拂つて、口で太鼓の「どろどろ……」と云ふ音を眞似乍ら部屋の中を大威張りで歩き廻つた。そして彼の息子は彼に守護されてゐる王子でもあるかのやうであつた。

ドローレスはぎらぎらと輝く怪しげな眼で、檻の中の熊のやうに往つたり來たりする夫を眺めてゐた。あのぶくぶくした脚を見ると、彼女は噴き出したかつたけれど耐らへてゐた。それでもこの服装を着けてゐる彼の方が、夜、タール塗の仕事着を着け、疲れ果てた獸の様子をして歸つて來る時よりも、遙かに見上げられたのであつた。

行列はもう近づいて來た。旗を授からうとして來る猶太人の音楽が聞えた。隊長の「牧師」が隊を迎へる爲めに屋敷のはづれまで出かけて行くと、妻のドローレスは大急ぎで晴着を着けて隨つた。

太鼓は規律正しく響いた。あのすばらしい團體は其處に止つて勇しい旋律につれ、足踏し乍ら體や頭を振つた。その内にトネットと二人の部下の者は落ちつきはらつた態度で旗を取る爲めにバルコンに登つた。ドローレスは義弟を梯子段に見出すと同時に、他と比較する本能が電光のやうに彼女の内に起つた。彼は立派な軍人——將軍のやうに見えた。あのぎこちない他の男達と比較にならない何物かであつた。トネットは決して兄のやうにぶくぶくの脚を持つてはゐなかつた。すらりとして、よく整つて、上品であつた。マリーナ劇場の舞臺で、五行詩を歌つたり、劍を交はしたりして、彼女を感動せしめたドン・ファン・テノリオだとか、ドン・ペトロ王だとか、エンリーケ・ラガルデーレだとか呼ばれる、あの好すいたらしい武士のやうであつた。

もう行列は樂隊を眞先に黒い旗を靡かせて教會堂へと向つてゐた。それは遠くから眺めると、うね／＼と渡つて行く美しい昆蟲のやうであつた。

やがて邂逅式が始まるのであつた。隊は二つに分れて道の兩端に進んだ。一方の隊には痛々しくやつれた聖母が陰惨な守護兵を従へてゐた。他の一方の隊には、髪を亂し汗を流し、金縁に飾られた紫の大きな衣を着けた基督が、同様の守護兵を従へてゐた。彼は、背

中に負つた十字架の重みに疲れはて、踏臺を隠したペンキ塗のキルクの岩の上に倒れ乍ら體中の毛孔から血の汗を流してゐた。そして彼が逃げ出さないやうに周圍を取り圍んでゐる非人の猶太人共はその役を一層よく勤めるために、親しみのない残忍な風を装つてゐた。深く頭中を被り、長い衣の裾を水溜の上に引き摺つてゐる懺悔者共は、子供が見て俄かに泣き出して母の袴スカートにすがりつくほど莊重で、陰惨な様子をしてゐた。

騒々しい太鼓の音は断え間なく轟き、喇叭は衣を裂くやうな音を立て、號泣の聲は屠殺場に導かれる小牛の呻きのやうにくどくどと聞えてゐた。あの武装した怖しい群集の眞中には頬紅を付け喜歌劇オペラに現はれる女奴隷の装をした背の高い娘が見られた。彼女等は聖書にあるサマリアの娘を現はす爲めに小さな瓶かぶを抱き、耳や胸には母の借り物のびかびか、する飾物を着け、脚絆と縞になつた長靴下を穿いた大きな腓ふくろはを露はしてゐた。——然しこの位の僅かなぶざまさは神に對して不敬にあたるといふ程のことではなかつた。

『主よ！ おゝ主よ！ 我が神よ！』——年とつた魚賣の女達は、あの不信仰な道樂者に取り巻かれてゐる血を流した基督の像を眺め乍ら、哀れつばい調子で呟いてゐた。

見物人の中には生白い顔をし、眼をしよんぼりしよんぼりさせて微笑んでゐる人々が見られた。こ

れは夜の目も寝ないでヴァレンシアから態々見物に來た、もの見高い人達であつた。假裝者共はこの人々に餘りひどく笑はれると眞赤になつて、海賊の部下のやうに長劍を振り舞はし乍ら嚇しつたりした。

『馬鹿者め！ 手前達は一體人を笑ふために來たのかい?!』

カバニヤール村そのもの程も舊いこの祭禮を嘲るなんて全くもつての外である！ 彼等はこんな怪しからぬ事を敢てするにも、ヴァレンシアから態々來なければならなかつたではないか？

人々はサン・アントニオ街の四つ角即ち邂逅式の行はれる場所に押し寄せた。其處には「十字架の基督の停り給ふ場所」と焼物の板の上に異様な文字で書かれてあつた。四角の覆衣フクロを被り、手巾を額にあてがつた、あの喧しい亂暴な魚賣の女達は喧嘩腰で第一列に出ようとして押し合ひへしあひしてゐた。

ロサリオも、老婆達の仲間に入つて歩道の第一列の一番良い場所で行列を見ようと、肘や膝で人を押しまくつてゐた。

哀れなあの女房は熱心に夫のトネットの事を喋つてゐた。

「ねえ、みんな御覽よ、あんな立派な猶太人は、此の行列の中に二人とはないよ。」

あの不幸な女房は夫の事をあんなに熱心にほめそやしてゐたが、併し、亂暴なトネットに夜明け方、衣裳付けをする時に打たれた痕がびり／＼してゐた。と、誰か彼女の場所を奪ふ爲めに、頑丈な體で彼女の胸のあたりを亂暴に押しつけ乍ら前に立つた者があつた。彼女が、

「そんな無茶をおしでないよ！」

といひながら振り返つて見ると、それは義姉のドロレスであつた。群集の中で窒息しさうになつてゐる息子のバスクレットを連れてゐた。彼女は何時もの高慢な風采で、人々を見下げるやうに下唇を突き出してゐた。

何と云ふ横着者だらう！ しかも人々は如何に高慢な彼女を尊敬し諂つたことだらう！二人の義姉妹は敵意を含んだ眼付で睨み合つてゐた。叔母のピコーレスは側でほんとに困つたものだといふ風をしてゐた。この前市場のチコレット屋でした仲直りは要するに休戦に過ぎなかつた。でもあゝして和解の誓を立てた事でもあるので、形ばかりの冷たい挨拶を交はしたけれど、お互の眼の中には新しい爆發を豫知させる表情が漂つてゐた。

ドロレスの大きな體に押除けられてかつとしたロサリオはただ侮蔑の身振をして彼女の視線に答へるだけに止めてゐた。

「何といふ恥知らずだらう！ づう／＼しくよくもあんなに、他人の場所が取られたものだ！……えらい事だ！ 女王様に席を譲れつて？ へん！ お前さんばかりが何もさうえらがる事はあるまいよ！ 教育のない人間は何かにつけてぼろを出すものさ。」

あの弱々しい顔色の悪い女は自分自身の言葉に酔つたかのやうに上氣して赤くなつた。まはりにゐた人々は笑つた。そして眼をばちつかせ乍ら彼女をそゝのかした。ドロレスの鷹揚に構へた頭は、背に蛇の吐きを聞く牝獅子のやうな表情で、あの肉付の良い頸の上に振り向いた。折しも行列は近くの路次を抜けてどや／＼とその通りに出て來た。好奇心の波は群集をどよめかした。

二つの行列は各々異つた方向から、邂逅の地點に同時に着く爲めに、歩調を緩めたり、足踏みしたりして、距離を測り乍ら進行した。

基督の紫の衣は太陽の最初の光を浴びて、きら／＼した光を反射してゐる羽根や兜や捧げた長劍の林の上にきらざらと輝いてゐた。その反對の側からは黒い天鵝絨の衣を纏ひ、

顔を黒い薄衣に蔽うた聖母が擔ぎ手の歩みに連れて體を上下に振り乍ら進んだ。顔を蔽うた薄衣の下では白蠟のやうな顔の上に涙が光つてゐた。多分それを拭ふ爲めであつたか、固く握つた手には皺の寄つた手巾を疊んで持つてゐた。

女達の注意を特に引いたものはあの聖母であつた。聲を揚げて泣く者が多かつた。
「おゝ、女王様の女王様！……」

その邂逅は女達の心に強い感動を與へたのであつた。一人の母があゝ云ふ境遇に立つた息子に會ふといふ事！ 彼女達は自分自身の身にかけて考へて見た。(その比較は感心されるものではなかつたが)——丁度彼女達が絞首臺に導かれる善良な正直な息子に會ふのと同じ事である。——さう考へて見た。

魚賣の老婆共はあの苦惱の聖母の前に喚き續けた。然しさうした中からなほ聖母に去年よりも何か別の裝飾が加はつてはゐないかと調べて見るだけの餘裕はあつた。

遂に邂逅の瞬間は迫つた。太鼓はその喧しい鳴りを静め、喇叭はその號泣の叫びを止め、物悲しい音楽は黙した。二つの不動の像は向ひ合つて停つた。すると單調な旋律で、小唄を歌ふ細い訴へるやうな聲が聞えた。その中には邂逅の悲しみが述べられてあつた。

人々はグランチャ親父の唱ふ其の歌を夢中になつて聞いた。彼は天鷲絨織の年取つた職工で、毎年敬虔な心からあのお祭には必ずヴァレンシアから態々來て歌ふのであつた。何といふいゝ聲だらう！ その哀調は心臓を刺つた。と、その直ぐ側のチューリヤの酒場で飲んでゐた男達がふいと高ごゑに笑ふと、ひつそりと感に打たれてゐた聴衆の中あの信心家は怒つて怒鳴つた。

「靜かにしろ！ 馬鹿者め！」

擔ぎ手は二つの像を高く上げたり下げたりした。これは見物人には聖母と基督とが交はす痛々しい絶望的な禮のやうに見えた。さうした儀式が行はれ、ヴァレンチャ親父が讚美歌を唱へて居る間、ドロレスは無恰好な自分の夫の隊長といふ對照コントラストを作つてゐるすつきりとしていかめしいトネットから一時も眼を放さなかつた。

彼女はロサリオに背中を向けてゐた。とは云へロサリオは義姉の一舉一動に目をとめてゐた。少くとも彼女が何處を眺めてゐるかは想像して知つてゐた。

「ねえ、みんな。あれを御覽な。私の亭主を目で食つてしまふんぢやあるまいね！ 何といふづぶとい女なんだらう！ しかも自分の亭主の前でさ。私のトネットが甥を遊ばせるな

んて口實で出掛けて、彼女一人きりの時には何をするか知れたもんぢやない！」

二つの行列はやがて合體して教會堂に歸り始めた。然しあの不安で嫉妬深い小さな女はドロレスの幅廣い肉感的の背中——縮れ毛の生えた美しい頸元をくつきりと見せてゐる——に向つて脅迫や罵詈を浴せてゐた。

ドロレスは遂にかつと怒つて振り返つた。

「全體、それは誰に向つて言つてる事なの？、何時になつたら止めるの？ 私は何處を見ようと大きにお世話だよ！」

彼女のあの美しい青海のやうな色をした瞳は、怒に金粉を散らしてぎらぎらと輝いた。

「さうだとも。お前さんに云つてるんだよ。男を目で取つて食ふ氣違ひ犬のお前さんに云つてるんだよ！」

ドロレスは鼻であしらひ乍ら笑つてゐた。

「大きに有難う！ お前さんはね、自分の亭主さへ大事に守つてりやよかないの？ 立派な寶なんだらうから……。亭主があるからには、まあ愛想を盡かされないやうにするさ。そして世の中の人間をみんな泥棒と思つてゐなさいつてことよ。蟲も殺さない顔をして、他人

の男を取つた女もあるんだから……」

そして彼女は自分の事をかれこれ言ふ奴はひどい目に會はしてやるばかりだと云つて、威猛高になつた。

「お母さん！ お母さん！」と息子のバスクアレットは、いきり立つた母の裾にしがみついた。彼女は淺黒い皮膚を蒼白にして、今にも躍りかゝりさうな身構へをした。するとロサリオの連れの女達は瘦せた筋ばつた腕で彼女を押へた。

「何だね……又いつものいがみ合ひを始めて！」——叔母のピコーレスは銅鑼聲をあげて我鳴りつけた。彼女の大きな體は成敗するために、二人の間に割り込んで行つた。實際彼女はあの氣違ひ女共をどうして取り扱ふかをよく知つてゐた。

「ドロレス、お前は家に歸るんだ！ それからロサリオ、お前は又憎まれ口をきくんぢやないぞ！」

脅しついたり突き飛ばしたりして、彼女達を自分に服従させようとした。

「おゝ神様！ 彼奴らは何といふ女でございませう！ あの畜生共はこの聖金曜日の邂逅行列の最中にまでもあんな眞似をしやがつてさ！ あゝ神様、神様、神様！ 當節の若い

者は何といふぶしつけのものでございませうー」

二人の女が未だ遠くから悪口を云ひ合つてゐるのを見ると、怖しい老婆は太つた巫女のやうな手を振り上げて脅しつけた。でやつとの事で仲間の女達に引きわけられて連れて行つてしまつた。

その喧嘩は忽ちカベニヤールの村中に傳はつた。

トネットの小舎では大喧嘩が始まつた。彼は猶太人の衣裳をまだ脱がない内に、妻の嫉妬を懲らしめるために酷い打擲を加へたのであつた。

「牧師」はドローレスが力一杯に引張つて下着を脱がせてくれる際、その喧嘩の真相を尋ねた。やつとの事でその下着を脱ぐと痛みも無くなり、強く緊められてゐた筋肉が不斷のやうに膨らんで來た。

「私はこんな事云ひたかないけど、ロサリオは全く氣狂よ。それはトネットだつて悪いブランドーは飲むし、随分と亂暴者だけれど、あんな豪猪のやうな手にへない女と一緒になつてるのを見ると、全く氣の毒になるわ。でも切つても切れない親身だからロサリオが幾らあゝだからつて云つて、弟を家に入れないわけには行かないわねえ。殊に今はさうよ。運

よく行けば、彼だつて立派にならないとも限らないんだから。」

「あの氣違ひにはもう餘り取り合はないやうにするがいゝね。さうすりや萬事圓く治まるから。」

先刻の腹立ちでまだ蒼くなつてゐたドローレスは點頭いて夫の言ふことに同意した。「さあ、これからは仕事だ……」

その翌日の朝である。方々の鐘樓から撞き出す鐘は榮光の響を傳へてゐた。道には馬の鈴や金具の音が響き、屑拾ひの子供は籠を携げて門口を捜し廻つてゐた。

折しも海の残骸とも云はれる「ガルボーサ號」は新しく眞白い頑丈な羅典型の大きい帆を巻き上げ、漁船のやうに見せかけて、カベニヤールの岸を抜錨したのであつた。

程なく海の彼方に出ると、ぼろ船も餘り目立たないで、寧ろ敗殘の美しさでも見せるやうに、重々しく動いて、最後の征服の途へ上つて行つた。

「ガルボーサ號」は夜も大分更けた時分には、もうサン・アントニオ岬の沖を航行してゐた。船のまはりの水の上には燈臺が赤い光を投げて、断え間ない水の動搖にちぎれたり輪を描いたりして、例へば火の魚が泳いでゐるやうであつた。

岬には怒濤に依つて碎き削られた大きな絶壁がそばだつてゐた。その背後の陸地には暗黒色のモンゴ山が廣い裾野をつくつて、汚點のやうに青空を劃つてゐた。

燈臺の光は暗闇の中を航海者を待伏せてゐる巨獣の眼のやうにぎらぎらと輝いてゐた。海風が緩かだつたので、「ガルボーサ號」は灣を横斷するのにまる一日かゝつたのであつた。

舳の向うに大海が擴がつて、彼等は今アルエルへの路に入らうとしてゐた。

艦の舵の把手の側に坐つてゐた「牧師」は方角を定めるらしく、岬の方の深い暗闇を眺めた。と同時に叔父に借りた磁石コンパスに眼を注いだ。その曇つた硝子の上には小さな洋燈が光を投げて、船のあたりを明るくしてゐた。

トネットもかたへに坐つて、自分の経験から何かと兄の手助けをしてゐた。全乗組員の中でアルエルに行つたことのあるのは彼一人であつた。

航路は大道を行くやうに眞直で平坦であつた。岬に來た處で南東に針路を取る——さうすれば風さへよければ「ガルボーサ號」はその航路をたどるまゝにして置けばよかつた。

「牧師」は両手で舵の把手を握んで船の方向を變へた。すると船は寢返りをする病人のやうに苦しさを聲をあげた。

横側に寄せてゐた緩やかな波は、今度は舳に向つて來た。すると船は上下動を始めて船首に飛沫を散らした、それは暗闇の中に輝いた。燈臺は艦の彼方に見え、そのあわたゞしい赤い影が船のあとの渦の中に漂つてゐた。

もう寢てもよかつた。で、トネットは卷いた綱を枕にし、カンパス切れを被つて檣の下に寢た。

彼の兄は夜の十二時迄當直し、その後は彼が交代して夜明けまでその任に當ることにしたのであつた。

「ガルボーサ號」の上で眼を醒ましてゐる者は、「牧師」一人であつた。

浪の騒ぎが多少あつたとは云へ、彼は足元に寝てゐる乗組員達の鼾を聞くことが出来た。海の上ではいつも少しの心配なしに話したり、悪い天気の日でも平気で網を引いてゐた彼すらも獨りつ切りになると、何かしら不安の起つて來るのを壓へることが出来なかつた。船に對する不安が先づ彼を悩ました。自分の腹でやるこの事業が怖くなつた。

「どうしてこの冒険に成功しよう！「ガルボサ號」は時化に耐へ得るであらうか！荷物を積んで西班牙に歸つた際に捕まへられはしまいか！」

彼は病兒の咳の回数や脈搏を數へる慈父のやうな注意を以て、老朽した「ガルボサ號」の苦しさを聞き聞いてゐた。それは苦痛のために彼自身が發する惱ましい叫びのやうに思はれた。それから彼は一杯に風を孕んだ帆の先端を見上げた。それは下から眺めると、圓蓋をなして澄み切つた大空を摩してゐるやうであつた。數限り無き星は悠久の輝きに震へてゐた。夜は穩かに過ぎた。太陽は夏になつたやうな暑さを以て鮮紅色の雲の間に昇つた。

ベニスの鏡のやうに滑かで穩かな紺碧の海の表面を撫でる生温い微風は、僅かに帆を孕まして、鳥の翼のやうにばたばたさせた。陸地はもう見えなかつた。左舷の水平線上にあつて薔薇色の汚點が夜明け方の霞のやうに朦朧として見えた。トネ、トはあれがイビサ島

であると部下の者共に教へた。

「ガルボサ號」は靜穩な水から成り立つた圓戲場のやうに圓形に見える大海を緩やかに走つた。遙か彼方には汽船の煙がきれ／＼になつてかすかに見えてゐた。

船の速度はその軸に殆んど水を切らない程緩やかであつた。帆は幾度かぐつたりと檣に垂れ下つて、その端で甲板を撫でた。

「ガルボサ」號の甲板からは靜かな水で海の底を計り知ることが出来た。雲も、船も、不可思議な鏡に向つたやうに、紺碧の水にその影を寫してゐた。錫片のやうにきらきら輝く魚の群は眩しい速力で泳いでゐた。巨大な海豚は浪を立て乍らその大きな口と、光る粉を散らした黒い背を露はして、惡戯小僧のやうに戯れてゐた。海の胡蝶ともいふべき飛魚が飛んでゐた。それは數秒間空氣生活をする又海水の神祕の中に消え去つた。この古船の周圍にはあらゆる異様な生物——色さまざまで虎のやうに線條の入つたもの、黒い氣味の悪いもの、大きくつて頑丈なもの、小さくつて筋ばつたもの、小さな體で大きな口を持つたもの、大きな腹をして小さな頭を持つたもの、——が波を立て、泳ぎ廻つてゐた。彼等の船は例へば海のあらゆる精を従へた希臘神話の船のやうであつた。

トネットと外の二人の水夫と静穏な海の面に釣を垂れた。

一三八

船の「猫」は舳の竈を見成つてゐた。その上には正午の料理を煮る深い鍋がぐつぐつ音を立てゝゐた。

「牧師」は狭い艙のあたりを散歩したり、水平線を眺めたりして風の無いのをこぼしてゐた。「ガルボーサ號」は全然停止してゐたわけでは無かつたが、何時も同じ場所に釘付けられてゐるかのやうに思はれた。遠くの方には帆をぐつたりと下げた水先案内船がこの風に立ちよどんでゐるのが見えた。多分マルタ島かスエズに行くのであつたらう、東に舳を向けてゐた。水平線上には幅廣い煙突を持った幾隻かの大汽船が急速力で通つた。積荷を満載したために吃水線までも沈んでゐた。これ等の船は黒海から來た穀物船で、今、南露の莫大なる收穫を積んでジブラルタル海峡に向ふのであつた。

太陽は頭の眞上に燃えてゐた。海水は火事の焰の下に熱しられたやうに泡立ち乍らぎらと輝いてゐた。空気はもう夏が來たやうに暑かつた。「ガルボーサ號」の甲板には古板が日光に焼けて、よく枯れた薪のやうにはちばちと音を立てた。

食事は整つた。船頭と水夫達は檣の下の帆の影に坐り、同じ皿おひつに各自匙を突込んで食べ

た。

彼等はみんな胸を露はし、汗をだら／＼流してゐた。この蒸し暑さの爲めに疲れ果てゝゐた。酒を入れた徳利を手から手へと廻して乾き切つた咽喉を濕した。彼等は、海鳥がこの熱い空気の中を飛ぶのを恐れてゐるかの如く、水面を掠めて飛び交ふのを羨ましさうに眺めた。

食事がすむと水夫等は、飲んだ酒よりも太陽の熱に酔つたかのやうに兩眼を閉ぢ乍ら物憂さうに蠢めいてゐた。

それから彼等は「巢」の中で寝るために、一人一人船艙に潜り込んで行つた。そしてぬらぬらした板の上に横になつた。彼等が少しでも身動きするとその板はめきめきと音を立ててゐた。

午後もその夜も無事に過ぎた。その翌朝になるとそよ風が吹き出した。「ガルボーサ」號は騒ぎ立つた波の上を、拍車をかけられた良種の老馬のやうに威勢よく走り出した。

彼等は正午頃、海の果に方つて幽かな煙の立ち昇るのを認めた。程なく「ガルボーサ號」の全乗組員は水平線の青い帯の上に鐘樓のやうな展望橋を備へた檣、それから砲塔、數個

の白塗の浮城といふ風に現はれて来るのを見た。数千の人間を乗せた一都市とも云ふべきそれ等の軍艦が、黒煙に包まれ乍ら進んでゐた。唯一隻に見えるやうに縦に列んだり、水平線全體を占めるやうに横に擴がつたりして、所々で展開演習をしてゐた。

それは全く、水底に隠れた鰐を以て水を掻き乍ら、波を騒がせてゐる一群の大海獣のやうであつた。

それは佛蘭西の地中海艦隊が展開演習をし乍ら進んでゐるのであつた。もうアルヘルも近かつた。彼等一同は駭きと怖れとを以てその艦隊を眺めた。まあ！ 何と大きな物を人間は作つたのだらう！ 隊の編成を指揮する隊長のやうに列の真中に立つて信號し乍ら走つてゐる、多くの旗と黒球をあげたあの白い砲艦——あれらの艦の中で、一番小さなものすらも、彼等の船を微塵にするには、ほんのちよつと觸れるだけで十分であらう。況やあの巨獸共が砲塔の孔に覗いてゐる大砲から噓くしゃみでもしようものなら、彼等は一體何處に飛んで行つてしまふことだか？

密輸入者共は、盗人が巡查隊の行進するのを見る時のやうな不安と敬意を以てあの艦隊を眺めた。軍艦は次第に遠ざかつて、程なく水平線下に消えてしまつた。後には僅かに浮

動する煙の跡が残つてゐるばかりであつた。それも何時の間にか青い空漠の中に呑み込まれてしまつた。

午後も半ば頃になつた時分、彼方に鯨の弓状の背とも見える黒い影が幽かに現はれ出した。——もう陸地が見えたのであつた。トネットはそれを想ひ出した。——陸地の前衛ともいふべきマラ・ドーナ岬であつた。アルヘルはその左手に當つてゐる筈であつた。

風は益々募つて、膨らんだ帆は傾いた檣の上に強い曲線を劃つてゐた。舳は波の中に沈んだり、その上を乗り越えたりして、泡に蓋はれた波から立ち上る水煙の中に優しく會釋してゐるやうであつた。

「ガルボーサ號」は、既に近くなつたのを知つて休息を得ようために最後の努力をする疲勞した馬のやうに、船全體を震はしめ、きめ、音を立て乍ら疾走した。

黄昏が來た。遠く夕靄に包まれたマラ・ドーナ岬の岸には白塗の小屋の散在した新しい陸地や低い山などが見えて來た。船は陸地に吸ひ付けられてゐるかのやうに益々急速に走つた。然し陸地は、旅行者が歩を早めるに連れて逃げるといふあの妖怪譚にある國でもあるかのように容易に近づかなかつた。

「ガルボーサ號」は南東の針路を取つてゐた。夜もとつぷりと暮れると岬を右舷に見、岸傳ひに、船を快く躍らせる小波の上を乗り越えて走つた。

沿岸の齒状をなした山脈の頂は美しい紺青の空を限つてゐた。陸地からは、珍しい香料を収めた神祕な部屋から出るやうな生温い風が吹いてゐた。

大陸の上には新月——豫言者の旗に描かれてゐるそのやうな、又回教寺院の圓蓋を飾つてゐるそのやうな、角形つのだに曲り、そしてほつそりとした東洋風な月がかゝつてゐた。それは全くアフリカに來てゐるといふ意識を強めるものであつた。

「ガルボーサ號」からは岸邊に寄せる浪の音が聞え、海岸の村々の燈火が見えた。又露營してゐるモロ人達の叫び聲も聞えた。遙か彼方の山脈の盡きる所——海が陸地に深く彎入してゐる所々にあたつて、赤色の燈がちら／＼見えた。

それがアルヘルであつた。其處に三時間かゝつてやつと着いた。船が近づくに従つて、螢で作つた念珠を地から繰り出すやうに、燈火の數が増えて來た。その光は色様々で強いのもあれば弱いのもあつた。數百の燈火は海岸傳ひの道路の縁取りをしてゐるかのやうに、蛇狀線を作つて列んでゐた。それから小さな岬を過ぎる爲めに一廻轉すると東方の港特有

の輝きを持つた市街が現はれた。

トネット以外の船員全部は感に打たれてその景色を眺めた。それを見物するのみの旅であつたらどんなによかつたらう！ 然し彼等は地獄とも云ふべき彼等の港のグラオに直ぐ歸らねばならなかつたのだ！

やがて船は暗い穩かな水をたゞへた大きな灣に入つた。その奥には内港が入口に緑と赤の燈火を點けて擴がつてゐた。その後方には數百の燈を備へて夜の闇にも白く見える市街が丘の上に層をなして延びてゐた。それは素晴らしいイルミネーションを作つて何かお祭でもやつてゐるやうであつた。何といふ瓦斯の浪費だらう！ 港の水の上には魚が花火を打ち上げて楽しんでゐるかのやうに、赤い線がうねうねと漂つてゐた。赤い洋燈が檣の林——あるものは商船の備付の無い單純なもの、又あるものは軍艦の展望樓や速射砲を取り付けたもの——の中に輝いてゐた。

波止場の上に出來た純歐羅巴風の下街にはコンサートをやるカフェーや大商店などのかつかと明りを點した店先が手に取るやうに見えた。大通ブルツァールには黒い蟻のやうな通行人や白布の屋根をした早い小車などが交錯して通つてゐた。

カフエーの音楽や兵營の消燈喇叭の音や路行く人々のざわめきや港を横切る亞刺比亞人の船頭の叫び聲などが夜の微風に送られ、ごた／＼と船に聞えて來た。——晝間は金を得る爲めにあらゆる不正を働き、夜が來ると怖しい慾望に驅られて快樂に走るあの異國的な商業都市全體の物凄い吐息が聞えるのであつた。

「牧師」はその驚きがやつと収まると、仕事の事を考へ出した。叔父の云ひ聞かしてくれた事を思ひ出した。水夫達が船脚を停める爲めに帆を下ろし出すと彼はタールを塗つた綱に火を點した。そしてその赤い炬火を船の「猫」が持ちあげてゐるカンバスの蔭で三度づつ隠し乍ら頭の上で振つた。彼は海岸の最も暗黒な部分を眺め乍ら幾度となくその信號を繰り返した。トネットやその他の乗組員等はもの珍しさうにそれを見てゐた。遂に陸地にあたつて赤い光の輝くのが見えた。それは倉庫アンタルの者が答へるのであつた。程なくもう荷物が着く筈であつた。

「牧師」は部下の者にこの方法の利を説いてやつた。然し港の中で積荷をするのは感服すべき事では無かつた。——叔父のマリアーノの經驗から、此處には沒收品の一部分を貰はうといふ了簡で、船の名と登簿番號を西班牙の官憲に電報で知らせ兼ねない「犬」が多く居つた。

そしてあのお人好しの漁夫は心の中では色々な注意をしてくれた叔父に感謝してゐ乍らも、自分自身の考から云つたかのやうにからからと高笑した。

彼が、さつき光の見えた暗い海岸を眺め乍ら、荷物の來るのを待つて居る時、トネットと他の水夫達は舳の舷に坐つて脚を海の上に垂らし乍ら、ちつとして居られない様子で、あの明るい街を眺めてゐた。

トネットは前に此處に滞在してゐた時の事をよく覚えてゐた。で彼はアルエルで經驗した色々な面白い事を水夫達に物語ると、彼等は夢中になつて聞いた。それから瓦斯の火で大きな屋號を表し、明るい窓から蜂の巢のやうなごた／＼した響と甲高い音楽とを洩らしてゐるカフエーの店口を一々彼等に指し示した。

「あれがそのコンサート付きのカフエーなんだ。それは面白いぜ、あそこは——」

すると見習夫は耳のあたり迄もぼかんと口を開いて、こまつちやくれた子供らしい眼をきよろぎよろさせ乍ら、あの頭に薄衣の大きな帽子を戴いて殆んど素裸の「歌ひ女」——臺の上で臀や腹を調子よく張り乍ら歌ふ——を眼のあたり見るやうな顔付をしてゐた。

寺院の長い廻廊のやうに拱廊を作り、その弓状窩に一つづつの燈火を備へて波止場の上に延長してゐる眞直な通りが即ち共和大通であつた。其處には澤山の大きなカフェーがあつた。その中にはアブサントを飲みに来る士官も居るし、又側の机には大きな巻布を被つた金持ちのモロー人や、穢なくつてのめめした絹の衣を纏つた猶太人の商人なども坐つてゐた。

その後方にも同様に拱廊を作つて、立派な商店の列んだ他の通りがあつた。馬場もそのあたりにあつた。其處にある白塗の大きな建物の回教本院にはマホメットの脚の骨を拜むために、沐浴したての信者共が跣足でぞろ／＼入つて來た。又船から遙かに見える小さな塔の上には一定の時間になると巻布を被つた一人の男が氣違ひのやうにぢだんだを踏み乍ら何か叫んでゐた。立派な装ひをして良い香水の香を漂はせる婦人が、人にお世辭を云はれる度に「有難う」と答へ乍ら、家鴨のやうに臀を振つて歩いて行くのがそここの通

りに見られた。兵士は棗棕栢の葉で作つた帽子を被り、全家族が入られさうな大きな袴をはいて歩いてゐた。其處には本國を追はれて來た各國の人間——家庭の厄介者ばかりであつた。二軒置き位には鋪石道の上に卓子を列べた酒場があつて、其處ではアブサントのコーブ賣をしてゐた。

トネットはこんな事は何もかも見てゐた。で彼は部下の者共に手を振つたり目をばちつかせたりして話した。彼が例の身振をして大袈裟に吹き捲くると、見習夫は幾度も噴き出して嫌らしい高笑をした。

モロー人の住んでゐる山手街はどうであつたか？ これは確かに一見すべき値のあるものであつた。通れば兩肘が壁に觸れるやうなあのグラオ市場の側の路次を彼等は想ひ出したであらう。然しあれでもこの山手街を貫く路次に比べたら大通ともいふ事が出来る位であつた。それはすつとだらだら坂になつてゐて、空は軒の爲めに殆ど蓋はれてゐた。そして石を敷いて段をなした道の上には、汚水が斷えず流れてゐるのであつた。

あんな路を昇つて行かうと思へば、途中の酒場毎に一杯づゝひつかけて元氣を付けなければならなかつた。それからあの店——惨めな小舎の前では鼻をつまんで通らねばならな

かつた。その入口には土人が地面に坐つて何か譯の分らない事を喋り乍ら煙草を吸つてゐるのであつた。

さうした中でも人々は人並に生きて行くことが出来るのであつた。そして運の向かない年には其處に行きさへすれば、安價で腹を満たすことが出来た。丈夫な胃袋を持ち、又足を撫で廻はした手で握つた肉團子を食ふのを厭はない者は、十錢銀貨一つ出せば山盛りにしたその皿とそれから復活祭の卵のやうな紅染の卵が二つ食べられるのであつた。それからまだ何處かモロ人の酒場の寝椅子の上に横になつて、卵の殻のやうな小さな茶碗で珈琲を飲み、一つの笛と二つの太鼓との音楽を聞き乍ら寝込むことすらも出来た。

尙ほ彼等には中々捨て難い事があつた。——顔に白粉をこつてりと塗り、爪を青く染め、やたらに彫物をした胸を露はに入口の處で客を呼んで居る愛想のいいモロ人の賣春婦。それから大きな手で按摩を勧め乍ら犬のやうに微笑を送つてゐる浴場の黒奴の女。それからまだ外のもの。その外のもは顔は鼻と眼しか見えないやうに包み、歩む毎にふわふわとする大きな袴を付け、覆衣の下には金刺繍をした小さな上衣と、貴金屬店の商品臺のやうに飾られた腕を表はし、ふつくらした肥えた胸には金貨や、半月で綴つた念珠を掛けて

ゐるあの上流の婦人。

何と美しい眼だらう！ 何と見事な曲線だらう！ 若者達よ！ 彼は嘗てあの山の手街のとある路次で出會はしたある立派な黒奴の女の事を想ひ出した。——もとからあゝいふ氣質だつたのもう耐らなかつた。——彼は彼女の後からあのふわふわとして見える、で石のやうに硬い袴に手を掛けた。女は鼠のやうな聲で叫んだ。すると大きな棒を持つた醜い無数の男が現はれて彼に迫つて来た。で彼と二人の仲間とは海軍ナイフの鞘を拂つて應戦した。その内に輕歩兵が来たので、やつと喧嘩は收まり、彼等は留置場に叩き込まれた。結局、領事の仲裁で二日目に放免されたのであつた。

水夫達は、この話を熱心に聽いた。そして彼の豪氣な事に驚いた。彼等があの黒奴の女の一件に就いて笑ふと、トネットはもうすっかり衰へた人間らしく足元を眺め乍ら呟いた。「あゝ、俺もあの時分は中々やつたものさ！」

「牧師」が艦の所から何か叫んだ。陸地から誰か近づいて来る氣配がした。一つの燈火が刻々に大きくなつて来た。そして一匹の大きな犬が船を目がけて泳いで来るやうな水を切

る高い音が聞えた。

それは金庫から来た小蒸汽船であつた。青い頭巾を被り赤髯を生やした立派な青年が「ガルボ一サ號」の甲板に飛び上つて来た。彼は伊太利語や佛蘭西語や希臘語やカタラン語のごつちやになつた亞弗利加の混成語で、「牧師」に彼の任務を述べた。

彼等はヴァレンシア市のモシウ・マリアーノの手紙を商品調達に間に合ふやうに受け取つたのであつた。で前夜から待つてゐた信號も見た。それで荷物を其處へ持つて来てゐるので速かに積み換へさへすればよかつた。又たとへ佛蘭西の官憲が見て見ぬ振りをしてゐた所で、かういふ仕事は手早くやつてのけた方がいゝといふのであつた。

「さあ仕事にかゝれ！ 荷物を移せ！」と、「牧師」は部下に命令した。煙突が隠れるまでに荷物を満載してゐるあの小蒸汽船から、タールを塗つたキャンパスに包まれて強い臭氣を含んだ大きな包物が、「ガルボ一サ號」の甲板に移され出した。

二艘の船はびつしりと繋ぎ付けられてあつたので、荷物の積み換へは難なく出来た。口を開いた船艙はその包みをどんどんと呑んで行つた。この仕事が進むにつれて「ガルボ一サ號」の船脚は、刻々に深く入り込み、重過ぎた積荷に呻く忍耐強い馬のやうに、めきめき

と凄い響を立てた。

小蒸汽船の金髪青年は、船が次第に沈んで行くやうなのを驚いて眺めた。

「一體この船で、あれだけの積荷が耐へられるかね？」

「牧師」は大丈夫だとばかりに、とんと胸を叩いて見せた。然し内心は少し心細くなりはじめてゐた。

「さあ、みんな積みめ！ 一包みでも残すな。神様とグラオの基督様とのお助けで、明後日の晩にはこの荷物をカベニールの濱に揚げて見せるから。」

船艙はもう荷物で一杯になつた。今度は甲板の上に包を積み上げ、舷に棒と綱とをあてがつて海に落ち込まないようにした。

「では親方、甘くおんなさい。」

金髪青年は頭巾を取り、「牧師」の手を固く握り締め乍ら早口にさう云つた。

小蒸汽船は歸つて行つた。ガルボ一サ號は帆を巻き、街を左舷に見乍ら走り出した。その光は船の遠ざかるに従つて、次第々々に薄らいで行つた。

「牧師」は船の走つてゐるのを見ると、胸の中が一杯になつた。どうか神は彼等の事を忘れ

なければいゝが！ 悪い天氣を少しでも彼等に與へなければいゝが！ 船はこの平穩な海の上すら、舷迄も沈んで緩かに船首を持ち上げ、靜かに波の上を乗り越えて、殆んど奇蹟的に航行してゐた。波はあんなに穩かだつたのに、時化しけの時のやうに舳しほを越えて打ち込んで來た。

トネットは船の危険に瀕してゐる事などには一切無頓着で、丁度波を潛つて進む水雷艇のやうだなどと戯談を云つてゐた。

夜が明けるとマラ・ドーナ岬が船の後方にあたつて朧氣に見えた。それから間もなく船は大海に出た。

「牧師」は再び陸地一つ見えない、此の地中海の眞中に來て見ると、その前夜アルエルの沖で暗闇に乗じてあゝ急に荷物を積んだ事がまるで夢のやうに思はれた。然しそれが夢でない證據にはあたりに包が澤山に積まれてあつた。その上には水夫達が荷役に疲れて寝てゐた。尙ほ一層決定的の證據としてはあの慘めなガルボ一サ號が龜のやうにのろのろと進んでゐることであつた。

何よりも「牧師」を安心させたのは天候であつた。順風に帆を揚げて海は穩かであつた。

かういふ風であつたら船は恙なくヴァレンシアに着くであらう。彼はやつと今になつてこんなぼろ船で仕事をやる事の怖ろしさが分つた。眞の恐怖といふものを知らなかつた彼も、さすがにあの勇敢な父——海を意氣地の無い友のやうに嘲つてゐた、それでゐて學句の果は波の涎のやうに腐つて人々に拾ひ上げられた——の事を考へた。

船は翌日の朝まで別に變つた事も無く航行した。空は曇つてゐた。長いうねりが水の表面を動搖させてゐた。サン・アントニオ岬は霧に包まれて見えた。モンゴ一山も同様に霧に包まれ、雲の帯に麓を取巻かれてその頂が中空に浮いてゐるやうに見えた。烈しく左舷に傾斜した「ガルボ一サ號」はその膨らんだ帆で水を撫でるばかりになつてゐて速に走つた。どうやら險惡になつて來た空模様が「牧師」を不安にした。——この天氣では荷揚をするのに晩まで待たなければなるまいと思はれたからであつた。

と俄かに彼は舵の把手を離して立ち上つた。そして灰色の岬のあたりに見える一つの白帆に眼を注いだ。えい畜生！……彼の驚いたのも無理はなかつた。彼はあの船が何物であるかをよく識つてゐたから。それは岬の沖を警戒して走つてゐるらしいヴァレンシアの巡邏船であつた。誰かの犬がカベニヤールで彼等の消息を嗅ぎつけて、「ガルボ一サ號」が漁獵以

外の用件で出帆したのだと云ひ觸らしたのであらう。

トネットもあの船が何物であるかに感づくくと、不安さうに兄の顔を眺めた。

「まだ時はあるよ。沖に逃げ出さう！」

そこで「ガルボーサ號」は方向を換へて岬を離れ、北東指して逃げ出した。

巡邏船も暫くすると彼等の船を追窮するものやうに同じ行動を取つた。あの船は「ガルボーサ號」より遙かに優秀で速力が早かつたけれど、二つの船の間は中々大なる距離があつた。で「牧師」は自分のぼろ船が荷物と一緒に波に呑まれない限り、マルセイユ迄も落ち延びる覺悟で、ともかく逃げられるだけ逃げようと決心した。

追窮は正午まで續いた。その時彼等はヴァレンシアの沖までも來てゐたに相違なかつた。然し巡邏船は其處で方向を轉じてまた陸地の方へ向つた。「牧師」は追窮者の意志を感じいた——天候が餘り確實で無かつたし、それにガルボーサ號は遅かれ早かれ荷揚の爲めに陸地に歸つて來るに相違ないと信じて、巡邏船は沿岸を航行しながら待つことにしたらしかつた。

かうして一と休みさせて呉れるといふのは本當に有難い。さあ、みなの方！ 避難所を

捜さう。「ガルボーサ號」のやうなぼろ船ではこの天氣にはとても耐へられないから。さうだ！ コルンブレータス島に行かう！ あそこは商業の 者にならうとして海で追窮された正直な人間達の隠れ場所だ！」

夜の九時頃になると、青い波が騒ぎ高まつて、疲れた「ガルボーサ號」を激しく動揺させた。その時船は燈臺の赤い火に導かれて大コルンブレータ島に入つた。それは海水の侵入した死火山の舊噴火口で、高い岩に取り圍まれ乍ら蹄鐵形をなしてゐた。その一方の端に燈臺と燈臺守の家とが建つてゐた。内部には穩かな水をたゞへた小さな灣が開けてゐた。其處には東風が決して吹き込まなかつた。

島は圓を描いた絶壁から成り立つて掌程の平地も無かつた。それは荒涼たる高い焼け岩の帯で潮風に噛まれ、灌木一本生えない呪はれた土地であつた。その上からは這ひ廻る澤山の蝸のために石塊が、暴風の日に波に高く投げ上げられた魚の死骨と一緒になつて轉り落ちてゐた。小コルンブレータス諸島は遙か彼方の海の上に散在してゐた。

その内のフラダダ島は波の上に、水中寺院の弓形門のやうな洞門を見せてゐた。絶壁から成り立つた外の小島は神祕な深海の底に埋もつた前世紀の巨獸の指のやうに直立して、

實に巨大なものであつた。

「ガルポーサ號」はその灣内に碇泊してゐた。燈臺からは誰も船を見に下りて來なかつた。燈臺守は、人とがめられないためにこの孤島に避難する航海者の、不思議な訪問には馴れてゐたからであつた。

船の乗組員等は突堤にあたつて燈臺の附屬家屋の燈火を眺めた。人間の聲がともすると風に送られて來た。然しそれも岩に止つて、虐殺に遭つてゐる子供のやうな哀れつぽい聲で鳴いてゐる無数の鷗の聲に打ち消された。

島の絶壁の外側には怒濤が怖しい響を立てゝゐた。岩壁に沿うて走る波は凄じいうねりを作つて、暗黒な灣に突入すると和らいだ。

「牧師」は夜が明けると上陸した。岩に刻んである甍々した石段を登つて、絶頂に着いた。そして霧の爲めによく見えない彼方の陸地とこの島との間に擴がる海を眺めた。

海上には一つの帆すらも見えなかつた。然し「牧師」はあの追窮者共が、密輸入者の避難所としてよく知られてゐるこの島に彼等を押へに來るのではないかと考へると不安に襲はれた。

彼の不安の念は益々加つて來た。——早かれ遅かれ巡邏船がコロンブレータス島に彼等を追窮して來るやうな氣がした。かと云つてこのぼろ船を以て今大海に乗り出して行く勇氣も出なかつた。生命位何んでもない。然し彼の全財産たるこの積荷の事が何よりも心配であつた。

物質的の利己主義が彼の決心を促した。

「海に乗り出さう、荷物が鱒の餌食になつても構ふものか！ 海岸遍視の泥棒共に沒收されるよりは餘程ましだ。」

乗組員が肉汁を飲み終ると、「ガルポーサ號」は出帆の準備に取りかゝつた。そして彼等は誰にも挨拶せず島を出て行つた。燈臺守の家族等は塔の下の小さな廣場に集つて、怪訝な眼付でそれを見送つてゐた。

何といふ怖しい天候だらう！ 怒濤は後から後からと「ガルポーサ號」の舷を打つた。そして船は底知れぬ暗い水の谷——その底には渦卷が地獄の反逆的な眼とも見える旋廻の中心を動かしてゐる——に眞倒に落ち込むかと思ふと、忽ち山なす波の頂に垂直に突立つた。波の打撃を受ける毎に水煙が兩舷から立ち昇つて、全甲板を濡らした。水泡は包の上

に被せた油引きの布の上を流れてゐた。波に浚はれない爲めに用心して踞んでゐる乗組員は頭先から足の先までびしょ濡れになつてゐた。

さすがのトネットも顔色を變へ、齒を食ひ縛つてゐた。外の船ならいざ知らず、この船を以てこの荒海に乗り出したのは、全く正氣の沙汰ではなかつた。

然し「牧師」は部下の反對には耳を假さなかつた。あのでぶの悪魔は危険の中に立つて何とかあ圖づか太たくなつたことだらう！ 彼のだ、い、つ、廣い顔はいよ／＼荒れ狂ふ波に微笑んでゐた。そして彼は愉快な最後の盃を飲み乾して酒場の卓子を立つて來たかのやうに充血して眞赤な顔をしてゐた。彼の手は重い舵の把手をしかと握り、彼の太つた體は、船の舵から艫迄揺すぶり、苦悶の呻きを揚げさせる怖ろしい震動にも震へなかつた。

この呪はれた男は、カバニヤールでかくも嘲笑に値してゐた、あのお人好しの高笑を以て嘯ういてゐた。

「この位何でも無いことだ。くよくよするな！ よしこのぼろ船が航海に耐へなくなつてひつくり返つた所でそれがどうしたといふんだ！ さうすりや、酒場の法螺吹きぢや無い本當の男の度胸が試たせるわけだ。……そうらこの波に氣を付けろ！ ブルーン！ 何だい

過ぎちまやがつた。もし悪い波が來たらグラオの基督にもお暇乞だ。そして眼を閉ぢるんだ。兎に角地獄はこの世の中にあるんだぜ。お天道様の許きに行つちや飯も食はなきや、働きもしねえんだ。また人間で奴は長生した所で死なないわけにはいけねえよ。だから死ぬるからには、腐つて蛆蟲に食はれるよりや、あの威勢の良い鱈に食はれた方が餘程氣が利いてら……そうら又來た、氣を付けろ！」

「牧師」はボラカス親方の船で修業してゐた時分に覺えた人生觀の奧義をさらけ出し乍ら部下に説いた。彼の話を聞いてゐた唯一人の男はあの小僧の「猫」であつた。彼は恐怖のために眞蒼な顔して立つたまゝ、檣に獅嘯み付き、この光景の何事をも見のがすまいとあたりをきよろきよろと眺めてゐた。

夜の幕は下ろされた。「ガルボーサ號」は燈火を消し、怖しく上下に揺れ乍ら帆を半開にして走つてゐた。それは衝突を避ける事よりも他人に見付けられないやうに行く事がより大切であつたからだ。

それから一時間も経つと、「牧師」は彼方の波の上に躍り乍ら近づいて來る一つの光を見出した。それは彼等と反對の方角に向つて航行してゐる一隻の船であつた。

彼は暗闇のためによくその船を見る事は出来なかつた。然し本能的にそれは巡邏船に相違ないと思つた。沿岸に待ち疲れ、あのコロンブレータス島に避難してゐる密輸入者を捕へる爲めに勇氣を鼓し、この時化に逆つてやつて來たのであると考へた。で彼はさうと確信したので、一時舵から手を離した。そして彼等を馬鹿にして、その大きな手で二三度うその舵を引いて見せた。

「さあ、此方にお出で！」

乗組員は朝の一時になると、ロサリオ教會堂の燈を認めた。既にカベニールの沖に來たのであつた。その暗夜は荷揚にもつて、こいであつた。然し彼等が待ち構へてはゐないだらうか？

船が陸地に近づくに従つて「牧師」は先刻のやうな驚くべき沈着な態度を失つて來た。彼は餘りによくその近海の事を知つてゐたからであつた。其處に停つてゐたならば船は二時間と経たない内に潮流と風とに押され、東の防波堤に行つて碎けるか、もしくはナサレトの沖の洲に行つて乗り揚げるかといふ羽目にあつた。それかと云つて大海に引き返すことも不可能であつた。と云ふのはつい今しがた彼は船の響に依つて水が既に荷物を満載した

船艙に浸入してゐるのを感じいたからであつた。でも、もしもこゝ數時間大海を航行したら、波は船を木葉微塵に碎いてしまふかも知れなかつた。

たとへ危険を求めるにした所で、もうどうしても陸地に向つて進まねばならなかつた。で「ガルポーサ號」は風よりも寧ろ波に送られ、眞暗い海岸を指して一直線に走つた。

行手にあたつて三度火が輝いた。すると「牧師」とトネットは歡びの叫びを揚げた。

彼所に叔父が彼等を待つてゐたのであつた。そしてあの火はその信號であつた。叔父が多くの密輸入者のするやうに海からだけしか見えないやうに、背中に擴げたマントの陰で三本の燐寸を摩つたのであつた。

「ガルポーサ號」は杯に帆を張つた。それは全く氣違ひ沙汰であつた。船は龍骨を露はすかと思ふと忽ち波の中に沈めつゝ飛行した。左右前後に激動し乍ら奔馬のやうに走つた。輕快たる海の響は益々高まつた。遂に白い波頭を立てた濤の彼方にあたつて鬨い多くの人影さへも見える濱が現はれて來た。と忽ち怖ろしい衝動を感じた。——船は粉碎したかのやうな爆音を擧げて停つた。烈風は帆を裂いた。そして海水が凄じい勢で甲板に侵入して人々を倒し、荷物を浚つた。岸から數米突の所に坐礁してゐたのであつた。

と、亡霊のやうに無言な黝い影の一群が船に飛び上つて來た。そして彼等は正氣を失つてゐる水夫達には一言も云はないで包に手をかけた。すると荷物は船から岸まで延ばされてゐる黒い腕の連鎖に依つて、手から手へと渡つて行つた。

「叔父さん！叔父さん」と、「牧師」はやつと胸にも達しない程の水の中に飛び込んで叫んだ。

「此處に居るぞ！ 靜かにしろ！ さあ、荷役だ！」——といふ聲が岸から應へた。

それは全く不思議な、まるで夢のやうな光景であつた。

暗黒の中に轟々と吼える海、埋もつた巨人の毛髪のやうに海風に靡いた濱の蘆、陸を一呑みにしさうに押寄せる怒濤、刻々に破れ行く船から包を取り出し、又泡立つ水の中にそれを拾つて蹴鞠の如くに岸に運んでゐるあの無言に攷々として働く黝い悪魔の一群、包が地に呑まれるやうに岸に消え行く光景。

時々濱風が吹き止むと、遠ざかり行く車の軋る音が聞えた。

「牧師」は、大きな雨靴を穿き、手に拳銃を持つた叔父のマリアーノが強い鋭い聲で命令しながら歩き廻つてゐるのを見出した。

何も警戒するには及ばなかつた。——近邊の監視達はみんな賄賂を貰つてゐたので監視長が來たら知らせようと思つてゐるのであつた。然し少しも油斷のならないのは、あの荷役をしてゐる無言の男共であつた。彼等は「泥棒の物は盗み勝ち」と言ふ風に考へて、どさくさまざれに一儲けしようと思ふ頗る手の素早い連中であつたから。然しマリアーノ叔父の目を盗まうと思ふ者は無かつたらう。包一つでも誤魔化さうとした者は、一發の下に打ち殺される恐れがあつたからであつた。

荷揚はまるで夢のやうに行はれた。「牧師」があゝの坐礁の際の怖しい感動から靜まり、打ち傷の痛も和らいだ時分には、もう最後の車が出てしまつてゐた。荷揚人足達は一言も云はないで、砂の中に消えたかのやうに方々に姿を隠してしまつた。

唯一つの包も失はれなかつた。船艙の底にあつたもの迄も、砂の中に埋もつた船の破れた肋骨の間から取り出された。

トネットと外の水夫達は帆とそれから船に残つてゐて、未だ使へる僅かな物を擔いで歸つて行つた。

「猫」は坐礁の際に、船から墜落して溺死しようとする所を救はれたのであつた。

「牧師」は叔父と二人切りになると抱擁して云つた。

「おゝマリアーノ叔父さん！ これで叔父さんにも話が出来ると云ふもんです……随分とえらい目に遭ひましたよ。でも神様のお蔭で何もかも甘く行きました。後は荷物の處分をすればいいわけです。どうです！ 立派にやつて見せましたらう。さあこれから歸つて私に甘く儲けさせてくれたドロレスと一緒に寝ませう。」

それから彼はあの哀れた「ガルボーサ號」には最後の一瞥も呉れずに、叔父と一緒に遠いカバニヤールを指して歸つて行つた。

船は砂の中に半ば埋つて、波に胴を叩かれ乍ら、其處で粉碎してゐた。その打撃を受ける毎に、船體は崩れて、内臓の断片のやうなものが波に漂ひ出て流れてゐた。

あゝして永い生涯を通じ、人にこき使はれた擧句、何等の光榮にも浴せず、闇の中に葬り去られるのであつた。それは例へば道の真中に捨てられ、鳥の群の餌食になつて、白骨を晒す老馬の最後のやうであつた。

七

それから數日を経過した。マリアーノはあの事業の収益として一萬二千レアーレスばかりの金を「牧師」に手渡した。

「牧師」はそれ以外により以上のものを得た。——それは叔父の彼に對する尊敬であつた。彼は甥が無事にあの至難な任務を果たしたのに感服して彼を、使へる男と見做したのであつた。それからこの度の成功を知つた海岸の人々の稱讚であつた。

彼がコロンブレータス島を出た事は頗る良い處置であつた。——巡邏船が沈没の危険を冒して、其處に行つた時にはもう彼等の隻影をも見出すことが出来なかつたのであつた。「牧師」は意外なる富を贏ちえて有頂天になつた。

あの密輸入の收穫と、少しづつ積んで置いた貯蓄——彼と妻のドロレスだけしか知らない場所に藏つてある——とを一緒にすると、それは一人の着實な男として何かの事業に投資するに餘りある程な金額であつた。

その何かの事業といふのは無論海上にあつた。何故なら叔父のやうに陸で貧乏人相手に

金を儲けるといふ事は彼の性質に合はなかつたからである。

「密輸入の事はもう考へてはならない。一度だけで澤山である。丁度何か始めようとする者に取つて何時も緒になる博奕のやうなものである。——もうあんな冒険をしてはならない。俺のやうな男にはやつぱり漁業が一番だ。然し自分自身の腹でやらなくつちやならない。家の中に坐つてゐる船主に、一番甘い汁を吸はれるのぢやかなはないから。」と彼は考へた。

彼はその晩床の中でもがき乍ら妻の眠るのを妨げて、彼女にも相談し、考へあぐんだ擧句、とう／＼その金で一艘の船を造らうと決心した。然しそれはどんな船でも、といふのではなかつた。出来るならあの牛小舎の沖を航海する總ての船の中で一番上等の船を造らうといふのであつた。

今やその時は来た！ 彼はもう水夫でも亦備ひの船頭でも無くならうとするのであつた。船主にならうとするのであつた。そしてその身分の表象として、網を乾す爲めに村で一番高い橋を家の門の前に建てようと云ふのであつた。

「貴方達は知つてるの？」「牧師」は船を造るんですつて。だからお金持になつた別嬪のド

ローレスがもし尙ほ市場に行くとするや、今度は自分とこの魚を賣るんですぜ！」

さう風聞をしてゐる近所の女達はガス運河の側を通りすがりに船大工の小舎をのぞいて嫉ましさうに「牧師」の事を思つた。彼は新しい船にする生々しい脂つばい黄色の材木——眞直で丈夫さうなのや、曲つて弱さうなもの——を挽いたり切つたりしてゐる大工を、口に葉巻を啣へ乍ら終日監督してゐた。

仕事は徐々に進んで行つた。彼は俄かづくりを戒めてゐた。又何もさう急ぐ必要は無かつた。ただ彼の唯一の望は自分の船がカバニール一番のものであるやうに、といふ事であつた。

彼がかうして船の製造に心を注いでゐる間に、トネットは、兄に出来るだけ餘計に取らせず貰つた密輸入の収益の分け前で大まかに暮してゐた。

彼と妻のロサリオとが何時も断えない争鬭や打擲の内に惨めな生活をしてゐた古い小舎には、あの冒険が成功したからと云つて別に富裕を齎らさなかつた。不幸な妻は相變らず毎日夜明け方に魚の籠を擔いでヴァレンシアや又屢々トレンタやベテラ迄も徒歩で行つてゐた。そして商賣の思はしくない時には自分の小舎に唯獨りで倦怠と困窮を友として日を過

とした。併しトネットは新調の服を着け、今迄にない立派な青年に成り澄ました。そして友達と一緒に賭博場で數ベセータの金を賭ける爲めか、もしくは漁夫街で馬鹿騒ぎをしにヴァレンシアに行かなければ、ポケットに一杯銀貨を入れてカフェーに入り浸つてゐた。それでゐて彼は叔父に會ふと彼から強請る特權を失はないために、嘗て港で荷揚人足をやつてゐたあの貧窮時代の事を喋べつた。

彼はかうして、幸福だつた結婚當座に立ち返つたやうなその俄かな富裕に感溺した。そして先の事は少しも考へずに又女道樂を始め、兄のくれた金が今に無くなるといふ事は考へなかつた。その僅かな金も友達が彼に振舞つて呉れたり又賭博に勝つたりしなかつたら、もうとうに無くなつてゐる筈であつた。

彼は夜も餘程更けてから、小舎に歸つて來た。そしてロサリオが少しでも小言を云はうものなら今にも撲りつけさうにぶつぶつ云ひ乍ら不機嫌で床に就くのが常であつた。

彼の妻は屢々夫の顔を二日も三日も續いて見ないことがあつた。然し彼は兄の家には引切りなしに行つてゐた。そして「牧師」がゐないと、臺所でドロレスの側に坐り、ぺこぺこ頭を下げ乍ら、彼女がロサリオを非難するのを聞いてゐた。

かうして彼女が悪口を云つてゐる最中に「牧師」が入つて來ると、實に甘い事を云ふのであつた。

「ねえお前さん、彼女が眞面目な女だし、それに私、彼女が可哀想だと思へばこそかうして云ひ聞かせてやるのよ。かりにも自分の弟があゝ道樂をして世間にかれこれ云はれるのを黙つて見てゐるわけには行かないわよ。」

お人好しの「牧師」は、ドロレスが道樂者の弟に對して本當の母のやうに殊勝らしく戒めてゐるのを見てすつかり安心した。何と圖太い女だらう！

トネットは金が無くなるに従つて一層頻繁に兄の家に入つて來た。ドロレスがしてくれるあの「慈母のやうな忠告」を大に利用したのであつた。そして世間の者にかれこれと風聞を立てられないために、時々兄に従つて大工小舎に出掛けて行つた。そしてあの大きな木の骸骨が次第に船になつて行くのを見成つてゐた。大工は今、胴板を打ち付けてゐた。その立派な外郭は斷え間ない槌や鋸や鉋の響の下に形造られて行つた。

かれこれする内に夏は來た。

不斷寂れてゐるガス運河と港との間の海濱には多くの掛小舎が作られて、ざわめき始めた。都會中の人がこの濱に避暑に来て、其處には俄か作りの本當の都會が出来上つた。

周圍を色染の厚布カシバで圍ひ、茅で屋根を葺いた水泳者の小舎が水際に眞直な列を作つてゐた。それは萬國旗で飾られ、大袈裟な題目を見せた看板が掛けられてあつた。その外小舎の見分けを付けるための滑稽な目標として、正面に人形や玩具や小さな舟などが吊されてあつた。その後ろには海の空氣が胃に起させた食慾を満たすため、多くの小料理店が散在してゐた。そのあるものは段梯子や前庭テラスを備へて中々物々しい外觀を呈してゐた。然しその何れも舞臺の背景のやうに弱々しいものばかりであつた。が、その建物の貧弱さと料理場の祕密とは素晴らしい看板に依つて補はれてゐた。「巴里料理店」だとか「佳味亭」などと云ふのもあつた。

これらの夏場だけにやつて來るいか物料理屋の間には土地の人の開いた食堂もあつた。その入口には席の目隠しを下げ、中には中央に一つの徳利を置いたがたがたの卓子が列んでゐた。竈は露天に置かれてあつた。それらの食堂は「ナップ」だとか「サルヴァオール・イ・ネレータ」だとか出鱈目な文字で綴られた看板を物々しく掲げてゐた。そしてサン・フアンの

日(五月六日)から九月迄蝸牛の煮物を一品料理として食はせてゐた。

秋風が吹き初めると煙のやうに消えてしまふこの俄か造りの街の中を電車や汽車が汽笛を鳴らしながら通つてゐた。馬車もその赤い窓掛けを晴やかに旗のやうにひら／＼させ乍ら走つてゐた。人々は夜の更けるまで蜂の巢のやうな雑音を立て乍ら集まつてゐた。そのざわめきの中には菓子賣の呼聲、小オルガンの哀調、ギターの甲高い音、カスターニットの諧調、手風琴の烈しい鼻音などが、ごつちやに聞えてゐた。その音に合わせて白い衣を着け顚顚に卷毛を作つた若者達が躍り狂つてゐた。この人達は、海に入らないで、内風呂を使つてしまふと上機嫌でヴァレンシアに歸つて行くのであつた。そしてその途中で双物騒ぎをしたり、道で會ふ巡查の横面を張つたりし兼ねないと云ふ有難い連中であつた。

漁夫達は運河の向う側からあの賑やかな闖入者の騒ぎを眺めてゐた。そして彼等の仲間には入らなかつた。「何とあの人達の楽しさうな事だらう！ その季節はカバニャールに取つて、一年中の乳を與へてくれる太つた牝牛のやうであつた。」

八月の初めやつとの事で「牧師」の船は一通り出来上つた。「まるで寶玉だ！」彼は孫の發

育を見成る祖父のやうに自分の船に就いて語つた。その用材は選りに選り抜いたものであつた。その櫓は眞直で滑か節一つ無かつた。胴は波によく耐へるために可成り膨らんでゐた。然し舳はまるで剃刀のやうに鋭く尖つてゐた。船側は紳士の靴のやうに黒塗りでワニス引かれてびかびか光つてゐた。船腹は丁度鰻の腹のやうに眩しい程の白さであつた。彼の船は先づこんな風であつた。

もう網類と網とその他の附屬品を缺くばかりであつた。その爲めには濱で一番上手な網師が働いてゐる所であつた。で八月の十五日迄には船はすつかり出来上つて、頭先から足の先まで新しい物づくめで嫁がうと云ふ花嫁のやうに美しくなる事が出来るのであつた。

これは彼が或る晩の事、家の門の前に家族と車座に坐つてゐる時に云つた事であつた。彼は母と妹のロセータを晩餐に招いたのであつた。ドローレスは彼の側に坐つてゐた。

そこから少し離れた處にトネットが橄欖樹の幹を背にして網張りの小椅子に腰掛けてゐた。彼は石版畫でよく見る中世紀頃の詩人のやうな顔付きをして、粉を吹いた枝葉越しに月を眺め乍ら、ギタールを爪弾きしてゐた。

其處から數歩離れた鋪石の上には魚を一杯に入れた大きな鍋が、小さな土竈の上で煮え

てゐた。近所の子供達は犬を追驅けながら泥水の溜の中を走り廻つてゐた。どの家の門の前にも家族が海から吹いて來る微かな風を求めて小さな集まりを作つてゐた。ヴァレンシアはどんなに暑かつた事だらう！

シーニ・トーナはもう餘程年取つてゐた。全く彼女自身が云つたやうにがらりと變つたのであつた。あの若々しく見えた肥滿から俄かに凋落に入つて行つたのであつた。月の生々しい青味を帯びた光に髪の毛の少なくなつた彼女の頭の地が透いて見えた。その淡紅色の頂骨の上にはごはくした白髪が目荒い格子のやうに列んでゐた。顔は皺だらけで、頬の肉は弛んでだらりと垂れ下つてゐた。あんなに濱の若者を騒がせた例の黒眼も、もう光澤氣を失つて寂しく、今にも隠れさうに水脹れした目蓋の間から覗いてゐた。かうした凋落は色々な心配から來たのであつた。

「ほんとに男達は私に心配を掛けたこと！」

息子のトネットに向つてさう云つたものゝ心の中ではあの税關監視の事を考へてゐたに違ひなかつた。

それに商賣は益々悪くなつて來た。海濱の彼女の酒場は苦境に陥つた。で娘のロセータ

は煙草の工場に遣らなければならなかつた。娘は毎朝、手籃を腕にかけて工場のあるヴァレンシアの道をたどつてゐた。途中で、靴音高く、袴スカトを靡かせ乍ら、やつぱりあの舊税關の建物の煙草の香に満たされた空氣の中で噓しに行く他の可愛いお轉婆娘達と一緒にゐた。

「ロセータめ、名前に恥ぢない、娘になつた！」

彼女の母はさう思ひ乍ら幾度か盗み目に彼女を眺めた。そして娘の内にあのシニョール・マルチーネスの立派さが存在してゐるのに氣が付いた。

こんな冬の朝でも娘を工場に遣らなければならぬと泣き言を云つたその朝のこと、トナは橄欖樹の下に立つてゐる娘を眺めた。——彼女の金髪は美しく波打つてゐた。眼はぢつと何物かを見つめてゐた。顔は日光や潮風にも焼けないで白かつた。そしてあの娘の顔の上には木の間に洩れる月影が唐草模様を描いてゐた。

ロセータは何でも知つてゐる處女の寂しい眼をぢつと据ゑて、ドローレスとトネットとを見比べてゐた。「牧師」は弟があのはでやかな生活を捨て、彼の家では得られない閑靜を樂しむために、又忠告を聞くために、自分の家に頻繁に来るやうになつたことを賞めた。す

るとロセータはそれを聞いて皮肉な微笑を見せた。

「男つて仕方の無いものだ！ トネットみたいに道樂をしないと、パスタァーロみたいに馬鹿だからね。——これはあの親娘おやこが断えず云つてゐることであつた。こんなわけで彼女は總ての男を憎んでゐた。そして彼女に云ひ寄るものがあつても、決して聽き容れなかつたので、カバニール村中の賞め者になつてゐた。彼女は男と何のかゝはりもなく居りたかつた。そして母があの一つそりとした船の中で失望の瞬間に怒鳴つた呪の言葉が、彼女の記憶に甦つて來るのであつた。

家族の集りには常に沈黙が支配してゐた。鍋の中では魚がぐつぐつと煮えてゐた。トネットはギターで出鱈目な曲を弾いてゐた。賑かな子供の一團が水溜の中に立ちながら、初めて見るやうな驚きの眼を以て月を眺めてゐた。そして彼等は銀の鈴のやうな聲を立てながら、單調な小唄を歌つてゐた。

「お月様と梅の實、

喪服を着けて……」

「お、黙らないかい？」トネットは頭痛がしてゐたのでうるさがつてさう云つた。然しい

つかぬ聞かなかつた。

「お父さんは我鳴る……」

お母さんは聞かない……」

野良犬は、ディアーナ(光明の女神)に捧げる子供達の喧しい唱歌に合わせて、何處かで高く吼えてゐた。

「牧師」は自分の船に就いて話し続けた。

「八月十五日の準備はもうすつかり整つた。牧師さんまで午後の半ば頃に來てお祈りしてくれることになつてゐる。あゝそれはさうと、まだ忘れたものがあつた……ちつとも考へなかつたが、まだ名前がついてないんだ。何と叫ぼうかなあ？」

この計らざる問題で一同は活氣づいた。トネットまでもギタールを地に置いて、何か考へる様子であつた。

「そうら見付かつた！」

彼の亂暴な氣質と國王の海軍にゐた時分の想出とが、彼にある暗示を與へたのであつた。「吐鐵號と呼ぶんだ。どうだ、いゝ名前ぢやないか？」

併し女達が反對した。

「そんな名前は……カバニヤールの人達が嘔き出してしまふよ。漁船が一體どんな鐵を吐くの？」

「私のが何と云つても一等さ……」と云つて、トーナが一つの名を出した。それは、彼女の夫のパスクアローが倒れた後、全家族の避難所に役立つところの前の船の名をそのまま「輕快號」と叫ぼうと云ふのであつた。

これには一同が反對した。

「そんな名前を付けたら、碌な事のないのはきまつてら。前の船の運命が論より證據だ。」ドローレスのつけた名はまだよかつた。「海の薔薇」といふのであつた。

何と美しい名だらう！「牧師」の妻は總てのものに良い趣味を持つてゐるのだつた。然し「牧師」は別にそれと同じ名の船のある事を思ひ出して云つた。

「惜しいなあ……」

ロセータは黙り込んで、他人が名前を擧げる度に氣に食はないといふ風をしてゐたが、遂に自分のを云ひ出した。それは「五月の花」と叫ぶに限ると云ふのであつた。彼女は丁度

その夕方の事、海濱の船の中でデブラルタルから来る「五月の花」といふ煙草の袋に貼つてあるレットルを見て思ひ付いた。白い短い袴ズボンの上にトマトのやうな眞赤な薔薇を付け、手には大根のやうな花の束を持ち、踊り子のやうな装をした娘の商標の上に、色さまざまの文字で極光オーロラ状に書かれてあるあの美しい名が彼女を魅惑したのであつた。

「牧師」は大喜びだつた。

「さうだ、これはほんとに似合はしい名だ。では俺の船を「五月の花」と呼ぼう、あのデブラルタルで造られる煙草のやうに。全くの所、あの船は主に密輸入の荷物の金で造られたんだ。それにあの荷物の大部分は例の華やかな娘の付いた袋だつたんだ。ロセータの云ふ通りだ。「五月の花」。「五月の花」に限る。」

その船の名には、一同が賛成した。それは優しくつて綺麗だと云つた。彼等の素朴な想像力のうちに詩的情緒がわき起つた。そして彼等はこの名が、昔迫害された英國の新教徒プロテスタントを亞米利加の岸に運び、世界最大の共和國にしたところの船の名であるといふことは思ひも掛けなかつたけれど、何となく人を牽き付ける神祕なものであると思つた。

「牧師」はすつかり感心した。

「ロセータは豪儀だなあ。所でみなの方、これから飯を食べることにしよう。それがすんだら「五月の花」の爲めに乾杯を挙げようぢやないか！」

彼の子のバスクレットは、みなの方が魚の鍋を持つて家に入るのを見ると、子供達の合唱の仲間を離れた。するとあの「お月様と梅の實」の單調な唱歌は止んでしまつた。

それからそれへと傳へられて、カバニール村中の人々は彼の船が「五月の花」と呼ばれるやうになつた事を知つてしまつた。

進水式の前日、船が牛小舎の前の水際に運ばれた時には、もう艦板の下の方に、優しい船の名が美しい青ペンキで書かれてあつた。

その翌日の午後には、小舎街が日曜のやうに賑はつた。あんな賑ひはほんとうに珍らしかつた。船の教父は云ふまでもなく、「カイヤオ」事、マリアーノ氏であつた。不斷はけちなこの金持ちも今日は甥を祝ふために大に散財しようとした、濱では菓子が惜しげもなく配られ、盃は神の恵のやうに廻された。

「牧師」はその儀式をうまく進行させることを知つてゐた。彼は全乗組員を引き連れ、牧師ドン・サンチアゴを伴うて海岸に来るために教會堂へ出掛けて行つた。牧師は善良なる

教區民に對してするやうな微笑を以て彼を迎へた。

「何？　もう時間ですかい？　では聖器守サクリスタを呼んで聖水瓶と灌水刷毛を整へさせて貰はうか。私の準備は直ぐに出来る。法衣ロケイをひつ掛ければいいんだから。」

バスターローは機嫌を損ねて云つた。

「法衣ロケイを召していらつしやるのですか？　それは被覆カクでなくつちや。それも一番いいのを願ひしたいものですなあ。私の船の洗禮はありふれた儀式とは違ひますぜ。それにお入用なものは幾らでも、お拂ひしますから。」

ドン・サンチアゴは微笑んで見せた。

「よろしいとも、よろしいとも。被覆カクはそくはないけれど、お前さんのためにさうして上げよう。お前さんは善い信者で他人に對して親切だから。」

やがて一同は牧師の家を出掛けた。灌水刷毛と聖水瓶を持つた聖器守サクリスタが先頭に立ち、その後にはドン・サンチアゴが船主と水夫達を従へて續いた。彼は一方の手に祈禱書を持ち他の一方の手では泥土の上を引き摺らないやうに被覆カクの端を掲げてゐた。それは緑を帯びた金糸で刺繡の澤山してある、光澤氣のない、舊いけれど素晴らしいものであつた。そして

そのほぐれた横糸の間からは、縫ひ飾りのついた裏地が覗いてゐた。

子供達はばら／＼と走り寄つて、濡れた鼻を摩りつけながらその聖手に接吻した。すると牧師はその度毎に掲げてゐる被覆カクを離さなければならなかつた。村の女達はあの快活な辛抱強い、そして中々するい所のある牧師に微笑を見せながら挨拶した。實際彼は自分の「小羊共」の習慣に従ふ事をよく知つてゐた。彼は屢々信心深い魚賣達の或る一人の爲め、途の眞中に停められて、その求むるまゝに、不正の秤量を使つてもヴァレンシアの巡查共に捕らとらないやうに魚籃や秤を祈禱してやつた。

一行が海濱に出て來ると、鐘が撞き出された。その楽しい音律は波の呟きの中に溶け込んだ。人々はその儀式を見逃がしてはならないと濱を走つて來た。彼方の何も置かれて無い空地の砂の上には「五月の花」號が雄姿を見せてゐた。その周圍には人々が黒山をなして集つてゐた。塗り立てで、びか／＼と光る船體は太陽の光を浴びて、その兩舷が鍍金したやうに輝き、高い、心持ち前に傾いた檣は青空を摩してゐた。その絶頂には、新造船の表徴たる草と造花の一束が風に揺らいでゐた。それは暴風の爲めに吹き飛ばされる迄はそこに残つてゐる筈であつた。

「牧師」と彼の部下の者は船の周囲にひしめいてゐる群衆を押しつけて牧師を通した。船の前には教父母が控へてゐた。教母になつたトーナは新しい肩掛と新しい袴を着けてゐた。マリアーノ氏は知事に陳述の爲めヴァレンシアに行く時と少しも變らない扮装で、帽子を被り、杖を突き、立派な紳士になり澄ましてゐた。

彼の家族らは、何れも衆目をあつめるほどの素晴らしい服装をしてゐた。——ドロレスは薔薇色の着物を着け、首には派手な色彩の手巾を巻き、指には澤山の指輪を嵌めてゐた。トネットは新調の上衣を着け、赤い頭巾を横に被つて、甲板の上を濶歩してゐた。彼はその高い處で好い娘子達の稱讚の的になつてゐる自分自身を見出すと、頗る得意になつて小さな口髭を捻り上げるのだつた。その下ではロセータの側に彼の妻のロサリオが控へてゐた。彼女はこの莊嚴な儀式のためにドロレスとは一時仲直りをし、一張雜を着けて列席したのであつた。

それから「牧師」と見ると、彼は船の機關士にグラスコーから買つて來て貰つた純毛の青い服を着け、立派な英國紳士になり澄ましてゐた。チョコッキ——生れて初めて着けた——の上には彼の船の鎖ほどもある大きな金びかの二重鎖を見せてゐた。彼はその立派な冬服

の下で、だら／＼汗を流してゐた。そして群衆が牧師と教父母を押し潰さないようにするために、肘で人々を押し除けてゐた。

「さあ皆さん！ もつと靜かにして貰ひませう！ 船の洗禮式は笑ひごとぢやないんだから。それが濟んでしまへば、大に祝つて貰ひますがね。」

それから重い被覆の下で彼同様に汗をかいてゐた牧師が「おゝ天なる神よ！ 吾等が祈りを聴き終へ、この船を祝福し給へ」といふ句を搜すために、祈禱書をめぐりはじめると、バスクアローは、不謹慎な群衆に見せつけるため、物體らしく帽子を取つた。

莊重な顔付をした教父母は、牧師の兩側に控へて地を睨んでゐた。聖器守は牧師の云ふ總ての言葉に對して、「アーメン」を以て應へようと待ち構へてゐた。

ドン・サンチアゴはこの公衆の氣持をよく知つてゐた。彼はこの簡単な祈禱を落ちつき拂つて讀み始めた。そしてこの、あたりを拂ふ沈黙の中で、嚴かに語句を切り乍ら羅典語の文字を拾ひ讀みした。「牧師」は感動の極、氣がふれたかのやうに、祈禱の一句一句に頭をぺこぺこ下げてゐた。それはあだかも牧師が「五月の花」に向つて羅典語で云つてゐる文句を呑み下してゐるやうに見えた。

彼が了解することの出来た唯一の句は「洪水に於けるノアの方船」といふのであつた。彼の船は基督教で有名な方船に喩へられたので、彼は世界最初の水夫たるあの快活な先祖と手に手を執つてゐるのだと云ふやうな空想を起して、涌き起る自負心を抑へることが出来なかつた。

シーニ・トーナは手巾を眼に蔽うて涙を拭つてゐた。

祈禱は終つた。牧師は灌水刷毛を執り上げた。

「浄め給へ！……」

彼はさう云つて水滴を體に撒きかけると、水は小さな滴になつて塗板の上に垂れた。それからドン・サンチアゴは聖器守の「アーメン」に何時ものやうに従ひ、道を開く船主を先頭に立て、灌水と羅典語の文句を撒き散らしながら船を一廻りした。

「牧師」はもうこれで儀式が済んだのだと信ずることが出来なかつた。彼は未だ上の甲板や船艙の底迄も祝福して貰はなければ氣が済まなかつた。

「さあ、ドン・サンチアゴさん、もうちよつと奮發して下さい。」

牧師は船主が、するだけの事はするに違ひないといふ事をよく知つてゐた。で彼はその

懇願的な態度の前に微笑しながら、船側に備へられた梯子に近づいた。そしてあの厄介な被覆を引き摺りながら登り始めた。それは午後の太陽の光を浴びて、遠くから見ると木に攀ち昇つてゐる光澤の良い甲蟲の殻のやうであつた。

祝福の儀式は済んだ。牧師は聖器守だけを連れて退場した。すると群衆は突貫でもするやうに、どつとばかり船のまはりに押し寄せた。

「それ、うんと暴れろ！」其處にはカパニヤール村中の不良少年が集つてゐた。彼等は髪を亂し、喉を枯らしながら、教父母に向つて聲を限りに喚き立てた。

「扁桃をお呉れ！ 菓子をお呉れ！」

マリアーノ氏は、甲板の上から、鷹揚に微笑して見せた。「今、お前たちに甘いものをやるぞ！」

彼は甥を祝つてやるために一オンスの金を使つたのであつた。遂に彼は腰を屈めて足元に置いてあつた箆の中に手を突込んだ。

「そら、拾へ！」

彈丸のやうに堅い菓子から成立つた機關銃の第一發が、あの喧しい群衆の上に浴びせか